

袖ヶ浦市指定文化財

小高神社本殿解体修理工事報告書

序 文

袖ヶ浦市は温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、太古から人々の暮らしが営まれてまいりました。そこで暮らす人々は安定した豊かな生活を願い、祈りを込めて多くの神社が創建されました。

今回、解体修理工事を行った小高神社本殿は、その縁起を辿れば日本武尊の東方遠征に遡り、西暦九八六年に現在の場所へ建てられたと伝えられております。滝の口の人々にとつては、祖先と繋がる場所であり、子孫へ伝える大切な社です。

そのような歴史ある小高神社本殿は、袖ヶ浦市の貴重な文化遺産として平成四年に市指定文化財となりました。しかし、長年の風雨による本殿の傷みは年々進行しておりました。解体修復を求める声は多く、その必要性は誰もが認めるところでしたが、多額の費用を必要とすることから、実現は困難でした。そのような状況でも諦めることなく、地元の方々の熱意により着工を迎え、昨年度、無事に竣工の日を迎えることができました。

文化財を保護すること、これは行政に課せられた課題です。しかし、そのためには行政だけではなく、地元の方のご理解とご協力が無ければ実施できません。豊かな生活を求めるなかで失われていく文化財が多い昨今、この小高神社は氏子の皆さまをはじめとした地元の方の多くの支えにより、その姿を復元させることができました。文化財の保護を進める上で、これ以上の喜びはありません。今後もこの社が滝の口の人々を見守り続けることを切に願います。

最後になりますが、本工事に多くの助言を賜りました日塔和彦様、並びに袖ヶ浦市文化財審議会委員の方々、神主である千葉一男様、氏子総代の方々、また地域においてこの神社を守り、受け継いできた滝の口の人々に心よりの敬意と感謝を申し上げます。

平成二十六年三月

袖ヶ浦市教育委員会
教育長 川島 悟

目次

[illegible]

.....

[illegible]

[illegible]

凡 例

- (一) この報告書は、袖ヶ浦市指定文化財小高神社本殿の解体修理にかかわる調査、工事の記録をまとめたものである。
- (二) 本書は、挿図、表を含む本文と写真、図面とで構成される。
- (三) 本文および図面中の寸法単位は、尺貫法を原則とし、必要に応じてメートル法を用いた。
- (四) 本文執筆は次の通りである。
 - 第一章 日塔和彦
 - 第二章以下 岩瀬繁、田束優
- (五) 挿図・表 田束優、竹澤弘貴
- (六) 写真は、岩瀬建築有限会社が撮影した。
 - 竣工および修理前図面は、田束優、竹澤弘貴が作成した。
 - 本工事全般にわたり日塔和彦氏に御指導を賜った。樹種判定調査については中尾七重氏の協力を得た。
- (七) 本文中では敬称を省略した。



1b



1a



1d



1c

1 小高神社本殿全景 1a 東側面 1b 西側面 1c 東側面と背面 1d 西側面と背面

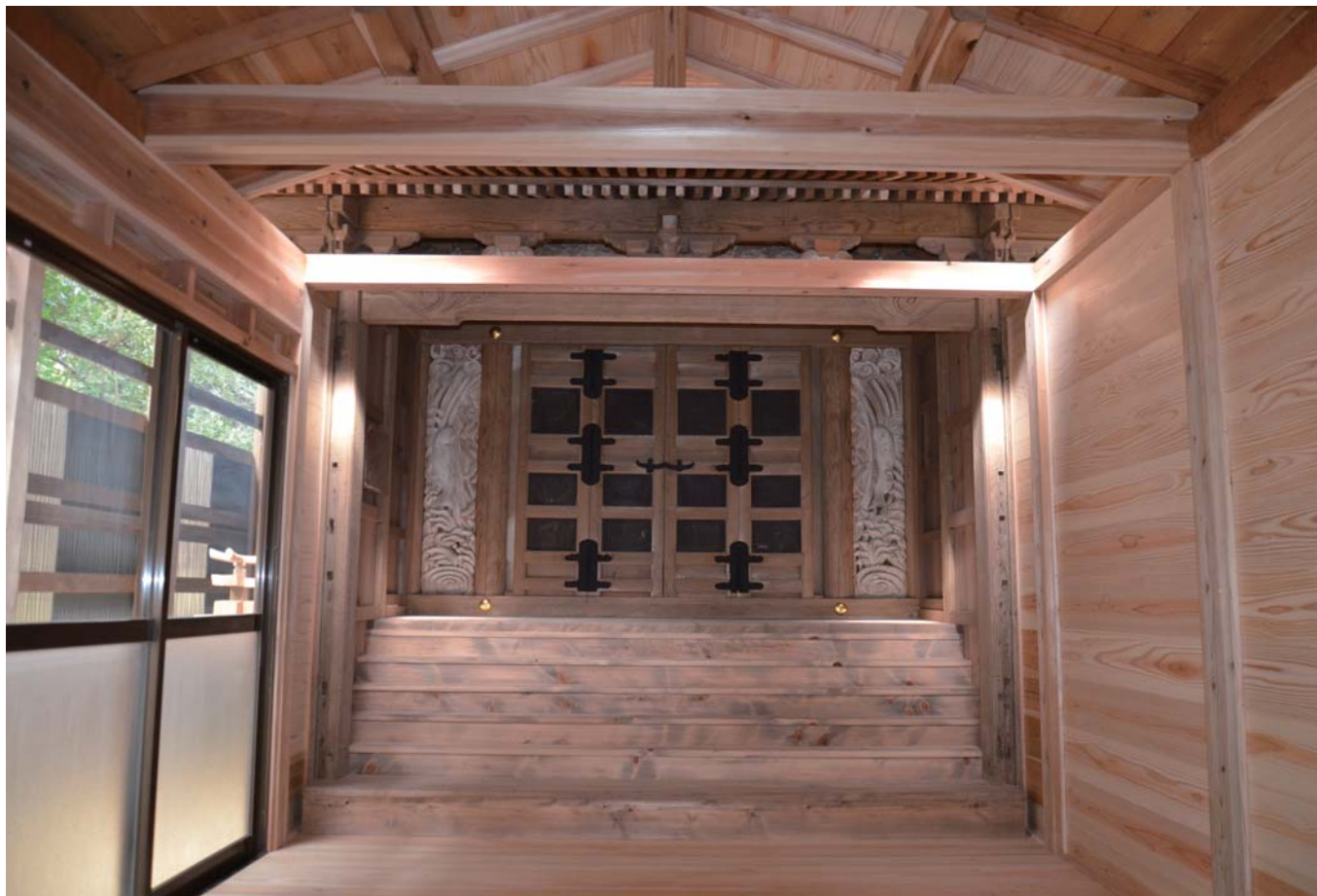


2a



2b

2 妻詳細 2a 東側面 2b 西側面



3a



3b

3 正面 3a 向拝正面 3b 身舎正面



4a



4b

4 屋根 4a 正面 4b 背面



5b



5a



5d



5c

5 5a 東面脇障子 5b 西面脇障子 5c 正面脇縁上 5d 本殿覆屋と幣殿



6b



6a



6d



6c

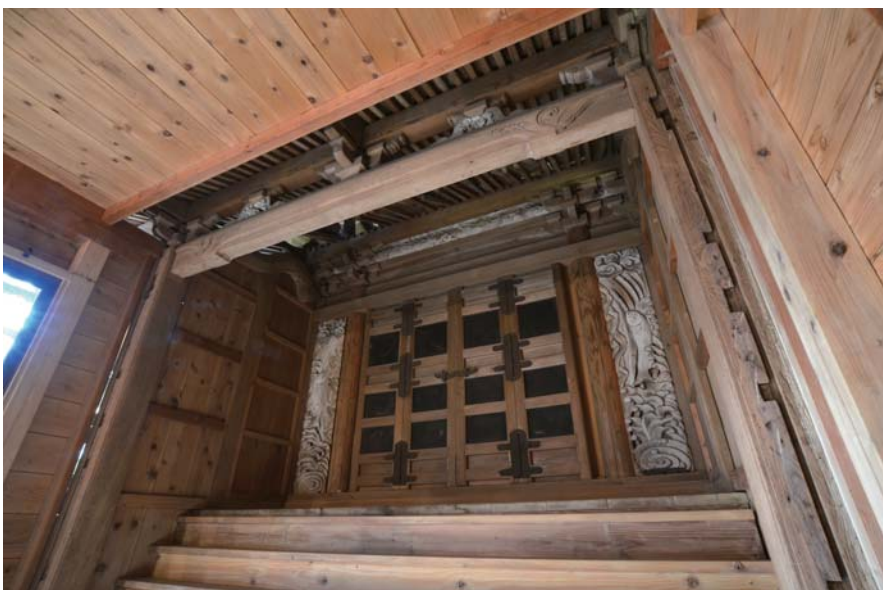
6 修理前本殿 6a 西側面 6b 背面 6c 東側面 6d 西側面



7a



7b



7c

7 修理前 7a 西妻詳細 7b 向拝正面 7c 身舎正面



8a



8b



8c

8 修理前 8a 正面屋根 8b 正面屋根 8c 背面軒廻り



9a

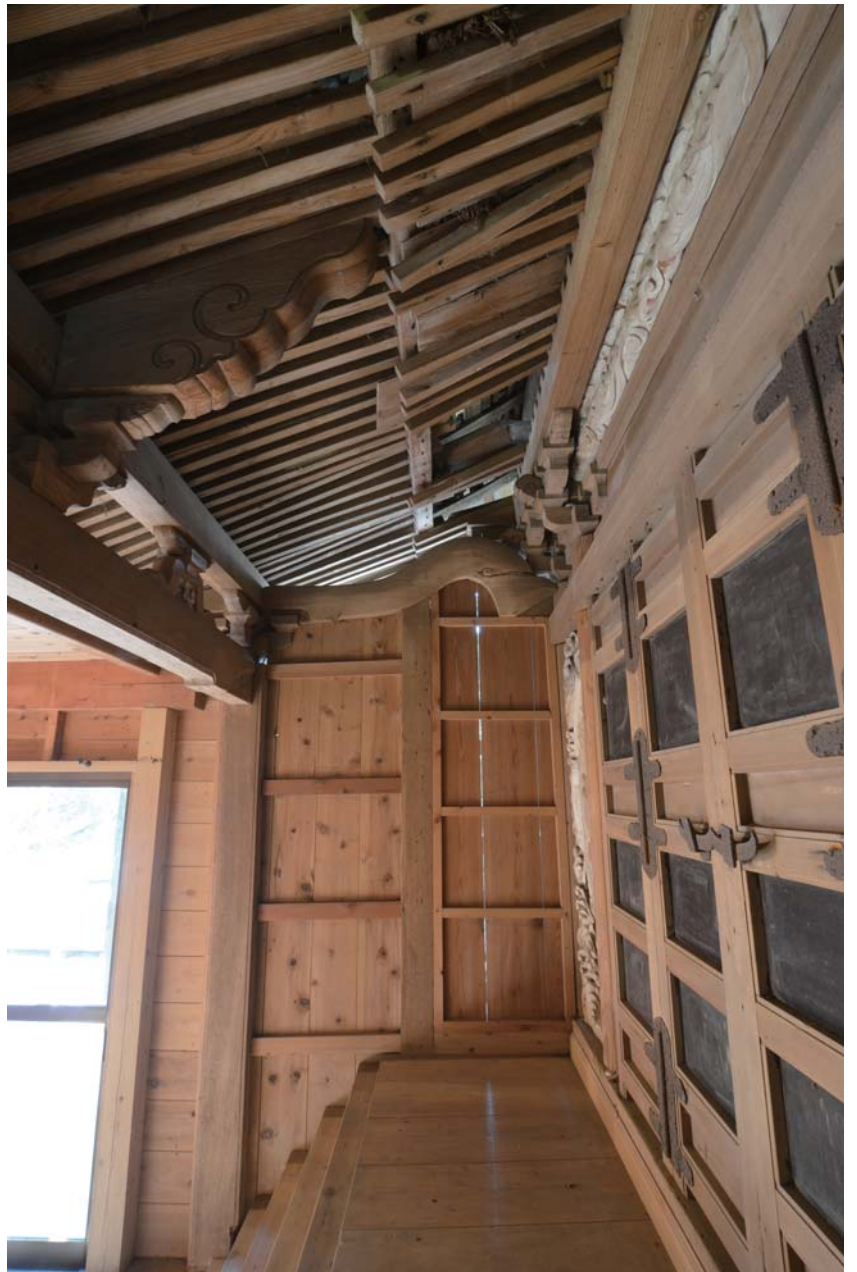


9c



9b

9 修理前 9a 背面腰組 9b 東面腰組 9c 西面腰組



10a



10b

10 修理前 10a 身舎正面と向拝、正面脇縁上 10b 本殿覆屋と幣殿

第一章 小高神社と本殿の概要

一 袖ヶ浦市の自然と歴史

袖ヶ浦市は、千葉県中部の東京湾に接する位置にあって、人口は約六万二千人、首都圏の衛星都市としてやや微増している。東京湾岸は埋め立てられて京葉コンビナートの一翼として発展し、内陸部は農業地帯であるが、宅地化が進んでいる。

袖ヶ浦市の地形は、木更津市を貫流する小櫃川と市原市を貫流する養老川の流域の低地の間に挟まれた台地（標高三〇～六〇m）が、市域の大部分を占めている。小櫃川と養老川の下流地域には数多くの古代遺跡が発見されているが、特に古墳時代に文化が栄えた地域で、大型の前方後円墳が幾つかあり、小高神社の境内地も小櫃川南岸台地上の上村古墳群の中に位置する。

古代には日本武尊の東征伝説が当地にあり、小高神社にもこの伝説が伝えられて神社の草創となっている。律令制下では「和名抄」にみえる上総国望陀郡に属した。

鎌倉時代に入ると、熊野別当の支配する畔蒜荘や飫富荘などの荘園が市内を占め、また平安後期から勃興した桓武平氏の千葉氏や、同族の上総介広常系統の武士が活躍した。小櫃川流域の低地で発見された横田郷遺跡は、中世の荘園跡として注目されていて、小高神社はこの遺跡を見下ろす高台にあり、荘園との係わりが考えられる。

室町時代には、鎌倉公方家の内紛や武田氏、里見氏が勃興したため、戦乱が多かった。江戸時代は、上総国の大部分は徳川氏の直接支配下にあり、市域の大部分は旗本の知行地であった。

このように、袖ヶ浦市域は古くから文化が開けた地域で、上総国延喜式内社五社の一と称される飫富神社や手力雄命を祀る坂戸神社などの古社も多い。



図1 小高神社位置図 (Google マップより引用)



図2 小高神社と横田郷 (Google マップより引用)

滝の口地区と小鷹明神（下立松原神社）

小高神社が鎮座する地名は、江戸時代は興津領滝口村で、明治以降は大字瀧ノ口、現在は袖ヶ浦市瀧の口である。この滝の口の地名は安房の白浜町や千倉町にもあり、いずれにも下立松原神社が鎮座している。下立松原神社は本来の祭神を天日鷲命（あめのひわしのかみ）とし、天照大神が天岩戸に入られたとき、岩戸の前で踊る神々に楽器を奏でた神として知られている。また、この神社は古く小鷹明神、滝口明神、また小高明神とも称されている。さらに、両社には日本武尊が東征の折りの上陸地等の伝説があり、現在は日本武尊が祭神となっている。

当小高神社もほぼ同様な草創の伝えがあり、祭神は日本武尊で本来の祭神は天日鷲命とし、日本武尊が東征の折りに布陣した場所とする。初め皇鷹神社と

称したといい、天文十七年（一五四八）の市指定文化財彩色板仏裏書には瀧口大明神とあることから、当社の由来は前二社とまったく同じとみられる。

明治期以降に小高大明神を小高神社と改称した。

神主筑紫家

神社背後には一段と低くなった平地があり、ここは代々神主を世襲してきた筑紫家の跡地と伝える。敷地は大規模な神官住宅と附属建物が建つ広さがある。筑紫家は前述彩色板仏裏書に「神主筑紫刑部太夫／□口大明神御合権三社 旦那賀藤九郎兵衛／干時天文十七年戊申二月吉日 敬白」とあって、室町時代には神主として神社に奉仕していたことがわかる。

さらに、筑紫静雄家文書によると、神主筑紫氏は小櫃川流域諸社神職組合である「祓講」の中心として幕末の神道隆盛を担ったという。筑紫家は都合により明治二十／三十一年に宮司を辞退している。

小高神社と古墳群

小高神社が鎮座する台地は標高六三mあり、台地上には古墳が十二基確認されている上村古墳群がある。さらに、斜面にも数多くの小規模な古墳が確認される。今回の発掘調査の結果では、小高神社本殿位置には古墳の遺構が確認されなかったが、本殿東側にある銀杏の太木は古墳の残丘のような高まりの上に立っている。古社のなかには古墳頂に建つ例もみられることから、あるいは古墳上に建てられた可能性も否めない。

小高神社と神仏習合

小高神社本殿内には、後項で述べるように内殿とその壊れた部材などと共に、小さな木彫が納められていた。木彫は僧体四体と僧形鳥天狗一体でいずれも高さ約八cm程の坐像で、頭部が欠けて膝部分も削除されている。

また、神社の「一本尊」とする彩色板仏（市指定文化財）は四枚の仏絵からなり、本来は一枚の板に数体の尊像が描かれていた絵馬とみられる。現存しているの



図4 境内の古墳



図3 筑紫家跡地



図7 本殿脇銀杏

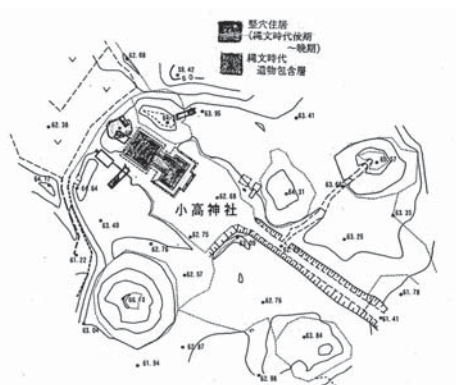


図6 上村古墳群と小高神社

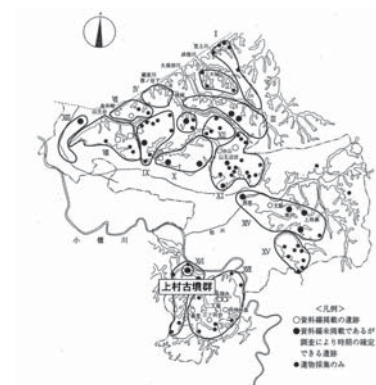


図5 袖ヶ浦市 古墳分布図



図8
本殿内の
小仏像

は大日如来像図、十一面観音像図、釈迦如来像図で、毘沙門天像図で、それぞれの裏面には墨書があり、「灌口之大明神」、「御本社刀八毘沙門天」、「□明神二宮」、「□大明神御合権三社」「旦那 賀藤九郎兵衛」「神主筑紫刑部大夫」などがある。また、天文十七年戊申二月吉日の年号が記されていて、室町時代後期の神社の状況が判明する。

これら僧形仏像の存在や、彩色板仏からは、仏教との習合が読み取られるが、特に僧形烏天狗からは修験道との関連が考えられる。背後にある神主屋敷は大規模であり、江戸時代はこの地方の「祓講」の元締めの役割を勤めた修験道系神社として隆盛していたと思われる。

一字一石経の発見

今回の本殿解体に伴い、建物地盤は現状維持を図ったが、基礎延石の高さや位置の修正を必要とした。この基礎工事に先立ち、基礎の地業方法や基礎の構成を調査するために発掘調査を実施した。この発掘調査の報告は巻末に別稿として載せてある。

ここでは、現本殿の建築時に埋納したとみられる一字一石経について述べる。一字一石経とは径4cm程の平べったい小石の片面に一字ずつ経典を墨書し、埋納したもので経石、一石経ともいう。古くは平安時代からみられるが、江戸時代に大流行している。千葉県内でも市原市光福寺など主に江戸時代のもが発見され

ている。経石の数は一千個とか、それ以上の大量に及ぶ場合が多い。

小高神社本殿基壇とその周辺には多数の一字一石経が埋納してあるとみられるが、今回発見したのはその一部に過ぎない。経の書かれていない小石も混じっていて、その数は膨大にのぼるとみられる。この石の埋納されたいきさつや目的については、一切伝わっていない。石の産地については、近郊の地層には、このような小石を含む層が発見されることがあるという。

経石の文字はすべて一石一字で、「妙」「佛」「法」「諸」などといった仏教経典の文字が読み取れ、経石は現本殿の建造に伴って埋納されたものと考えられる。

一一 小高神社本殿の沿革と概要

袖ヶ浦市内の神社建築

平成六年度に行われた社寺建築悉皆調査の報告書『袖ヶ浦の建造物「神社・寺院」』（主任調査員 大河直躬 千葉大学教授）によると、市域には各集落ごとに多くの神社建築があり、調査した神社建築の総数は五十五社で、寺院建築の四寺院と比較して著しく多い。これは古い遺構を調査対象として取り上げたためで、総数としては神社が五十八、寺院が五十五である。

報告書では、市域に見られる神社建築の特色として以下のことをあげている。

(一) 江戸時代の古い神社建築が多い

調査した神社建築で明治以降の建物は五棟だけであり、江戸時代に属する建



図9 一字一石経

物は九割の五十棟にも上がっている。その中で十六世紀に遡るのは三棟、十七世紀に属する建物は七棟あり、このうち永地諏訪神社本殿（十六世紀後期）は千葉県指定文化財、滝の口小高神社本殿（宝永二年一七〇五）と飯富飽富神社本殿（元禄四年一六九一）及び東照宮（幕末期）は袖ヶ浦市指定文化財となっている。

（二） 独立した神社本殿と内殿形式の二種類の本殿形式がある

独立した神社本殿は二十六社で、礼拝用建物（拝殿等）の奥に小神殿や厨子を祀る内殿形式は十八社、礼拝用建物の奥壁に神棚を設けた形式は十一社である。独立した本殿より、独立した本殿を有しない、いわゆる内殿形式の神社が七割を占めているのが特徴である。この内殿形式の神社は、熊野神社・八王子社、妙見社など神仏混淆の著しかった神社で、仏堂形式の影響を受けている。

（三） 本殿覆屋と内殿形式の関係

また、独立本殿が覆屋内に建つ場合も多く、八棟を数える。覆屋には近年建替えられたものもあるが、古くから覆屋が建てられており、小高神社もこの例になる。内殿形式は本殿覆屋と拝殿が建築構造的に一体化し、内殿を本格的な本殿に変化させたものと解釈できる。また、独立本殿内部には本格的な内殿を造り、さらにその中に小祠を祀るものもある。小高神社本殿内には一間社流造の本格的な内殿が祀られている。内殿には、彩色・漆塗りを施した豪華な造りもみられる。また、拝殿を兼ねた覆屋内に独立本殿が建つ例もみられる。

袖ヶ浦市域では、中世〜近世前期の有力神社は独立本殿であり、その他の神社は外殿（拝殿）内部に内殿を安置した形式が一般的な形態であったとみられる。

小高神社に古くから覆屋が建てられたことは、現状の屋根板に当初部材がそのまま残存していたことから明らかになる。

（四） 腰組縁を持つ本殿

報告書では特徴として取り上げられていないが、市域の独立本殿の六棟に腰組縁がみられる。この中で飯富飽富神社本殿の元禄四年（一六九一）が最も古く、次いで小高神社本殿の宝永二年（一七〇五）が続く。腰組縁を持つ本殿は、管見では腰組縁は古く室町時代からみられるが、江戸時代初期の東照宮本殿に採用されてからは、有力神社に広まったとみられる。千葉県内では十八世紀前期以降に広がったとされるが、これらは全国的にも早い事例として注目される。

小高神社の沿革

現地説明板（平成八年三月設置）では小高神社の沿革について次のように記されている。

「小高神社は滝の口の氏神社で、かつては小鷹大明神とよばれていた。日本武尊が東征の折りに、この地で賊を平定したことにちなんで創建され、寛和二年（九八六）には社殿を再建したと伝えられている。

祭神は日本武尊。例祭日は、昭和三十年の平川町合併後に生活改善運動の一つとして九月二十七日から七月二十四日に変更された。」

小高神社は小櫃川南岸台地上に立地し、前述のように上村古墳群の中に鎮座しており、本殿が古墳上に祀られたことを否定できない位置にある。また、本来の祭神は天日鷲命とし、日本武尊の東征の折りに創建されたとの伝え、同様な創建を伝える安房の下立松原神社との類似性からは、古代に遡る創建の古社とみられる。また、大場磐雄（神道考古学）『楽石雑草』（昭和二十五年）には「社殿の脇に一円墳あり。背後の畑中に縄文式土器片あり、又埴輪片も存せり。坂を下りて向かいの台地にのぼり祭祀遺跡出土の畑をみる。小高神社と相對する丘陵の端にあり、今芋畑となり土師器片多し、採集す。」と記されている。その他、前述『袖ヶ浦の建造物「神社・寺院」』には「社殿の地下から布目瓦が出土したといわれる」との記述がみられ、いずれも古代創建説を補強するものとなっている。

その後、筑紫家所蔵「宮普請帳」（未見）によると社殿は寛和二年（九八六）に再建されたという。

江戸時代では神社入口両脇に石燈籠があり、これには「宝永二乙酉年／奉造立燈籠御寶前／三月□日」の刻銘があり、宝永二年（一七〇五）が現本殿再建に比定されている。

関係者からの聞き取り等による近年の修理は以下のようである。

・拝殿の建設 連歌額記銘「天保十年一八三九」がほぼ建築年代とみられる。

昭和四十二年以前 茅葺き屋根であった。

昭和四十二年 小屋組を改造、波板鉄板葺きとする。

平成四年 鉄板葺きを銅板葺きに葺替える。

・幣殿の改築 平成四年であるが、以前の幣殿の写真はない。

・覆屋の改築 平成四年。以前の覆屋の写真はないが、工事中写真はある。

覆屋は大破していたとみられ、聞取りでは平成四年以前は覆屋はなかったと言っている。

・本殿古材の収集 覆屋が大破したため、風雨時や地震時には本殿の屋根材や垂木、墓股など古材が落下した。また、縁や高欄、脇障子も腐朽して古材が散乱したが、これらは氏子達によって丁寧に拾い上げられて、本殿内や拝殿に保管された。最終的には市立郷土博物館などで一括して保管されていた。今回の修理ではこれらの保管古材を用いて修理が行われた。

本殿の構造形式

説明板には「本殿は一間社流造、屋根はこけら葺きである。間口は三間社と同じであるが、中央の柱間を非常に大きく取って扉口としている。両側の柱間は幅の狭い板壁で、鯉の滝登りの彫刻がある。」と建築的な説明がある。

本殿の平面をみると、背面桁行柱間は中央に柱を建てた二間となっているが、正面は中央柱間を大きく取って、柱が二本建っているので三間のようにみえる。

しかし、この柱は造作間に入れられた管柱であり、柱も丸柱となっているものの構造柱ではない。従って背面は二間ではあるが正面は一間であり、構造形式は一間社流造とする見方で良い。

建築様式とその特徴については別項で細説する。

本殿の建築年代と沿革

説明板による本殿の建築年代と沿革である。

「本殿の建築年代は、二重虹梁にして彫刻を入れる場所を増やすなどの特徴から、元禄時代（二六八八～一七〇四）より少し下り、拝殿の前にある石灯籠と同じ宝永二年（一七〇五）頃と考えられる。」

前述したように、本殿の建築的特徴と石灯籠銘にある宝永二年（一七〇五）が時期的にほぼ一致することから、この頃の建築（再建）とみるのが妥当と思われる。この見方は今回の解体修理による調査でも変更はない。

その後の沿革については説明がないが、建立後間もないころに覆屋が建てられて今日まで維持保存されてきた。そのため、近年を除いてはほとんど修理がないまま二百八十余年間にわたり、建設当初の姿が保たれてきた。しかし、覆屋は近年に至って大破したらしく、現在の覆屋は平成四年に改築されたものである。この間に屋根のこけら葺きが剥がれて雨漏りが生じ、軒廻りや墓股や脇障子、縁廻りも大きく破損していた。これら部材の大半は回収されて保存されていたことは、前にみたとおりである。また、当初から本殿正面に建てられていた幣殿も同時に建て直された。

小高神社本殿の文化財指定

小高神社本殿は「小高神社は、日本武尊を祭神とします。本殿は一間社流造。屋根は柿葺（こけらぶき）です。本殿は建築様式から元禄時代の建築と考えられ、多くの彫刻を用いた構築は、当時の民衆の好みをよく表しています。」として平成四年八月一日付で袖ヶ浦市有形文化財に指定された。翌年度に『袖ヶ

浦の建造物「神社・寺院」の悉皆調査が行われている。

指定告示

指定番号第十七号

袖ヶ浦市文化財の保護に関する条例（昭和五十一年条例第三十七号）第四条の規定により袖ヶ浦市指定文化財として指定する。

平成四年八月一日

袖ヶ浦市教育委員会

種別 有形文化財《建造物》

名称 小高神社本殿 員数 一棟

構造等 一間社流造、屋根は柿葺き、桁行二・七八m、梁行一・七二m

所有者等氏名 小高神社代表役員 千葉一男

所在地 袖ヶ浦市滝ノ口四四九番地

指定説明

小高神社は、日本武尊を祭神とする。社伝では景行天皇の治世の創建とされ、平川町史によれば、寛和二年（九八六）の宮普請帳が残されていたという。

現在の社殿の建立年代は、建築様式からみて十八世紀初期と推定される。石灯籠の銘に宝永二年（一七〇五）の年号があり、その頃に建立されたものと考えられる。

①本殿の構造形式

一間社流造（但し間口は二間分あり）、屋根は柿葺き、桁行二・七八m、梁行一・七二m、向拝の出一・三四四mである。

②建築様式の特徴

組物は出組で、支輪に雲の彫刻を用いる。中備えは、菊・牡丹等の彫刻を入れた本臺股を用いる。正面の扉脇には、鯉の滝上りの彫刻がある。向拝の柱の左右の木鼻は猿の彫刻、中備えは龍の彫刻を入れた本臺股である。

③保存状況

縁、屋根等はかなり破損しているが、当初の部材はよく保存されている。

当本殿は、建築様式からみて元禄時代の建築で、特に多くの彫刻をつけた作風は当時の民衆の好みをよく表わしている。

建築の水準も当時の房総の建築のなかでは優秀である。

よって、市指定文化財としての価値は充分にあるものと判断できるため、指定し、保存をはかることが望ましい。

拝殿と幣殿、覆屋

拝殿は、桁行三間、梁間二間、入母屋造、一間向拝、屋根は茅葺きであったが、昭和四十二年に小屋組を改造して鉄板葺きとし、さらに平成四年には現状の銅板葺きに葺き替えられた。規模は桁行六・七m、梁間三・八mである。建築年代は絵様彫刻などの建築細部から、拝殿内部に掲げられた連歌額にある天保十年（一八三九）頃とみられる。建物周辺には茅葺き屋根時代の棟瓦の破片が残っている。

幣殿は桁行四・〇m、梁間二・九m、両下造り、波型鉄板葺きで、拝殿背後と本殿向拝柱に取付いているが、向拝柱との間に幅〇・四mの隙間がある。この幣殿も平成四年に改築されたもので、それ以前の建物については、資料が不明である。

しかし、本殿向拝柱には幣殿取付きの当初痕跡が残っていて、当初から現在とほぼ同規模の幣殿が取付いていたことがわかる。また、屋根の栩葺きにも幣殿屋根の取付き痕跡が残っている。幣殿が当初から存在していれば、拝殿も当然ながら存在していたわけで、宝永二年に建築された小高神社は本殿、幣殿、拝殿の揃った複合社殿を構成していた。いわゆる権現造の形態を持っていたわけ、地方における権現造形態の比較的古い遺構と考えられる。

本殿は建築後まもなく覆屋内に格納されたとみられる。それは、当初の栩葺



図 11 拝殿



図 12 本殿覆屋



図 10 境内入口の石灯籠と刻銘

きが現在まで残っていたことや、本殿を構成する部材が、木階などごく一部の部材を除いて、当初材が良く残っていたことによる。また、屋根材や木部の風化が少ないことも、建築後比較的早い時期に覆屋が建設されたことを示している。現在の覆屋は平成四年に改築されたもので、桁行六・四m、梁間六・四m、切妻造、波型鉄板葺きである。それ以前の旧覆屋については記憶があいまいで、写真等もなく不明である。恐らく規模は現状と同じで、柱は掘立柱、屋根は茅葺きであつたとみられる。発掘調査では覆屋柱の遺構は発掘されず、また礎石跡も確認されていない。恐らくコンクリート基礎により破壊されたものと思われる。

三 小高神社本殿の形式と建築的特徴

小高神社本殿は幾つかの著しい特徴を持つ神社本殿である。これらについては既に述べた事項もあるが、改めてみていきたい。特徴の幾つかについては、別項として取り上げる。

平面と構造形式

この本殿は平面形式に特徴がよく表れている。正面は一間であるが、両脇に管柱があるので平面的には三間のように見える。背面は中央に柱が立って二間、側面も二間である。内部は一室で中央奥に内殿を置く。内殿は本格的な一間社流造で白木造り、年代は本殿と同時期と思われるが現状は大破している。

両側面及び背面には腰組の切目縁が廻り、脇障子が取付く。脇障子は開戸となっている。正面には一間向拝が付き、五級階段が設けられる。

柱間装置は正面が両折れ棧唐戸、両脇間は彫刻付の堅板壁で、両側面及び背面は横板壁である。また、向拝柱と本体隅柱間は、縁上に角柱の管柱を建てて、本体側は板戸、向拝側は縦板壁となる。

構造形式は一間社の流造、鉄板仮葺きで、正面には当初から幣殿が取付いており、屋根は栩葺きで、当初の葺き板が残っていた。

基礎は基壇上に延石を据え、その上に土台を載せて柱を建てる。柱は正面側に二本、背面に三本で、正面は中央間を広く取って管柱を入れ、中央間は両折れ棧唐戸建て、両脇間は縦に高肉彫りの板壁を嵌める。彫刻は左右対称で主題は鯉滝登りである。両側面と背面は幅広の横板張りとする。柱頭に頭貫を輪薙込み、柱上に出組の組物を置く。正面管柱にも組物を置く。組物間には墓股を中備とし、正面中央間には中央に組物を詰組に置き、その間に墓股を入れる。組物は和様出組で、二段目手先肘木は禅宗様拳鼻とし、二段目巻斗上に実肘木を置いて丸桁を載せる。支輪は雲支輪で、彩色片が残っている。妻飾りは二重虹梁大瓶束の複合式で、大瓶束には笈形を付けている。一段目の妻虹梁は一手出し、中央部に眉欠を造り、さらに両端には巻斗を受けるための眉欠を設けた凝った意匠としている。また、虹梁上琵琶板には浮彫り彫刻としているものの、全体の妻飾りは中央に墓股を欠くなど、比較的装飾の少ない落ち着いた構成を取っている。懸魚は蕪懸魚、桁隠しは猪の目懸魚である。軒は二軒 繁垂木で、飛檐垂木は先端下端を扱っている。屋根野地はゴヒラの野垂木を掛け、小舞を入れて栩葺きの下地としている。棟は棟木の上に束立てし、樋棟を置いて箱棟とする。

縁は建物両側面と背面の三方に廻る切目縁で、四手先の腰組となる。この腰組は柱との繋がりが不十分で、隅では二段目と隅叉首が通し柄とするだけで、他は柄穴に柄を差し込み、楔打ちとしている。この仕口は腰組としては不完全であり、初期的な技術を示している。側面縁後側には脇障子を付しているが、これは開き戸となっている。脇障子の彫刻は左右とも竹に虎（唐獅子）である。また、縁下は横板壁にして側面のみ格狭間をくり抜いて、猷除けの格子を入れている。

向拝は正面柱間一杯に設け、向拝柱は几帳面取りの角柱で、海老虹梁で身舎柱と繋ぐ。組物は出三斗で、水引虹梁中央にも中備として組物を置き、板手挟を入れている。

建物を飾る彫刻はさほど多くなく、組物中備としての彫刻入り墓股、妻飾り琵琶板彫刻、向拝頭貫木鼻の猿鼻、雲支輪、正面脇間の鯉滝登り彫刻程度であり、いずれも十八世紀初期の落ち着いた良好な彫りである。絵様も虹梁では渦と若葉は繋がらず、木鼻など渦の彫りはやや幅が広いものの浅く、この年代の特徴を示している。

これらの軸部構造材・造作材には後補材が少なく、多くが当初材である。これらの大工仕事も丁寧で、この地方の大工技術の高さを現しているとみることができる。

両折扉と内殿

この本殿の正面柱間は両折れの棧唐戸である。流造本殿で両折れ戸になる例は非常に例が少なく、重要文化財では青森岩木山神社本殿（三間社流造、一六九四）、静岡県大歳御祖神社本殿（三間社流造、一八四三）、静岡県神部神社浅間神社大歳御祖神社境内社麓山神社本殿（三間社流造、一八三五）、和歌山県十三神社本殿（三間社流造、一五六一年）に見られるに過ぎず、山岳信仰に関係する神社である。いずれも本殿の内部は前室と内陣（内殿）に区画され、内陣正面には扉が設けられている。そのため、正面の両折れ戸を開いておいても、内陣内部は見えない。しかし、小高神社の場合は前室がないため、戸を開くと内部が直接見えることになる。そのために内殿が設けられるのであろう。このような内殿形式の本殿は袖ヶ浦市域に多くみられることは前述のとおりである。

内殿は正面間口約六五cmの一間社流造で、大破しているものの本格的な造りとなっている。向拝柱は几帳面取りで、連三斗の組物、中備としては墓股を置



図 13 本殿内の内殿



図 14 内殿正側面

く。水引虹梁には本殿の水引虹梁に似た絵様があり、臺股も彫刻がないもののよく似ている。屋根部分は残っていないが、板葺きであつたろう。正面構えは小脇柱を入れて棧唐戸開き戸とし、本殿に似た造りとなっている。使われてい

る材質も良質で、恐らくは本殿の大工棟梁が本殿余材を用いてつくつたように見える。なお、欠失している部材は大部分が本殿内部に散らかつていた。

内殿の存在と、両折れ開戸は、仏教的要素を示しているといえるだろう。

縁と脇障子の関係

本殿周囲には縁が廻っている。正面向拝柱と本殿隅柱間にある板壁は縁上が開戸であり、脇障子の板壁も開戸となっていて、これらは右廻りに回れるように戸が開く。聞き取りによると、宗教行事の場合は本殿の周囲を回つて行うのだという。具体的なことは聞くことができなかったが、仏教の常行堂のような使い方と似ており、興味深いものがある。

屋根の棚葺き

現在の屋根には正面側に棚葺きが残っていた。この棚葺きは板の留め釘を調べると茅負、裏甲から一連の仕事であり、釘の打ち替えはないことが判明した。正面軒廻りは当初であるため、この棚葺きは当初の屋根材であることが明解である。板厚は1 cm前後、長さは30 cm前後で、表面がやや風化している。また、幣殿の屋根が取付いた跡が残っていたことも、当初であることを裏付けている。このように古い葺き板が残るのは、覆屋で古くから囲まれていたからであり、葺き板にやや風化がみられるのは、覆屋の建設が本殿の完成よりやや遅れたためと考えられる。

使用部材の材種

今回、主要な部材の材種判定を行った。その結果には予想外のものがあり、桧と考えていたのがシオジやカツラであつた。それ以外にも土台はクリ、縁板がスダジイ、破風板がカツラと判定された。柱・大斗はケヤキ、化粧垂木・茅負などはスギ、支輪や縁高欄はヒノキ、小屋廻りはマツなど多くの木の種類を使い分けていることがわかつた。このことから、この地方の江戸時代中期の植物相も考えることが可能で、興味深いものがある。

横田郷遺跡と神社の関係

最後に小高神社と横田郷遺跡との関係について考察してみたい。横田郷遺跡は小櫃川流域のほ場整備に伴って平成四年ごろから中世の荘園遺構として注目され始め、その後も継続した発掘調査によって古代の条里地割遺構やさらに弥生時代や古墳時代の多くの遺構・遺物が発見された。これにより、横田郷遺跡は弥生時代から中世の荘園にまで連続する集落であったことが明らかになった。

小高神社は横田郷に臨む高所にあり、参道は石段で横田郷に向かって降りていく。小高神社は古代に遡る古社であり、両者には何らかの関係があったことをうかがわせている。現在、古老の聞取りにおいても、まったくその関係を窺わせる言い伝えや記録はない。しかし、村から真東に望む小高い丘上に鎮座する神社と横田郷は密接な関係をうかがわせるものとなっている。



図 15 横田郷想定復元図 (構成・イラスト 笹生 衛) と小高神社位置

第二章 工事の概要

一 工事の計画と実施

小高神社本殿は、これまで幾度かの小規模な修理を行いつつ、現在に至るまで、その維持を図ってきた。しかし、近年に至り、次第に建物の経年による破損、特に屋根の傷みが顕著になってきたため、平成四年に覆屋を建て替えた。その後、本殿本体の全面的な修理の必要性にせまられ、氏子は、討議を重ねた結果、本殿の全解体修理工事を計画した。平成二十二年八月三十一日、袖ヶ浦市教育委員会に袖ヶ浦市文化財保存整備事業に関する事前協議書を提出した。協議の結果、平成二十三年度に解体工事等を行うことになった。また、平成二十三年八月三十一日、袖ヶ浦市教育委員会に袖ヶ浦市文化財保存整備事業に関する事前協議書を提出した。協議の結果、平成二十四年度に修理工事等を行うことになった。工事は、平成二十三年七月六日に開始され、平成二十五年三月二十日をもって一切の工事を完了した。

二 工事関係者と工事費

(一) 工事関係者

小高神社本殿解体修理工事にあたった関係者は次の通りである。

袖ヶ浦市教育委員会

平成二十三年度

教育長 川島 悟
教育部長 笈川 政登己

平成二十四年度

袖ヶ浦市文化財審議会委員
小高神社役員

教育部次長	篠原 幸一
生涯学習課長	武井 隆文
生涯学習課主幹	光江 章
主査	西原 崇浩
同	桐村 久美子
副主査	室武 顕
主事	前田 雅之
教育長	川島 悟
教育部長	茂木 好明
教育部次長	篠原 幸一
生涯学習課長	井口 崇
文化振興班長	西原 崇浩
主査	桐村 久美子
主任主事	田中 大介
主事	前田 雅之
	日塔 和彦
建設委員長	鈴木 弥須雄
代表役員	千葉 一男
委員（神社総代）	松本 孝之
同	阿部 昭
同	松本 一二三
委員	小林 実
同	永谷 耕一

工事請負者

岩瀬建築有限公司

[illegible]

(二) 工事費

小高神社本殿解体修理工事における事業費の内訳は次の通りである。

銚金物工事	建具工事	屋根工事	同
	浅川建具店	(有)望月板金	
	浅川秀幸	望月達雄	鈴木朝吉
(株)大谷相模掾鑄造所			大谷哲秀

収入の部		総額 二一、五六七、〇〇〇円	
内 訳	平成二十三年年度	平成二十四年度	合 計
袖ヶ浦市補助金	四、七三〇、二五〇円	六〇五三、二五〇円	一〇、七八三、五〇〇円
所有者負担金	四、七三〇、二五〇円	六、〇五三、二五〇円	一〇、七八三、五〇〇円
合 計	九、四六〇、五〇〇円	一二、一〇六、五〇〇円	二一、五六七、〇〇〇円

支出の部		総額 二一、五六七、〇〇〇円	
内 訳		平成二十三年年度	平成二十四年度
工事請負費		九、四六〇、五〇〇円	一二、一〇六、五〇〇円
仮設工事費		五二二、二〇〇円	四七一、二〇〇円
解体工事費		二、五一〇、三〇〇円	一三五、八〇〇円
基礎工事費		〇円	三〇、〇〇〇円
石工事費		〇円	二〇、〇〇〇円
木工工事費		四、四二六、〇八〇円	五、七九三、七二〇円
屋根工事費		〇円	一、五九八、〇〇〇円
鋳金物工事費		〇円	三七五、〇〇〇円
雑工事費		〇円	一、二二二、五〇〇円
諸経費		一、五六一、四二〇円	一、八八三、七八〇円
消費税相当額		四五〇、五〇〇円	五七六、五〇〇円
			一、〇二七、〇〇〇円
			三、四四五、二〇〇円
			二、五六七、〇〇〇円
			九八三、四〇〇円
			二、六四六、一〇〇円
			三〇、〇〇〇円
			二〇、〇〇〇円
			一〇、二一九、八〇〇円
			一、五九八、〇〇〇円
			三七五、〇〇〇円
			一、二二二、五〇〇円
			一、八八三、七八〇円
			四五〇、五〇〇円

第三章 建物の調査

一 修理前の破損状況

本殿は修理前、特に背面屋根葺き材の欠失と軒廻り材の落下等破損が顕著であった。また、部材の痕跡や後補材から判断して小規模な修理は過去にも行われていたことがわかる。平成四年には屋根の破損が著しくなったことから木造の覆屋を建て替えている。

建物の破損は、その原因により次の四項に分類できる。

- (一) 外力や荷重による物理的な破損
- (二) 保守管理の不備、施工方法の不適切によって生ずる腐朽菌等による生物劣化

(三) 建築後の経年による部材の風化、摩耗

(四) 建物使用の変化、外観の変化に伴う改造等による部材の欠失

修理前の建物について、前述の項目に沿ってその破損状況を述べる。

(一)として、建物の不同沈下と柱の傾倒、それに伴う部材の弛緩があげられる。その結果は、図16に示す通りである。柱の不同沈下は、西側面が他に比べて大であり、正面向拝柱の沈下が最も大きかった。これに対応するように、建物は正面および西側面方向に傾いていた。また、廻り縁は縁を構成する部材自体の荷重で外側に垂下しており、後年、簡易的に補強された。

(二)として、まず雨漏りによる部材の腐朽があげられる。正面軒先の化粧裏板、母屋桁、桔木等は雨漏りが原因の腐れを生じていた。雨漏り等による部材の湿潤は、一方で白蟻をはじめとする虫害の原因となりやすい。この建物は、随所に白蟻による虫害の跡が見られた。土台は全体的に虫害を受けており、特に土

台石と接する下端から内部への腐朽と虫害が著しかった。柱脚部も腐朽菌により侵されていた。羽目板、破風板、裏甲、切目長押等も腐朽や虫害を受けており、全体として東面の部材の被害が大きかった。

屋根は全体にわたり葺材の欠失、摩耗が著しく、背面は部材が多く欠失していた。これと併せ、背面軒廻り材は落下し、多くの部材が保管されていた。

(三)として、建物見え掛り部分の風蝕があげられる。廻り縁は縁板の風蝕が著しく高欄等の部材も一部欠失していた。建物全体で見ると、東面の風蝕が大きかった。

(四)として、正面木階の部材の欠失があげられる。これは後年に、後設の幣殿改築に併せ、蹴上寸法を変えて造り変えたためである。

二 計画寸法

本殿は、背面の軒廻り材の一部を除き比較的当初材が残っていたので、それらの部材寸法を実測することにより、当初建物の計画寸法を知ることが出来た。

(一) 平面計画寸法

本殿身舎柱間と向拝の出の寸法は、当初横架材に残る仕事真墨や柄穴等の位置を実測することにより知ることが出来た。実測値は表1の通りである。

垂木割りをみると、正面は柱真をまたぎ正面中央間に二十六本、両脇間にそれぞれ六本の垂木を配っている。背面は中央に柱が建つが、その左右で十九本ずつ垂木を配っている。

組物は六枝掛としている。丸桁および木負、茅負の垂木取付き痕跡より一尺寸法は二寸四分であることがわかる。この建物を枝割り法で見ると、正面中央間は二十六枝で六尺二寸四分、両脇間はそれぞれ六枝で一尺四寸四分、背面二間はそれぞれ十九枝で四尺五寸六分、側面二間はそれぞれ十二枝で二尺八寸八

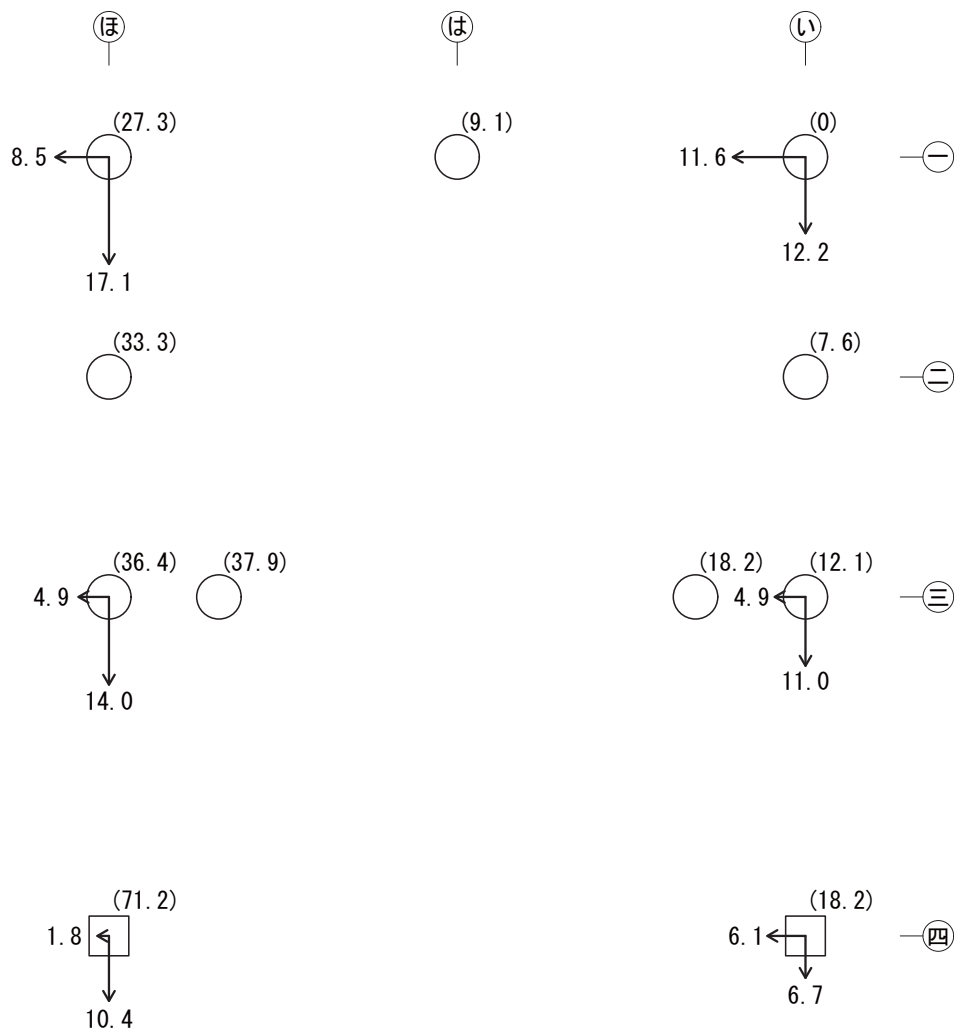


図 16 柱の沈下量・傾倒量図

寸法単位はmm

- ・沈下量はい一の柱を基準に、それからの沈下量を（ ）内に示した。
- ・傾倒量は方向を矢印で、量を柱の1 m 当たりについての数値で示した。

表 1 柱間寸法実測値

桁行寸法

	い～は一	は～ほ一	い～ろ三	ろ～に三	に～ほ三	い～ほ四
土台・地覆	〈 4.54 〉	〈 4.555 〉	〈 1.43 〉	〈 6.24 〉	〈 1.435 〉	
頭 貫	〈 4.55 〉	〈 4.545 〉	〈 1.435 〉	〈 6.235 〉	〈 1.445 〉	
通 肘 木	〈 4.555 〉	〈 4.555 〉	〈 1.445 〉	〈 6.23 〉	〈 1.44 〉	
丸桁・虹梁	(9.12)		(9.12)			(9.115)
木 負	〈 4.56 〉	—	9.115			—
茅 負	〈 4.565 〉	〈 4.56 〉	—	—	—	—

梁間寸法

	い一～二	い二～三	い三～四	ほ一～二	ほ二～三	ほ三～四
土台・地覆	〈 2.875 〉	〈 2.875 〉	〈 4.415 〉	(5.75)		〈 4.405 〉
頭 貫	〈 2.88 〉	〈 2.88 〉		〈 2.885 〉	〈 2.88 〉	
通 肘 木	〈 2.875 〉	〈 2.875 〉		〈 2.875 〉	〈 2.88 〉	
丸桁・虹梁	〈 2.885 〉	〈 2.875 〉	〈 4.42 〉	〈 2.885 〉	〈 2.88 〉	〈 4.405 〉
木 負						
茅 負						

計測位置

- () …柱真墨の墨書で計測
- 〈 〉 …枅穴等の位置で計測

分となり、それぞれ実測値と近似値である。向拝の出は、実測値は四尺四寸五厘から四尺四寸二分の間の数値であるが、四尺四寸四分と考えると枝割りは十八・五枝になる。

(二) 矩計計画寸法

軸部における高さ関係の寸法は、柱の取合い仕口や部材を実測することで、寸法を得た。軒廻りは、欠失部材、破損部材が多かったが、残存する部材を実測し、寸法を得た。垂木の勾配は、破風板の仕口を実測し、寸法を得た。これらに基づき矩計計画寸法を図17に示した。

三 構造・技法

(一) 基礎

身舎は側廻りに土台切石を廻している。石は、上端および外側側面の上端から二寸までを仕上げて、下は切り出したままである。石は正面に四個、背面に四個、両側面にそれぞれ二個、土上に正面から見えて右廻り勝ちに据えており、目地は特に詰物を飼っていない。向拝柱の礎石は自然玉石で、土上に据えている。

(二) 軸部

土台は成五寸三分、幅六寸五分のクリで、正面の部材が心持ち材、他は心去り材である。端部は隅留柄差し割楔締めとしている。上端には、柱の柄穴が掘られ、羽目板（腰下）の小穴が突かれている。向拝柱の柱脚とは地覆で繋いでいる。地覆は、成三寸七分、幅三寸三分のクリである。

柱は、正面両折戸脇はスギ、他は全てケヤキである。そのうちの身舎柱三本と向拝柱一本が心持ち材、他は心去り材である。太さは、身舎柱が五寸八分、向拝柱が五寸二分である。身舎柱は切目長押より上の外側部分のみ丸くし、そ

の他の部分は八角に造り出したままである。向拝柱は角柱で、五分の几帳面を取っている。身舎柱の根柢は二寸五分角で長さは二寸から二寸五分である。向拝柱は礎石にひかり付け建てている。

貫は頭貫のみで、身舎柱の頭部を繋いでいる。頭貫はシオジで、成四寸六分、厚さ一寸九分である。四隅の柱とは端部を五分大入れ落し蟻とし、他の柱とは輪薙込みで落し込んである。貫の上下には小穴を突き、上端の小穴は幅四分、深さ五分で琵琶板に合わせている。下端の小穴は幅六分、深さ五分で羽目板（腰上）に合わせている。一方、腰廻りには柱間に遣返しで足固めを入れている。足固めは、成二寸五分、幅一寸九分五厘のスギ（い二〜三のみケヤキ）である。下端に羽目板（腰下）の小穴が突かれている。

羽目板（腰下）は、厚さ五分前後のマツ（い一〜二のみ後補材でヒバ）で土台と足固めの間に三枚で短い（後補材は四枚）。短ぎ目は樋部倉短ぎで合釘打ち止めとしている（後補材は突付けで柱へ釘打ち止め）。側面には格狭間をくり抜き堅格子を取付けている。

羽目板（腰上）は、厚さ六分前後のカツラ（い一〜二最下部のみ後補材でスギ）で足固めと頭貫の間に三枚で短い。短ぎ目は突付けで合釘打ち止めとしている。正面両折戸脇の羽目板は堅羽目でマツ一枚を柱の小穴へ建込んでいる。

長押は、シオジである。地長押は成二寸九分、胸の出は五分である。切目長押は成三寸七分、胸の出は五分である。柱に幅八分、深さ八分〜一寸の襟輪欠きで取付き、和釘打ちして止めている。内法長押は成三寸七分、胸の出は五分である。柱に幅八分、深さ八分〜一寸一分の襟輪欠きで取付き、和釘打ちして止めている。

海老虹梁はケヤキで、身舎柱へは五分大入れ落し蟻で、向拝側は下端を組物実肘木と相欠き組にし、向拝柱からの雇い柄に落し込んでいる。身舎柱側の端

部は袖切され、見付には弓眉が彫られている。向拝柱側の端部は実肘木と同幅に袖切され、弓眉が彫られている。

水引虹梁はケヤキで、両端は袖切され、見付には弓眉、若葉文様が彫られ、四分大入れ蟻掛けで向拝柱に取付いている。

拳鼻は、身舎柱へ五分大入れ落し蟻としている。

木鼻は、向拝柱の側面に寄せ蟻で取付いている。

(三) 組物

身舎柱上組物は、拳鼻の付いた出組で、部材は全てケヤキである。全体は六枝掛となっており、高さは一尺一寸二分である。四隅の柱上の組物は隅行肘木に鬼斗を乗せている。柱上の肘木は通肘木としており、組物同士を繋いでいる。正面両折戸脇の柱上と正面隅の柱上の組物は実肘木を一体にし丸桁を受けている。梁間方向は大虹梁を実肘木で受けるが、四隅の柱上は大虹梁の下端を実肘木幅に造り出して組物で受けている。

向拝柱上組物は連れ三斗組で、部材は全てケヤキである。全体は、六枝掛となっており、高さは七寸三分である。

中備えは、向拝柱間中央に出三斗組、その両脇に、上部に卷斗と実肘木を乗せた本藝股を付けている。

(四) 軒廻り 妻飾り

身舎丸桁はマツの心去り材で、柱真より四寸八分外を真としており、成五寸三分、幅三寸五分、口脇高四寸八分である。反り、増しはない。側面柱真より四寸八分外へ出たところで妻虹梁と相欠きで取合い、端部木口に蟻柄を造り出して破風板を落し込んでいる。

化粧棟木はマツの心去り材で、成五寸一分、幅三寸六分、口脇高四寸五分である。妻虹梁上に立てた束から伸びる柄に落し込んでいる。

向拝丸桁はマツの心去り材で、成五寸三分五厘、幅三寸五分、口脇高四寸七

分五厘である。柱筋で海老虹梁と相欠きで取合い、向拝柱から伸びる雇い柄に落し込んでいる。中央では、中備えの組物に乗せた手挟みと相欠きで取合っている。

垂木はスギで、正背面ともに二軒繁垂木である。身舎正面飛檐垂木は向拝丸桁を打越して向拝地垂木となっている。地垂木、飛檐垂木、支外垂木は全て成一寸三分、幅一寸一分であり、飛檐垂木のみ先端下端を抜いて成一寸一分になっている。飛檐垂木のうち、正面二本、背面二本は力垂木であり、金物で枯木と繋いでいる。内部は地垂木へ釘で打ち止めている。

木負および茅負は、正面がマツで、背面がスギである。木負、茅負ともに成幅二寸三分の角材である。端部は破風板に大入れで取付いている。

破風板はカツラで、正背面とも腰幅が五寸七分、厚さが一寸三分である。丸桁へは落し蟻で落し込み、拝み留先部分は目違い柄入れとした後、蟻決りをした厚板を落し込んで繋結している。見付には二重の眉を付けている。

妻大虹梁および上の二重虹梁はともにケヤキで、それぞれ相欠きで丸桁および化粧母屋と取合っている。中央には、東西とも波に兎を題材とした彫物を飾っている。妻大虹梁上化粧母屋筋には出三斗組が取付くが、外側だけの飾りであり、梓肘木を妻大虹梁上に立つ束に妻板越しに柄差し上楔締めで取付けて固定している。化粧母屋は、前述の束に柄差し上楔締めで取付いているのみで、小屋組内部には伸びていない。二重虹梁上には笈形付き太瓶束が立ち、上に組物を組んでいる。太瓶束は上部に粽がとられ拳鼻が取付き、下部に結綿を造り出している。太瓶束拳鼻と笈形はヒノキ、妻板は厚さ五分のスギで、他はケヤキである。破風板下拝み部分には蕪懸魚が付けられ、他に桁隠しとして猪の目懸魚が付いている。

(五) 小屋組 屋根

小屋梁は一本のマツを半分に割って東西で使っている。この上に桁行方向に

梁が渡されている。

野母屋は、正面に三通り、背面に二通り通っている。正背面とも野棟木寄りの通りがスギ、他がマツである。野棟木はマツである。

屋根は、棚葺きである。葺き材はスギの割板で、葺き足は一丈八分前後で和釘と竹釘で打ち止められている。棟飾りは破損が著しく、箱棟の部材が残るのみである。

(六) 造作

床は、後年に取替えられたものである。当初の床および床組材は床下と他所に保管されていた。当初大引はシイで桁行方向に置かれ、スギの根太を受けている。床板は厚さ六分のマツを桁行方向に張っている。

身舎正面柱間には両折戸が建込まれている。身舎の切目長押上端と内法長押下端には、それぞれ一丈八分五厘角の付敷居と付鴨居を付けている。内部に天井は張られていない。

(七) 縁廻り 木階

廻り縁は、四周に廻らし、背面柱筋に脇障子を立て、刳高欄を置いている。正面を除いた三方に四手先の腰組を組み縁を支えている。腰組の斗は主にケヤキで、一部スギとヒノキが使われている。肘木はケヤキで一部ヒノキが使われている。縁葛は成二寸五分、幅一寸九分のケヤキで隅扱首に相欠きで取付き、木口部分は別材で相欠きで取付く。隅扱首は成二寸五分、幅二寸一分のケヤキ、縁繫は成二寸四分、幅二寸のケヤキで、ともに身舎柱に大入れ柄差しとしている。縁根太は成二寸六分、幅二寸一分のスギで隅扱首に相欠きで取付く。縁板は厚さ一寸三分五厘で、スタジイ、ヒノキ、スギが使われており、上端から釘を打ち縁葛に止めている。脇障子柱は三寸八分五厘角のケヤキで、笠木は成二寸三分五厘、幅四寸三分のヒノキで身舎柱に大入れ柄差しとしている。

木階は後年に造り替えられているが、形式としては当初から五級の木階で

あつたと思われる。

(八) その他―部材の樹種

今回の工事では、一部の部材の樹種判定を行った。対象部材と判定結果は次の通りである。

名 称	位 置	樹 種
土台	いーゝ三	クリ
柱	いー	ケヤキ
羽目板(腰上)	い二ゝ三	カツラ
羽目板(腰下)	はーゝほ一	マツ
頭貫	ほーゝ三	シオジ
組物(大斗)	いー	ケヤキ
支輪板	いーゝほ一	ヒノキ
内法長押	いーゝ三	シオジ
破風板		カツラ
丸桁	身舎正面	マツ
化粧棟木		マツ
茅負	向拝	マツ
茅負	身舎背面	スギ
木負	身舎正面	マツ
地垂木	身舎正面	スギ
化粧裏板	身舎正面	マツ
登裏甲	背面西	マツ
高欄(桶束)	上い又三	ヒノキ
高欄(平桁)	ほ又三ゝ又ほ又三	ヒノキ
縁板	背面	スタジイ
木鼻	向拝柱東	ヒノキ
脇障子鏡板彫刻	西	ヒノキ
水引虹梁		ケヤキ



18b



18a



18d



18c



18g



18e

図18 本殿と幣殿の接続部

- a 屋根接続部 正面東側より見た
- b 同上 正面西側より見た
- c 同上 正面東側より見た
- d 同上 正面西側より見た
- e 床接続部 正面西側より見た
- f 接続部切り離し後 正面より見た
- g 同上 正面西側より見た



18f



19b



19a



19d



19c



19f



19e

図 19 屋根

- a 正面
- b 正面西側
- c 正面 東側より見た
- d 正面 西側より見た
- e 葺き材
- f 同上
- g 同上 側面



19g



20b



20a



20d



20c



20e

図 20 屋根下地・小屋組

- a 正面 下地
- b 同上
- c 正面 野垂木
- d 正面 小屋組
- e 背面 同上
- f 東面 同上
- g 西面 同上



20g



20f



21b



21a



21d



21c



21f



21e

図 21 軒廻り

- a 正面 軒廻り
- b 背面 同上
- c 正面 軒先 東側より見た
- d 同上 西側より見た
- e 正面 軒先 東側より見た
- f 同上 西側より見た
- g 正面 打越垂木



21g



22b



22a



22d



22c



22e

図 22 軒廻り・妻飾り・組物

- a 正面
- b 背面
- c 東面 妻飾り
- d 西面 同上
- e 東面 妻飾り
- f 身舎正面および向拝 組物、海老虹梁
- g 身舎背面 組物



22g



22f



23b



23a



23d



23c



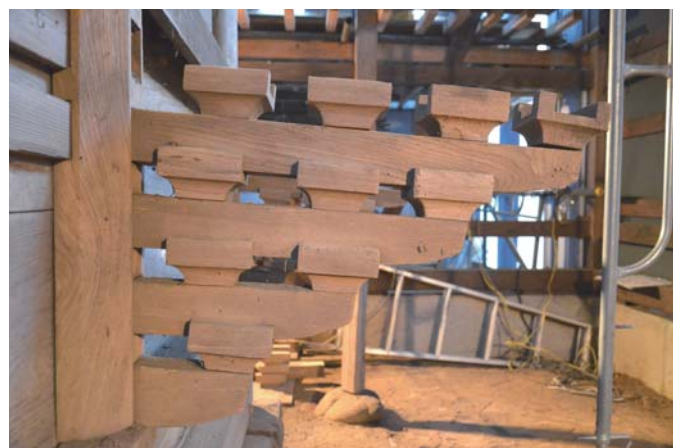
23f



23e

図 23 縁廻り・木階

- a 木階 正面西側より見た
- b 木階 彫桁
- c 東面 廻り縁
- d 西面 同上
- e 背面 同上
- f 西面 腰組
- g 腰組



23g



24b



24a



24d



24c



24f



24e



24g

図 24 軸部・基礎

- a 正面上より見た
- b 正面西側より見た
- c 軸部下部 正・東面
- d 同上 正・西面
- e 同上 背面
- f 土台 正面上より見た
- g 土台石および礎石 同上

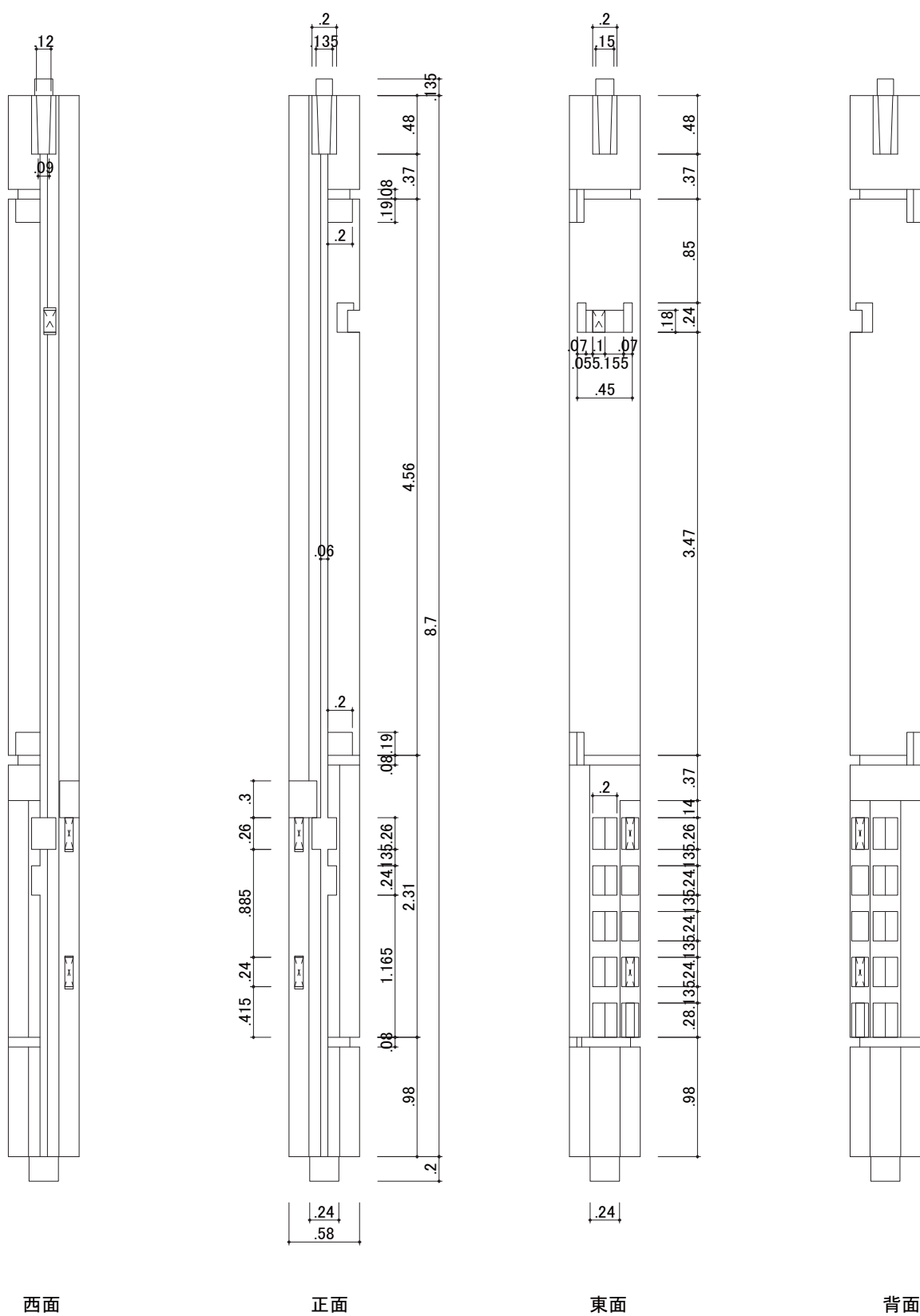


図 25-1 柱実測図 (身舎柱いー)

寸法単位は尺 縮尺 1/15

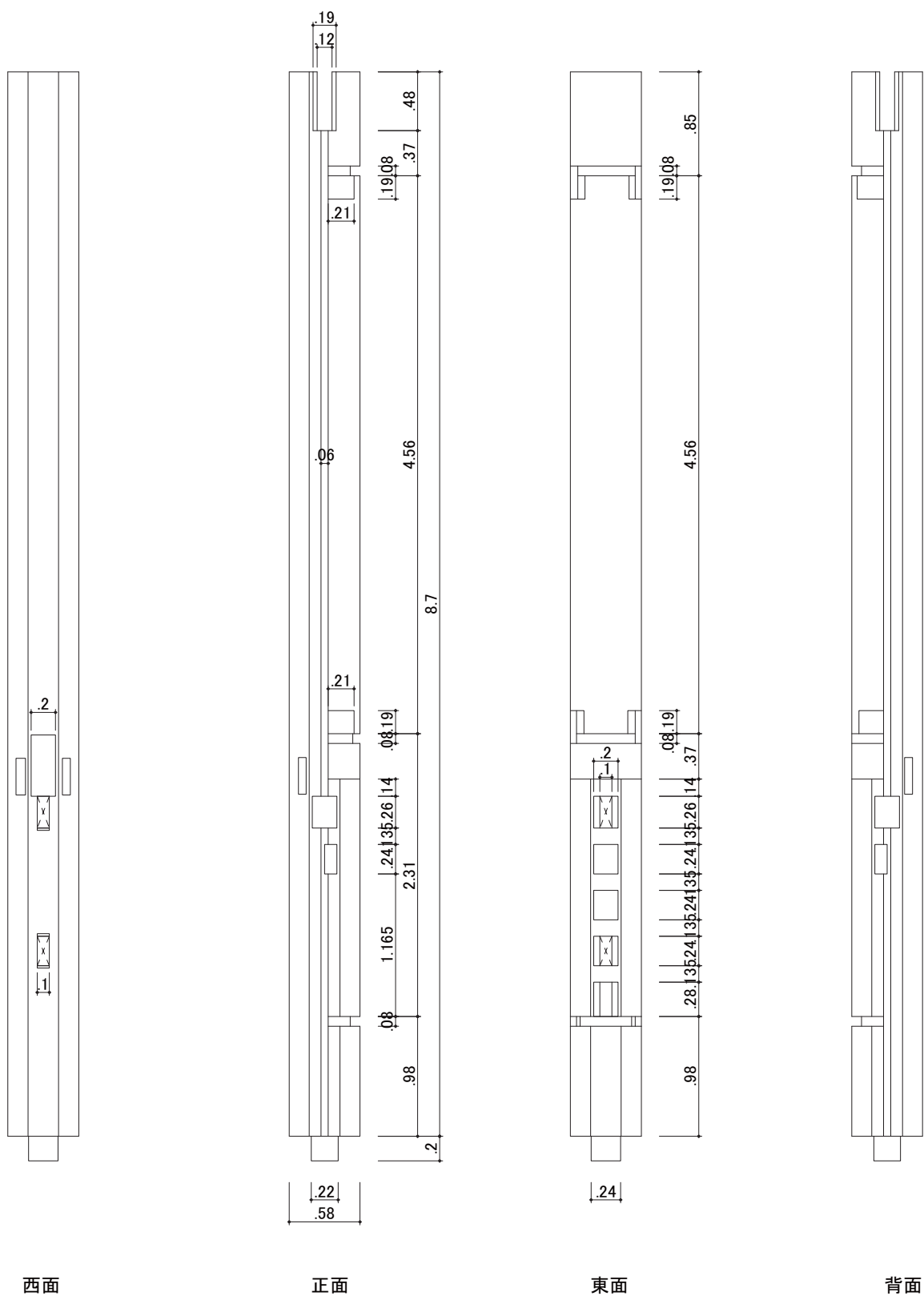


図 25-2 柱実測図（身舎柱い二）

寸法単位は尺 縮尺 1/15

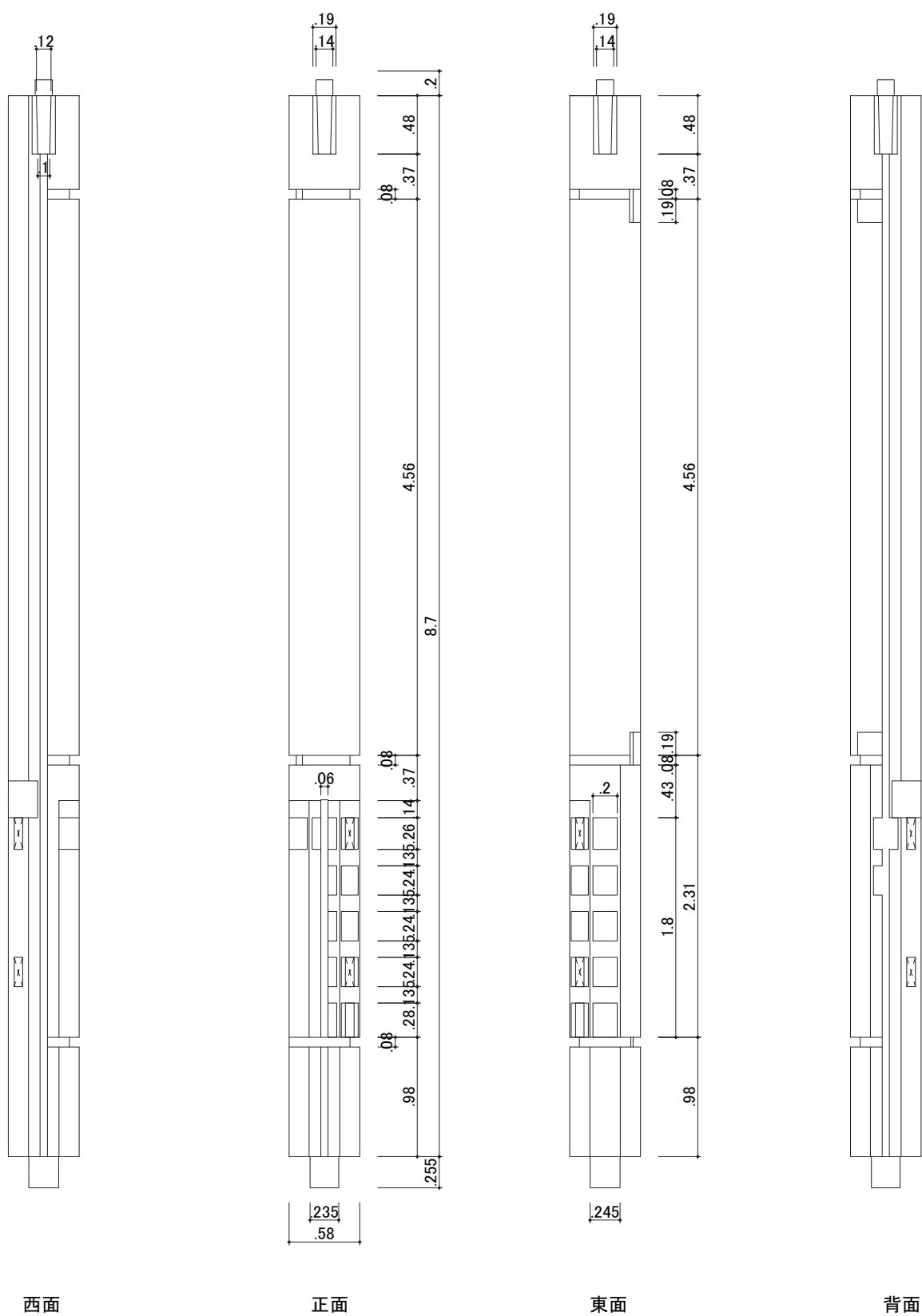


図 25-3 柱実測図 (身舎柱い三)

寸法単位は尺 縮尺 1/15

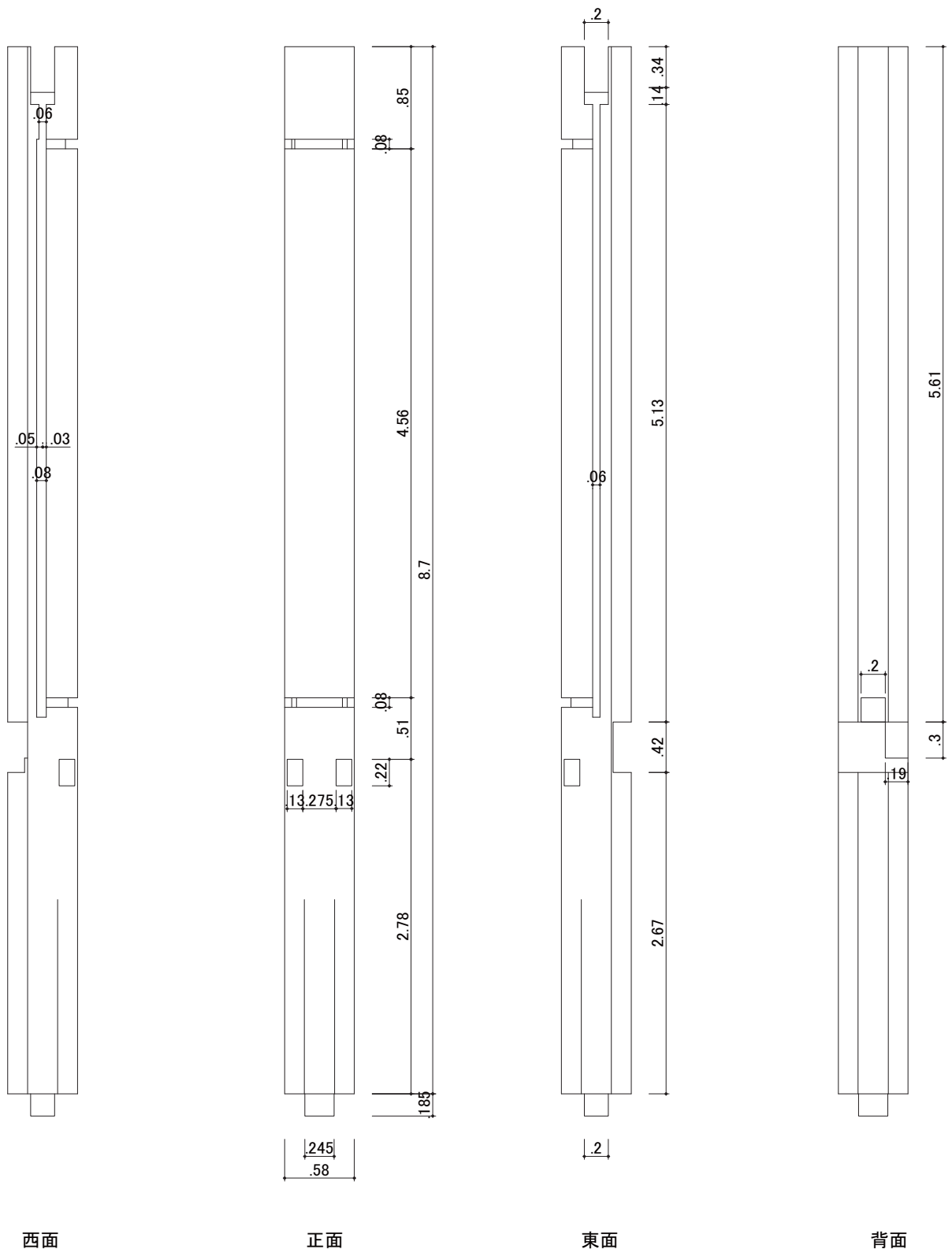


図 25-4 柱実測図（身舎柱ろ三）

寸法単位は尺 縮尺 1/15



寸法単位は尺 縮尺 1/15

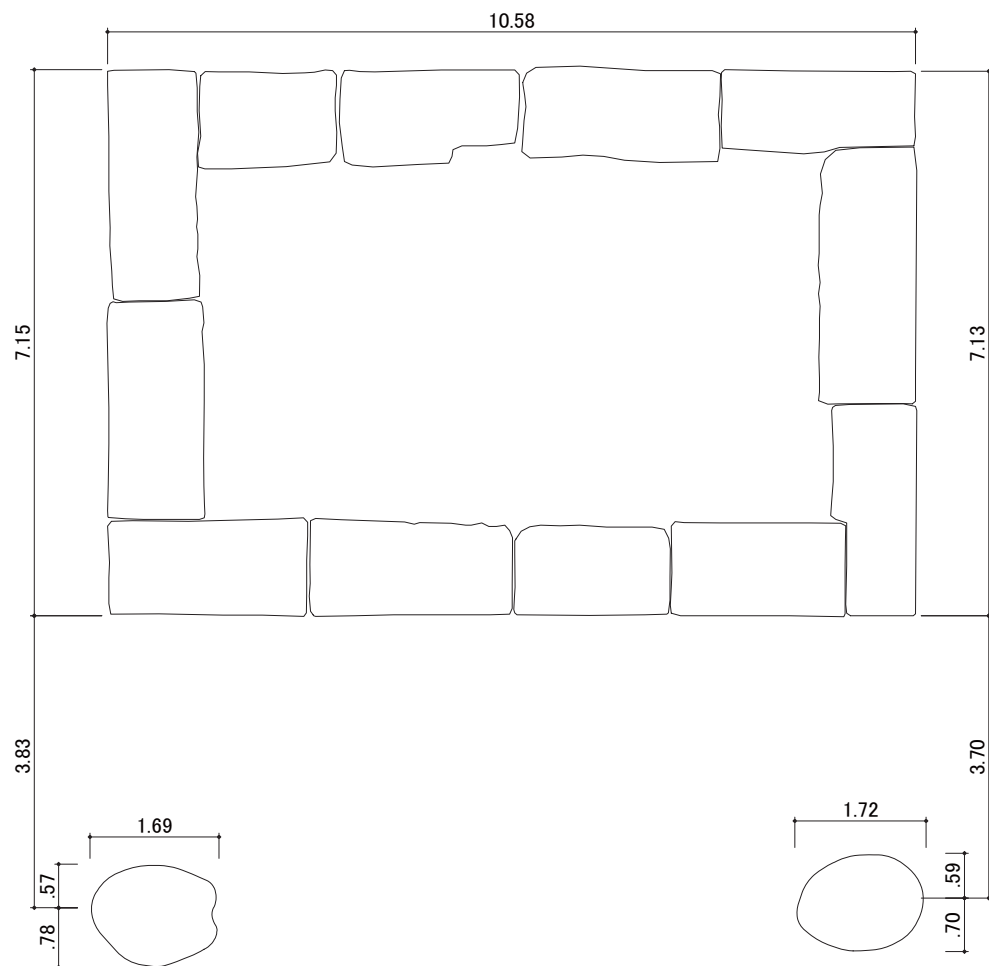


図 26-1 土台石・礎石伏図

寸法単位は尺 縮尺 1/30

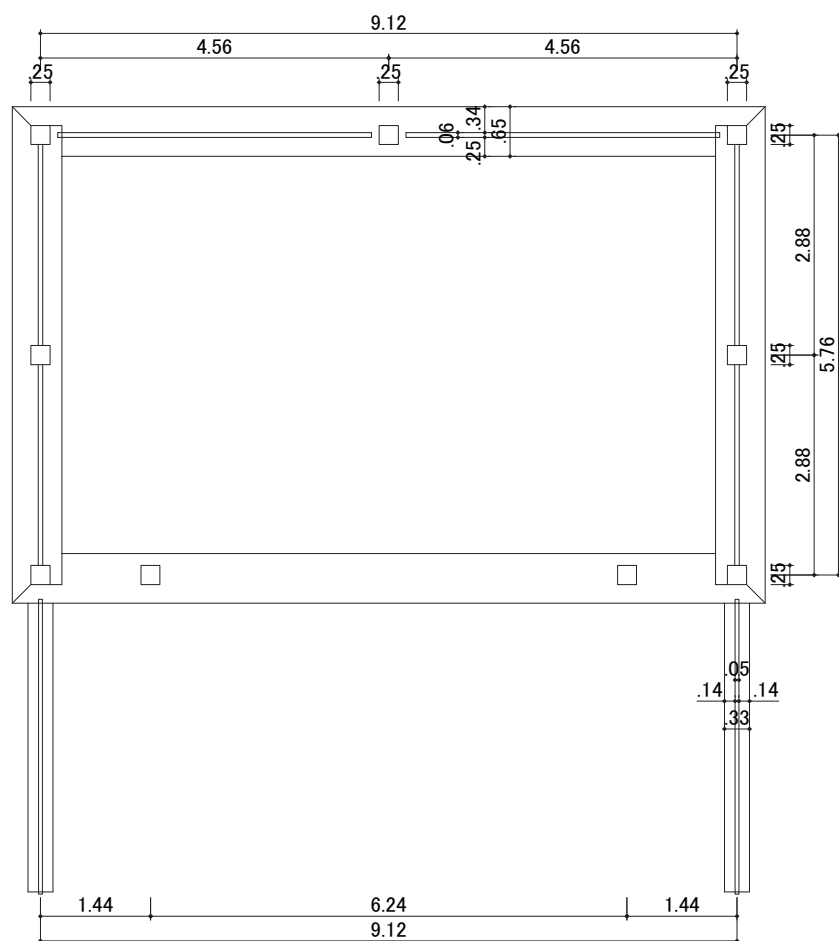


図 26-2 土台・地覆伏図

寸法単位は尺 縮尺 1/30

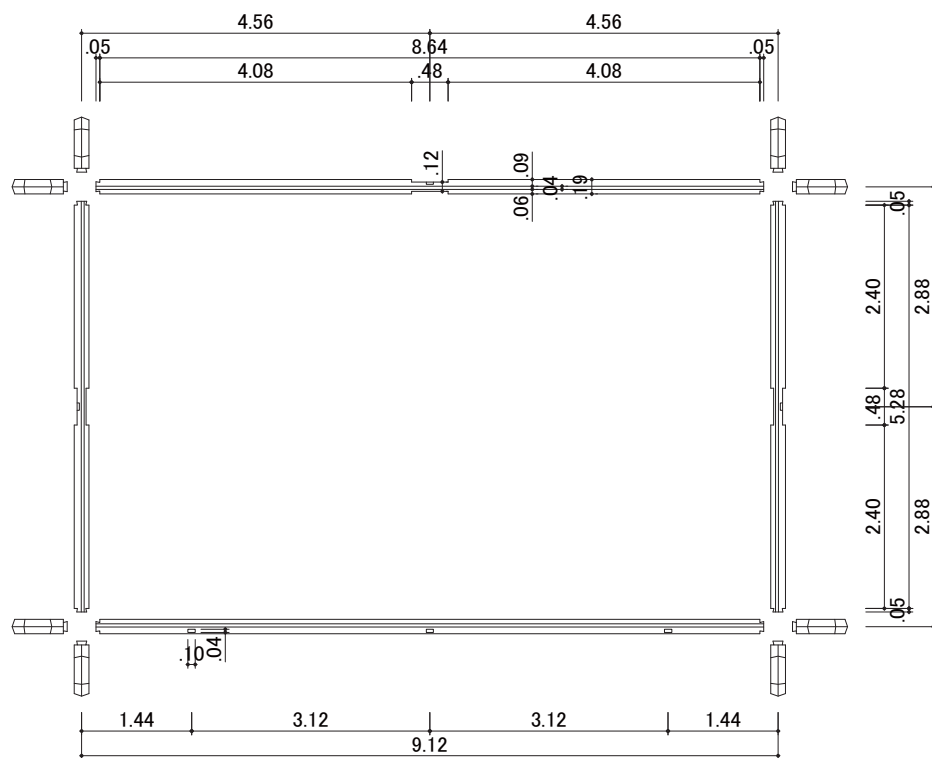


図 26-3 頭貫・拳鼻伏図

寸法単位は尺 縮尺 1/30

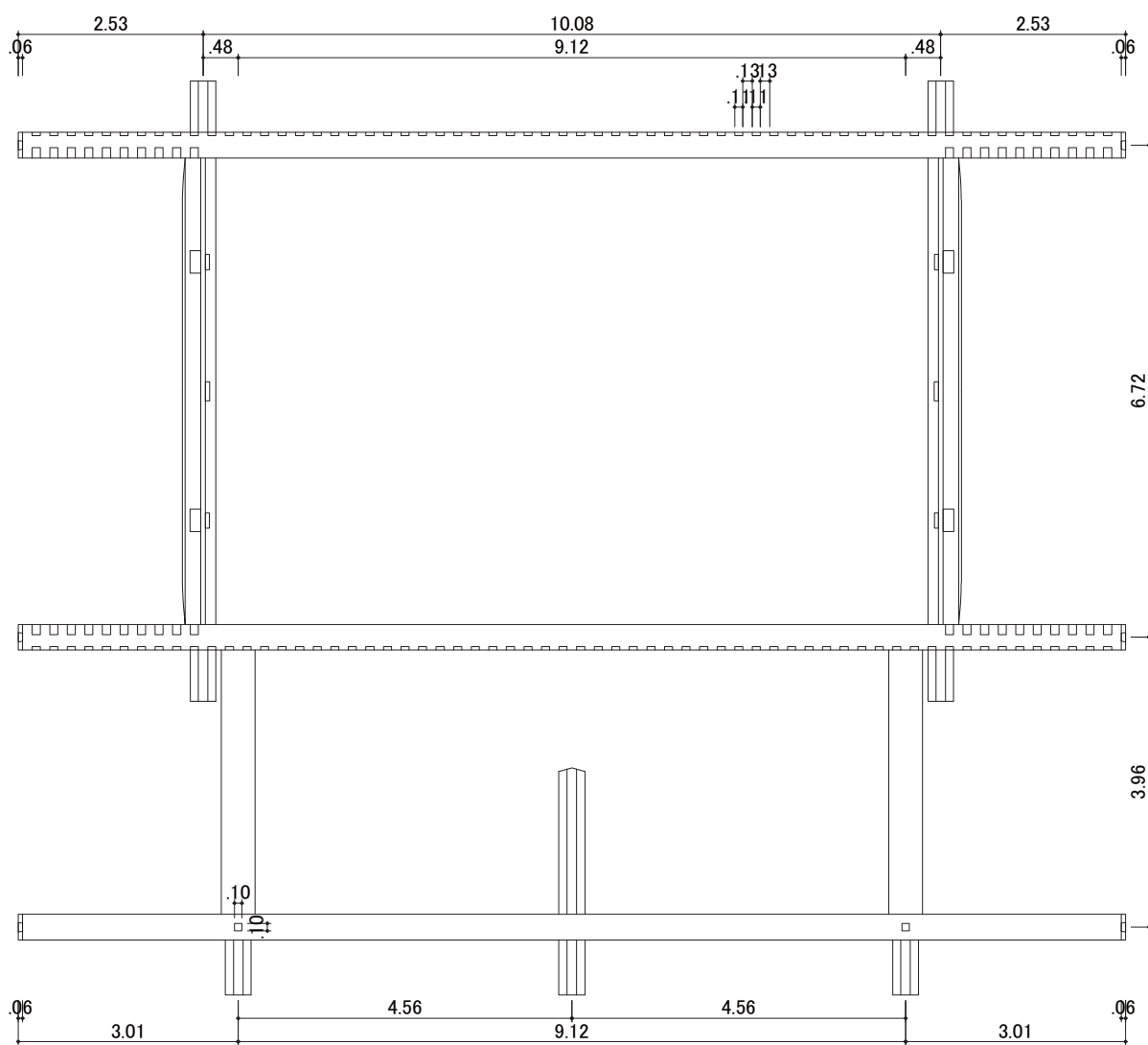


図 26-4 丸桁・妻大虹梁・海老虹梁・手挟み伏図

寸法単位は尺 縮尺 1/30

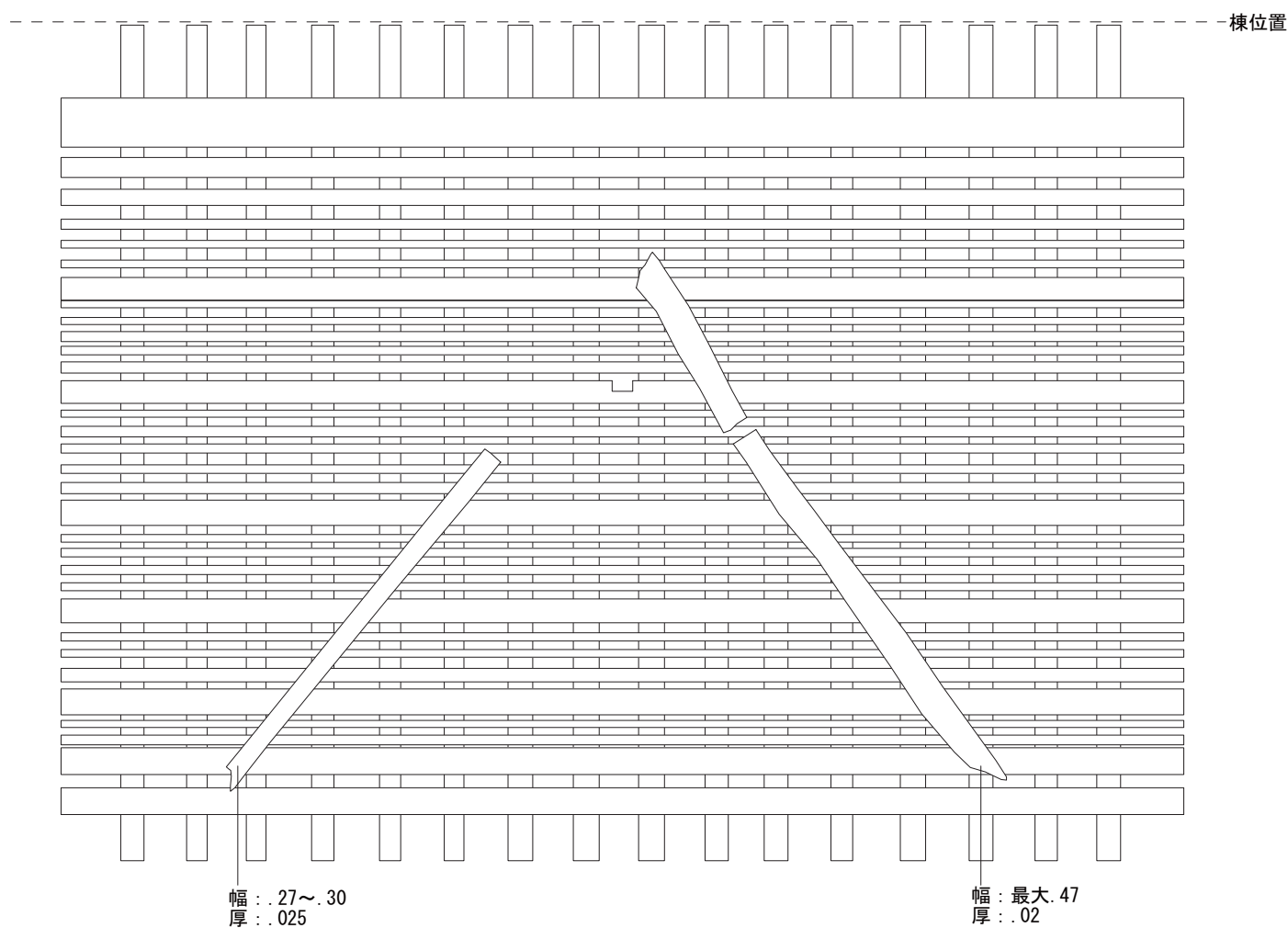


図 26-5 正面野垂木・野地板伏図

寸法単位は尺 縮尺 1/30

野垂木 : 幅 .28 ~ .37 厚さ .06 前後 野母屋に 2 本ずつ和釘打ち止め

野地板 (幅広) : 幅 .28 ~ .38 厚さ .04 野垂木に 2 本ずつ和釘打ち止め

野地板 (幅狭) : 幅 .1 ~ .23 厚さ .02 野垂木に 1 本ずつ和釘打ち止め

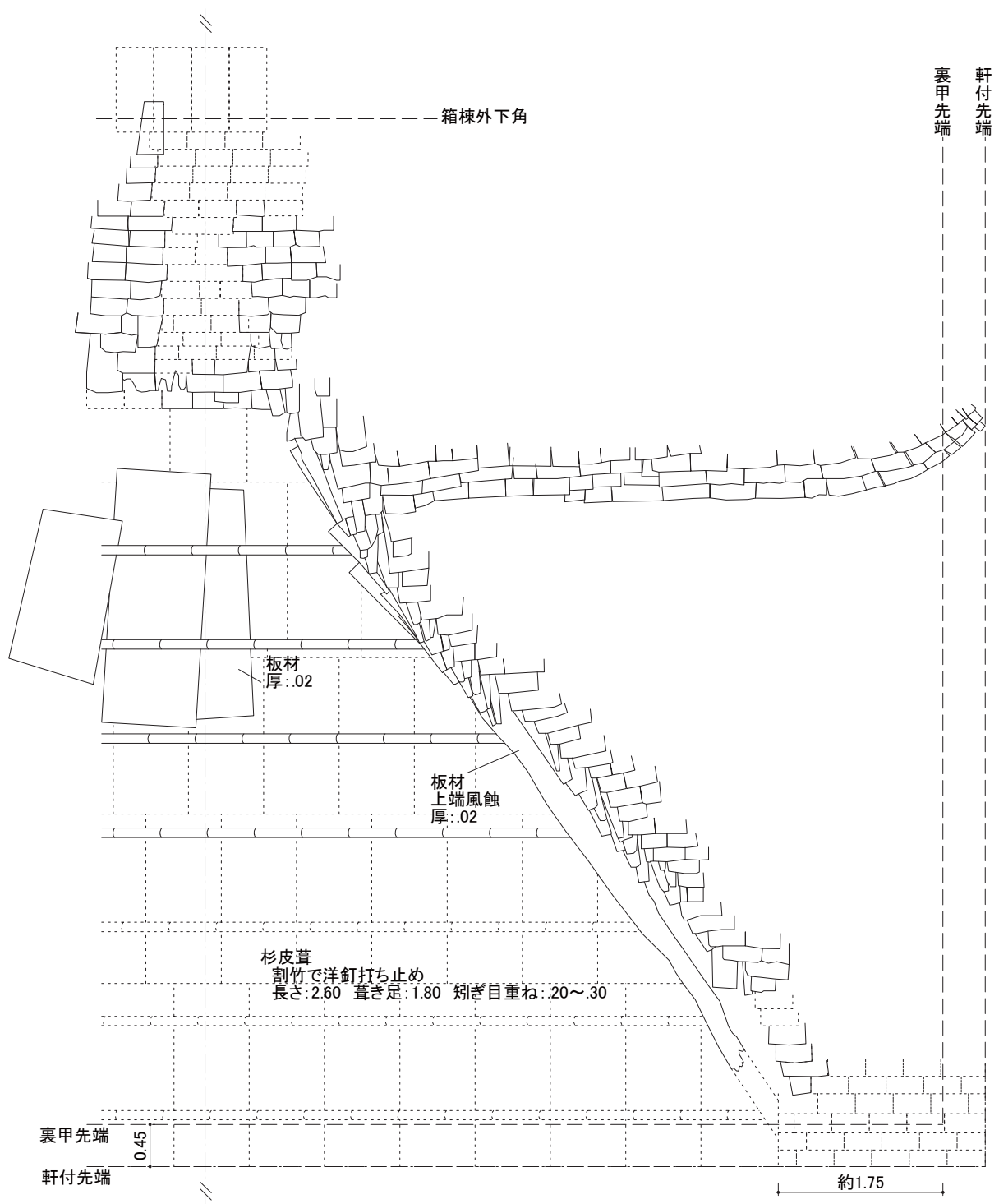


図 27 当初幣殿屋根取付き痕跡図

寸法単位は尺 縮尺 1/20

杉皮・竹はほとんどが欠失および位置が不明なため、
残存部で復原考察し、点線で示した。

表2 構成部材表

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上げ	再用	取替	新規補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無			
(1) 軸部													
土台	いー～ほ一	クリ	9.850	0.650	0.530	1	○		外:カシナ 内:チヨウナ			○	心去り材
〃	い三～ほ三	〃	9.750	0.650	0.530	1	○		〃			○	心持ち材
〃	いー～三	〃	6.500	0.650	0.520	1	○		〃			○	心去り材
〃	ほ一～三	〃	6.500	0.655	0.500	1	○		〃			○	心去り材
地覆	い三～四	クリ	3.850	0.330	0.370	1	○		カシナ			○	心持ち材
〃	ほ三～四	〃	3.800	0.335	0.330	1	○		〃				心持ち材
柱	いー	ケヤキ	9.035	0.565	0.580	1	○		〃			○	丸柱 屋内側および切目長押 下は八角のまま 心去り材
〃	い二	〃	8.920	0.565	0.575	1	○		〃			○	〃 心去り材
〃	い三	〃	9.070	0.570	0.560	1	○		〃			○	〃 心去り材
〃	ろ三	スギ	8.900	0.565	0.570	1	○		〃				〃 心持ち材
〃	は一	ケヤキ	8.910	0.560	0.570	1	○		〃				〃 心去り材
〃	に三	スギ	8.920	0.575	0.520	1	○		〃			○	〃 心持ち材
〃	ほ一	ケヤキ	9.100	0.570	0.575	1	○		〃				〃 心持ち材
〃	ほ二	〃	8.710	0.570	0.570	1	○		〃			○	〃 心去り材
〃	ほ三	〃	9.075	0.600	0.570	1	○		〃			○	〃 心去り材
向拝柱	い四	ケヤキ	8.345	0.520	0.535	1	○		カシナ				角柱 几帳面取り 心去り材
〃	ほ四	〃	8.425	0.525	0.530	1	○		〃			○	〃 心持ち材
半柱	い又三	ケヤキ	9.000	0.360	0.240	1	○		カシナ			○	心去り材
〃	ほ又三	〃	9.095	0.390	0.245	1	○		〃				心去り材
足固め	いー～は一	スギ	4.100	0.195	0.255	1	○		カシナ				
〃	は一～ほ一	〃	4.085	0.195	0.250	1	○		〃			○	
〃	いー～二	〃	2.435	0.195	0.250	1	○		〃			○	
〃	い二～三	ケヤキ	2.435	0.195	0.250	1	○		〃				
〃	ほ一～二	スギ	2.435	0.190	0.250	1	○		〃			○	
〃	ほ二～三	〃	2.435	0.190	0.255	1	○		〃			○	
頭貫	いー～ほ一	シオジ	8.725	0.180	0.460	1	○		カシナ			○	
〃	い三～ほ三	〃	8.730	0.185	0.460	1	○		〃			○	
〃	いー～三	〃	5.385	0.190	0.460	1	○		〃				

〃	ほー～三	〃	5.395	0.190	0.460	1	○	〃		○			
羽目板(腰下)	いー(ほー(下)	ヱヅ	4.100	0.800	0.055	1	○	外:カシナ 内:オガ			○		
〃	〃 (中)	〃	4.100	1.170	0.050	1	○	〃		○			
〃	〃 (上)	〃	4.100	0.610	0.055	1	○	〃		○			
〃	ほー(ほー(下)	〃	4.100	1.150	0.055	1	○	〃			○		
〃	〃 (中)	〃	4.115	1.165	0.050	1	○	〃			○		
〃	〃 (上)	〃	4.110	0.270	0.050	1	○	〃			○		
〃	いー～二(下)	ヒヰ	2.390	0.730	0.045	1	○	〃			○		
〃	〃 (中下)	〃	2.410	0.555	0.050	1	○	〃			○		
〃	〃 (中上)	〃	2.425	0.620	0.040	1	○	〃			○		
〃	〃 (上)	〃	2.415	0.660	0.045	1	○	〃			○		
〃	い二～三(下)	—	—	—	—	欠						○	
〃	〃 (中)	ヱヅ	2.375	1.145	0.050	1	○	外:カシナ 内:オガ		○			
〃	〃 (上)	—	—	—	—	欠						○	
〃	ほー～二(下)	ヱヅ	2.400	0.855	0.055	1	○	外:カシナ 内:オガ			○		
〃	〃 (中)	〃	2.395	1.095	0.050	1	○	〃		○			
〃	〃 (上)	〃	2.400	0.550	0.055	1	○	〃			○		
〃	ほ二～三(下)	〃	2.410	0.825	0.055	1	○	〃				○	
〃	〃 (中)	〃	2.400	1.165	0.055	1	○	〃			○		
〃	〃 (上)	〃	2.410	0.605	0.045	1	○	〃				○	
羽目板(腰上)	いー(ほー(下)	カツラ	4.090	1.010	0.060	1	○	カシナ		○			
〃	〃 (中)	〃	4.090	2.010	0.055	1	○	〃			○		
〃	〃 (上)	〃	4.090	2.030	0.050	1	○	〃		○			
〃	ほー(ほー(下)	〃	4.090	1.015	0.060	1	○	〃		○			
〃	〃 (中)	〃	4.090	2.020	0.060	1	○	〃			○		
〃	〃 (上)	〃	4.080	2.030	0.055	1	○	〃		○			
〃	いー～二(下)	スギ	2.420	0.630	0.060	1	○	〃				○	
〃	〃 (中)	カツラ	2.370	2.000	0.055	1	○	〃				○	
〃	〃 (上)	〃	2.370	1.985	0.050	1	○	〃				○	
〃	い二～三(下)	〃	2.390	0.970	0.060	1	○	〃				○	
〃	〃 (中)	〃	2.390	2.010	0.055	1	○	〃				○	
〃	〃 (上)	〃	2.390	2.040	0.060	1	○	〃				○	
〃	ほー～二(下)	〃	2.405	0.935	0.058	1	○	〃				○	

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上(ザ)	再用		取替	新規補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無	〃有			
羽目板(腰上)	ぼー～二(中)	カツラ	2.395	2.010	0.055	1	○		カンナ		○			
〃	〃 (上)	〃	2.400	1.985	0.055	1	○		〃		○			
〃	ぼ二～三(下)	〃	2.395	1.010	0.060	1	○		〃		○			
〃	〃 (中)	〃	2.400	2.010	0.055	1	○		〃		○			
〃	〃 (上)	〃	2.400	2.035	0.060	1	○		〃		○			
〃	い三～ろ三	ベツ	4.870	0.940	0.050	1	○		外:カンナ 内:オガ		○			
〃	に三～ぼ三	〃	4.880	0.950	0.050	1	○		〃		○			
地長押	いー～ぼー	シオジ	9.805	0.300	0.290	1	○		カンナ		○			
〃	いー～三	〃	6.450	0.300	0.290	1	○		〃			○		
〃	ぼー～三	〃	6.430	0.315	0.285	1	○		〃		○			
切目長押	いー～ぼー	シオジ	9.790	0.300	0.370	1	○		カンナ		○			
〃	い三～ぼ三	〃	9.780	0.315	0.360	1	○		〃		○			
〃	いー～三	〃	—	0.305	0.350	1	○		〃			○		
〃	ぼー～三	〃	6.450	0.315	0.365	1	○		〃		○			
内法長押	いー～ぼー	シオジ	9.780	0.310	0.360	1	○		カンナ		○			
〃	い三～ぼ三	〃	9.800	0.320	0.360	1	○		〃		○			
〃	いー～三	〃	6.420	0.305	0.360	1	○		〃		○			
〃	ぼー～三	〃	6.440	0.310	0.355	1	○		〃		○			
海老虹梁	東	ケヤキ	5.225	0.455	1.140	1	○		カンナ		○			
〃	西	〃	5.150	0.470	1.170	1	○		〃		○			
水引虹梁		ケヤキ	8.820	0.405	0.635	1	○		カンナ		○			
拳鼻	いー	ケヤキ	0.725	0.190	0.620	2	○		カンナ		○			
〃	い三	〃	0.725	0.190	0.620	2	○		〃		○			
〃	ぼー	〃	0.725	0.190	0.620	2	○		〃		○			
〃	ぼ三	〃	0.725	0.190	0.620	2	○		〃		○			
木鼻	東	ヒノキ	1.400	0.500	0.950	1	○				○			
〃	西	〃	1.400	0.500	0.950	1	○				○			
(2)組物														
大斗	身舎	ケヤキ	別途記載			9	○		カンナ		○			
桧肘木	〃	〃	1.170	0.195	0.225	8	○		〃		○			

〃	〃	〃	1.170	0.100	0.225	5	○	〃	○	○		
〃	〃	〃	0.490	0.195	0.225	5	○	〃	○	○		
隅行肘木	〃	〃	1.920	0.200	0.225	4	○	〃	○	○		
方斗	〃	〃	別途記載			21	○	〃	○	○		
巻斗	〃	〃	〃			62	○	〃	○	○		
鬼斗	〃	〃	〃			4	○	〃	○	○		
肘木	〃	〃	1.650	0.195	0.225	8	○	〃	○	○		
〃	〃	〃	1.170	0.195	0.225	5	○	〃	○	○		
実肘木	〃	〃	4.000	0.195	0.200	2	○	〃	○			
〃	〃	〃	2.520	0.195	0.200	2	○	〃	○			
〃	〃	〃	2.010	0.195	0.200	3	○	〃	○			
拳鼻	〃	〃	0.340	0.195	0.330	13	○	〃	○			
面戸板	〃	スギ	0.350	0.170	0.035	8	○	外・カンナ 内：オガ	○			
通肘木	ハー～ほー	ケヤキ	9.990	0.200	0.230	1	○	カンナ	○			
〃	い三～ほ三	〃	10.000	0.200	0.230	1	○	〃	○			
〃	ハー～三	〃	6.630	0.200	0.225	1	○	〃	○			
〃	ほー～三	〃	6.635	0.200	0.225	1	○	〃	○			
大斗	向拝	ケヤキ	別途記載			2	○	カンナ	○			
枹肘木	〃	〃	1.650	0.195	0.195	2	○	〃	○			
〃	〃	〃	1.170	0.195	0.195	2	○	〃	○			
方斗	〃	〃	別途記載			2	○	〃	○			
巻斗	〃	〃	〃			10	○	〃	○	○		
実肘木	〃	〃	2.520	0.195	0.195	2	○	〃	○			
面戸板	〃	スギ	0.350	0.170	0.035	4	○	外：カンナ 内：オガ	○			

(3) 中備え、琵琶板、支輪板

大斗	向拝中央	ケヤキ	別途記載			1	○	カンナ	○			
枹肘木	〃	〃	1.100	0.200	0.190	2	○	〃	○			
方斗	〃	〃	別途記載			1	○	〃	○			
巻斗	〃	〃	〃			4	○	〃	○			
実肘木	〃	〃	1.750	0.195	0.195	2	○	〃	○			
龕股	向拝	ヒノキ	1.740	0.205	0.480	2	○	カンナ	○			
巻斗	〃	ケヤキ	0.360	0.360	0.200	2	○	〃	○			
実肘木	〃	〃	1.000	0.195	0.180	2	○	〃	○			

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上り	再用		取替	新規補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無	〃有			
手挟		ヱツ	3.120	0.360	1.430	1	○		カンナ	○				
付藁股	身舎	ヒノキ	1.740	0.080	0.510	6	○		カンナ	○				
付巻斗	〃	ケヤキ	0.360	0.170	0.210	1	○		〃	○		○		
琵琶板	いー～ほー(北)	スギ	8.800	0.630	0.055	1	○		内:オガ 端部:チヨウナ	○				
〃	い三～ほ三(南)	〃	8.790	0.630	0.060	1	○		内:オガ	○				
〃	いー～三(東)	〃	5.450	0.620	0.045	1	○		内:オガ 端部:カンナ	○				
〃	ほー～三(西)	〃	5.450	0.625	0.055	1	○		内:オガ 端部:カンナ	○				
支輪板	いー～ほー(北)	ヒノキ	9.695	0.530	0.225	1	○		上端:チヨウナ 内:チヨウナ	○				
〃	い三～ほ三(南)	〃	9.660	0.520	0.215	1	○		上端:オガ 内:チヨウナ	○				
〃	いー～三(東)	〃	6.335	0.525	0.200	1	○		〃	○				
〃	ほー～三(西)	〃	6.350	0.555	0.220	1	○		上端:チヨウナ 内:オガ	○				
(4) 軒廻り														
丸桁	正面	ヱツ	15.170	0.350	0.530	1	○		カンナ	○				
〃	背面	〃	15.140	0.340	0.525	1	○		〃	○				
〃	向拝	〃	15.115	0.350	0.535	1	○		〃	○				
化粧棟木		ヱツ	14.820	0.360	0.510	1	○		カンナ	○				
妻大虹梁	東	ケヤキ	8.455	0.460	0.860	1	○		カンナ	○				
〃	西	〃	8.435	0.455	0.850	1	○		〃	○				
支外樋	正面東	スギ	4.370	0.110	0.130	10	○		カンナ	○				
〃	〃 西	〃	4.370	0.110	0.130	10	○		〃	○				
〃	背面東	〃	4.370	0.110	0.130	10	○		〃	○				
〃	〃 西	〃	4.370	0.110	0.130	10	○		〃	○				
地樋	正面	〃	1.720	0.110	0.130	38	○		〃	○			○	
〃	背面	〃	1.840	0.110	0.130	52	○		〃	○			○	一部保管材
打越樋	正面	〃	4.450	0.110	0.130	62	○		〃	○				
飛檐樋	正面	〃	1.500	0.110	0.130	49	○		〃	○			○	
〃	背面	〃	1.500	0.110	0.130	29	○		〃	○			○	一部保管材
飛檐樋(力樋)	正面	〃	2.045	0.110	0.280	2	○		〃	○				
〃	背面	〃	2.045	0.110	0.280	1	○		〃	○			○	
化粧裏板	正面飛檐樋上	ヱツ	1.300	.80前後	0.030	17	○		上端:オガ	○	○	○	○	

〃	正面打越極上	〃	3.800	.80前後	0.030	18	○	〃	○	○	○	○	
〃	正面地極上	〃	1.500	.80前後	0.035	13	○	〃	○	○	○	○	
〃	正面支外極上	〃	4.300	.72前後	0.030	4	○	〃	○	○	○	○	
〃	背面	—	—	—	—	欠						○	保管材再用
木負	正面	ヅツ	15.130	0.235	0.230	1	○	カレナ	○				
〃	背面	スギ	—	0.235	0.230	1	○	〃		○			
〃	向拝	ヅツ	—	0.230	0.230	1	○	〃			○		
茅負	背面	スギ	15.130	0.240	0.235	1	○	カレナ		○			
〃	向拝	ヅツ	—	0.230	0.230	1	○	〃			○		
裏甲	正面	スギ	15.680	0.390	0.120	1	○	上端:チヨウナ 内:チヨウナ		○			
〃	背面	ヅツ	—	0.380	0.120	1	○	〃			○		
登り裏甲	正面東	スギ	12.400	0.400	0.120	1	○	上端:チヨウナ 内:チヨウナ		○			
〃	〃 西	ヅツ	12.400	0.400	0.120	1	○	〃		○			
〃	背面東	スギ	8.700	0.400	0.120	1	○	〃		○			
〃	〃 西	ヅツ	8.700	0.400	0.120	1	○	〃		○			
破風板	正面東	カツラ	12.000	0.570	0.130	1	○	カレナ		○			
〃	〃 西	〃	12.000	0.570	0.130	1	○	〃		○			
〃	背面東	〃	—	0.570	0.130	1	○	〃			○		
〃	〃 西	〃	8.500	0.570	0.130	1	○	〃		○			
懸魚	東・西	ヒノキ	1.650	1.200	0.130	2	○			○			
桁隠し	身舎 東・西	ヒノキ	1.200	1.000	0.130	4	○			○			
〃	向拝 東・西	〃	1.930	0.520	0.130	2	○			○			

(5) 妻飾り

大斗	大虹梁上 東・西	ケヤキ	0.480	0.235	0.300	4	○	カレナ	○				
枅肘木 (桁行)	〃	〃	0.845	0.155	0.190	4	○	〃	○				
枅肘木 (梁間)	〃	〃	0.940	0.080	0.190	4	○	〃	○				
巻斗 (桁行)	〃	〃	0.290	0.280	0.160	4	○	〃	○				
巻斗 (梁間)	〃	〃	0.295	0.140	0.160	12	○	〃		○			
実肘木 (桁行)	〃	〃	0.760	0.155	0.155	4	○	〃	○				
実肘木 (梁間)	〃	〃	1.560	0.080	0.160	4	○	〃	○				
二重虹梁	東	〃	5.085	0.285	0.485	1	○	〃	○				
〃	西	〃	5.050	0.285	0.485	1	○	〃	○				
化粧母屋	東・西	〃	1.730	0.290	0.480	4	○	〃	○				

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上(ガ)	再用		取替	新規補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無	〃有			
太瓶束	東・西	ケヤキ	0.970	0.465	0.390	2	○		カレナ	○				
太瓶束拳鼻	東	ヒノキ	0.580	0.410	0.160	1	○		〃			○		
〃	西	〃	0.580	0.410	0.160	1	○		〃	○				
笈形	東・西	ヒノキ	1.150	1.040	0.060	4	○		〃	○				
大斗	太瓶束上 東・西	ケヤキ	0.480	0.215	0.300	2	○		〃	○	○			
実肘木	〃	〃	1.000	0.200	0.200	2	○		〃	○		○		
妻板	東	スギ	—	—	0.050	4	○		〃	○				
〃	西	〃	—	—	0.050	4	○		〃	○				
彫物	虹梁間 東・西	ヒノキ	3.050	—	0.580	2	○			○				
(6)小屋組														
小屋梁	Ⅱ二～Ⅲ二	ベツ	9.830	0.500	0.570	1	○		チョウナ(面皮残し)	○				
〃	Ⅰ一～Ⅲ	〃	6.480	0.390	0.590	1	○		オガ・チョウナ		○			
〃	Ⅲ一～Ⅲ	〃	6.475	0.350	0.590	1	○		〃		○			
棟束 (化粧棟木受)	東	スギ	3.510	0.330	0.345	1	○		チョウナ・カレナ		○			
〃	西	〃	3.610	0.265	0.285	1	○		〃	○				
束 (貫受)	正面東	スギ	1.560	0.300	0.300	1	○		〃	○				
〃	〃 西	〃	1.560	0.305	0.330	1	○		〃	○				
〃	背面東	〃	1.565	0.280	0.330	1	○		〃	○				
〃	〃 西	〃	1.560	0.290	0.330	1	○		〃	○				
貫	東	スギ	4.550	0.350	0.090	1	○		内:オガ 他:チョウナ	○				
〃	西	〃	4.805	0.340	0.090	1	○		〃	○				
野母屋	正面 (一母屋)	ベツ	8.960	0.310	0.355	1	○		チョウナ・カレナ			○		
〃	〃 (二母屋)	〃	14.350	0.400	0.480	1	○		オガ・チョウナ		○			
〃	〃 (三母屋)	スギ	14.275	0.380	0.700	1	○		ヨキ・チョウナ	○				
〃	背面 (一母屋)	ベツ	14.770	0.500	0.480	1	○		オガ・ヨキ・チョウナ	○				保管材
〃	〃 (二母屋)	スギ	14.320	0.330	0.750	1	○		ヨキ・チョウナ	○				保管材
野棟木		ベツ	11.230	0.350	0.420	1	○		カレナ			○		
桔木	正面東	ベツ	10.200	φ 0.400		1	○		チョウナ			○		
〃	〃 西	〃	11.000	φ 0.360		1	○		チョウナ(面皮残し)		○			
〃	背面東	〃	8.130	φ 0.480		1	○		チョウナ	○				

〃	〃 西	〃	8.420	φ 0.330	1	○	〃	○			
棟束 (野棟木受)	東	スギ	1.920	0.310	0.320	1	○	チヨウナ	○		
〃	西	〃	2.090	0.320	0.330	1	○	〃	○		
束	三母屋上東	スギ	0.980	0.320	0.290	1	○	チヨウナ	○		
〃	三母屋上西	〃	1.105	0.335	0.275	1	○	〃	○		
野種	正面	スギ	11.910	.28～.37	.06前後	16	○	上端:オガ 他:チヨウナ	○		形式変更
〃	背面	—	—	—	—	欠				○	形式変更
野地板	正面	スギ	16.000	.28～.38	0.040	9	○	上端:オガ		○	形式変更
〃	〃	〃	16.000	.1～.23	0.040	23	○			○	形式変更
〃	背面	—	—	—	—	欠					形式変更
幣殿取付受板	正面	スギ	—	0.470	0.020	1	○				形式変更
〃	〃	〃	—	0.300	0.025	1	○				形式変更

(7) 床組、造作

床板 (当初)	北から一	ベツ	9.010	0.880	0.090	1	○	裏:ヨキ	○		保管材
〃	〃 二	〃	9.040	0.960	0.050	1	○	裏:オガ	○		保管材
〃	〃 三	〃	9.035	0.945	0.055	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 四	〃	9.040	0.980	0.060	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 五	〃	9.020	0.990	0.055	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 六	〃	9.035	0.950	0.050	1	○	〃	○		保管材
根太 (当初)	東から一	スギ	—	0.300	0.215	1	○	チヨウナ		○	保管材
〃	〃 二	〃	5.690	0.250	0.200	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 三	〃	5.490	0.290	0.200	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 四	〃	5.740	0.270	0.200	1	○	〃	○		保管材
〃	〃 五	〃	5.720	0.180	0.135	1	○	〃		○	保管材
大引 (当初)		シイ	8.695	0.650	0.380	1	○	上端:チヨウナ (面皮残し)		○	保管材
床板 (現状)		スギ	9.050	0.670	0.070	8	○			○	
〃		〃	9.050	0.490	0.070	1	○			○	
根太 (現状)		ベイツガ	5.700	0.290	0.130	10	○			○	
根太掛 (現状)		〃	5.700	0.460	0.130	2	○			○	
大引 (現状)		〃	5.700	0.775	0.130	1	○				
付敷居	いー～はー	ケヤキ	4.180	0.195	0.180	1	○	カシナ	○		
〃	はー～ほー	〃	4.205	0.185	0.185	1	○	〃	○		
〃	いー～二	〃	2.530	0.170	0.165	1	○	〃	○	○	

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上り	再用		新規格補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無	〃有		
付敷居	い二～三	ケヤキ	2.500	0.180	0.180	1	○		カンナ			○	
〃	ほ一～二	〃	2.540	0.180	0.180	1	○		〃	○			
〃	ほ二～三	〃	2.485	0.185	0.185	1		○	〃	○			
付鴨居	い一～ほ一	ケヤキ	4.190	0.190	0.185	1	○		カンナ	○			
〃	ほ一～ほ一	〃	4.195	0.190	0.185	1	○		〃	○			
〃	い一～二	〃	2.530	0.185	0.185	1	○		〃		○		
〃	い二～三	〃	2.505	0.180	0.185	1	○		〃	○			
〃	ほ一～二	〃	2.540	0.185	0.180	1	○		〃	○			
〃	ほ二～三	〃	2.515	0.190	0.185	1	○		〃	○			

(8) 縁廻り

腰組	巻斗			ケヤキ	別途記載			91	○	カンナ	○	○	○	○	一部スギ・ヒノキ
	三方斗			〃	〃			5	○	〃	○	○	○		
	鬼斗			〃	〃			1	○	〃		○		○	
	肘木			〃	0.600	0.200	0.280	9	○	〃	○	○			一箇所ヒノキ
	〃			〃	1.080	0.200	0.240	8	○	〃	○	○		○	
	〃			〃	1.560	0.200	0.240	8	○	〃	○	○		○	
	〃			〃	2.040	0.200	0.240	9	○	〃	○	○			
	隅行肘木			〃	0.800	0.210	0.280	4	○	〃	○	○			
	〃			〃	2.180	0.210	0.240	3	○	〃	○	○		○	
	〃			〃	2.200	0.210	0.240	3	○	〃	○	○		○	
	〃			〃	3.000	0.210	0.240	3	○	〃	○	○		○	
	付通肘木			スギ	4.115	0.075	0.230	1	○	カンナ	○				
	〃			—	—	—	—	欠						○	
	〃			—	—	—	—	欠						○	
	〃			スギ	2.420	0.075	0.235	1	○	カンナ			○		
	〃			—	—	—	—	欠						○	
	〃			スギ	2.445	0.070	0.230	1	○	カンナ		○			
	付巻斗			ヒノキ	0.365	0.120	0.23	8		カンナ					○保管材
	縁葛			ケヤキ	13.300	0.190	0.230	1	○	カンナ	○				
	〃			〃	7.995	0.190	0.250	1	○	〃	○				

〃	又ほ上ー～又三	〃	10.060	0.190	0.220	1	○	〃		○			
〃	上い又三～い又三	—	—	—	—	欠						○	
〃	ほ又三～又ほ又三	ケヤキ	1.990	0.190	0.250	1	○	カシナ		○			
縁藁木口	上い上ー(北)	—	—	—	—	欠						○	
〃	〃 (東)	—	—	—	—	欠						○	
〃	又ほ上ー(北)	ケヤキ	0.420	0.190	0.250	1	○	カシナ		○			
〃	〃 (西)	—	—	—	—	欠							
〃	上い又三(東)	—	—	—	—	欠						○	
〃	〃 (南)	—	—	—	—	欠						○	
〃	又ほ又三(西)	ケヤキ	0.420	0.190	0.250	1	○	カシナ		○			
〃	〃 (南)	〃	0.410	0.190	0.250	1	○	〃		○			
縁繫	い上ー～いー	ケヤキ	2.020	0.195	0.240	1	○	カシナ			○		
〃	は上ー～はー	〃	2.325	0.190	0.240	1	○	〃			○		
〃	ほ上ー～ほー	〃	2.020	0.200	0.240	1	○	〃		○			
〃	上いー～いー	〃	1.915	0.195	0.250	1	○	〃			○		
〃	上い二～い二	〃	2.300	0.190	0.220	1	○	〃			○		
〃	上い三～い三	〃	2.000	0.200	0.240	1	○	〃			○		
〃	ほー～又ほー	〃	1.930	0.190	0.230	1	○	〃			○		
〃	ほ二～又ほ二	〃	2.540	0.190	0.230	1	○	〃			○		
〃	ほ三～又ほ三	〃	2.020	0.200	0.240	1	○	〃			○		
縁根太	上い上ー～又ほ上ー	スギ	12.690	0.210	0.250	1	○	カシナ		○			
〃	上い上ー～又三	〃	9.425	0.195	0.255	1	○	〃			○		
〃	又ほ上ー～又三	〃	9.425	0.210	0.260	1	○	〃					
隅段首	上い上ー～いー	ケヤキ	4.250	0.210	0.250	1	○	カシナ			○		
〃	上い又三～い三	〃	4.250	0.210	0.250	1	○	〃			○		
〃	ほー～又ほ上ー	〃	4.250	0.210	0.250	1	○	〃			○		
〃	ほ三～又ほ又三	〃	4.250	0.210	0.250	1	○	〃			○		
縁板	北面(東から1)	—	—	—	—	欠						○	
〃	〃 (〃 2)	スダジイ	1.700	0.800	0.130	1	○	オガ			○		
〃	〃 (〃 3)	〃	2.400	0.750	0.115	1	○	〃			○		
〃	〃 (〃 4)	ヒノキ	2.600	1.800	0.130	1	○	チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 5)	〃	2.600	1.950	0.130	1	○	〃			○		
〃	〃 (〃 6)	〃	2.600	1.870	0.135	1	○	〃			○		

名称	位置	樹種	寸法(尺)			数量	区分		仕上げ	再用		取替	新規補足	備考
			長さ	幅	厚・成		当初	後補		修理無	〃有			
縁板	北面(東から7)	ヒノキ	2.600	1.920	0.130	1	○		チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 8)	〃	2.600	1.920	0.135	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 9)	スギ	2.300	1.180	0.135	1	○		カシナ			○		
〃	〃 (〃 10)	—	—	—	—	欠						○		
〃	南面(東側)	—	—	—	—	欠						○		
〃	〃 (中央)	ベイマツ	2.600	0.760	0.115	12		○	カシナ			○		
〃	〃 (西から1)	ヒノキ	0.565	0.565	0.130	1	○		チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 2)	〃	1.400	0.800	0.125	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 3)	スギ	2.200	0.790	0.130	1	○		〃			○		
〃	東面(南から1)	—	—	—	—	欠						○		
〃	〃 (〃 2)	スギ	1.800	1.130	0.130	1	○		チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 3)	〃	2.600	1.100	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 4)	シイ	2.600	0.990	0.130	1	○		オガ			○		
〃	〃 (〃 5)	〃	2.600	0.900	0.120	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 6)	〃	2.600	1.010	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 7)	〃	2.600	1.020	0.135	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 8)	〃	2.600	1.040	0.120	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 9)	〃	2.600	1.000	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 10)	スギ	2.000	1.000	0.135	1	○		カシナ			○		
〃	西面(南から1)	スギ	1.500	0.975	0.135	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 2)	〃	2.600	1.190	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 3)	〃	2.600	1.035	0.135	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 4)	〃	2.600	1.040	0.135	1	○		チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 5)	〃	2.600	1.130	0.135	1	○		カシナ			○		
〃	〃 (〃 6)	〃	2.600	1.110	0.135	1	○		チヨウナ			○		
〃	〃 (〃 7)	〃	2.600	0.945	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 8)	〃	2.600	1.150	0.130	1	○		〃			○		
〃	〃 (〃 9)	〃	1.700	1.160	0.130	1	○		カシナ			○		
高欄 地覆	上い上ー～又は上ー	ヒノキ	14.100	0.225	0.220	1	○		カシナ		○			
〃	上い上ー～	—	—	—	—	欠						○		

〃	上いー～又三	〃	8.140	0.225	0.220	1	○		カヅナ			○		
〃	又ほ上ー～	〃	2.385	0.225	0.225	1	○		〃			○		
〃	又ほー～又三	〃	8.135	0.220	0.220	1	○		〃			○		
〃	上い又三～い又三	〃	2.415	0.225	0.225	1	○		〃			○		
〃	ほ又三～又ほ又三	〃	2.415	0.220	0.220	1	○		〃			○		
平桁	上い上ー～又ほ上ー	ヒノキ	13.240	0.210	0.125	1	○		カヅナ			○		
〃	上い上ー～	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	上いー～又三	〃	8.180	0.220	0.125	1	○		カヅナ			○		
〃	又ほ上ー～	〃	1.985	0.220	0.130	1	○		〃			○		
〃	又ほー～又三	〃	7.700	0.225	0.125	1	○		〃			○		
〃	上い又三～い又三	〃	1.995	0.220	0.130	1	○		〃			○		
〃	ほ又三～又ほ又三	〃	2.415	0.220	0.220	1	○		〃			○		
架木	上い上ー～又ほ上ー	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	上い上ー～	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	上いー～又三	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	又ほ上ー～	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	又ほー～又三	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	上い又三～い又三	ー	ー	ー	ー	欠							○	
〃	ほ又三～又ほ又三	ー	ー	ー	ー	欠							○	
桷束		ヒノキ	0.640	0.190	0.190	13	○		カヅナ			○	○	
込桷		ヒノキ	0.230	0.190	0.190	9	○		〃			○	○	○
脇障子 柱	東(上いー)	ー	ー	ー	ー	欠								○
〃	西(又ほー)	ケヤキ	4.930	0.385	0.385	1	○		カヅナ			○		
笠木	東	ー	ー	ー	ー	欠								○
〃	西	ヒノキ	1.885	0.430	0.235	1	○		カヅナ			○		
無目敷居	東	ー	ー	ー	ー	欠								○
〃	西	スギ	1.665	0.215	0.215	1	○		カヅナ			○		
鏡板彫刻	東	ヒノキ	3.180	1.230	0.150	1	○					○		
〃	西	〃	3.180	1.230	0.150	1	○					○		

表3 組物斗寸法実測値

身舎柱上（平）

ろ三

	1	2	3	4	5	6	7
a	0.365	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.075	0.070	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075
c	0.200				0.200	0.200	0.200
c'		0.095	0.095	0.095			
d	0.075				0.075	0.070	0.075
e	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085
f	0.045	0.045	0.045	0.050	0.050	0.045	0.050
g	0.080	0.080	0.080	0.075	0.080	0.085	0.080
h	0.215	0.215	0.210	0.215	0.215	0.210	0.215
i	0.215				0.210	不	0.210
i'		0.100	0.105	0.105			
j	0.200		0.200				

い二

	1	2	3	4	5	6	7
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.070	0.075	0.075	0.070	0.070	0.075	0.070
c	0.200				0.200	0.200	0.200
c'		0.095	0.095	0.095			
d	0.070				0.070	0.075	0.075
e	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085	0.085	0.080
f	0.040	0.050	0.050	0.050	0.050	0.045	0.050
g	0.085	0.085	0.080	0.075	0.080	0.080	0.080
h	0.210	0.215	0.215	0.210	0.215	0.210	0.215
i	0.210				0.205	0.205	0.210
i'		0.105	0.105	0.100			
j	0.200		0.200				

に三

	1	2	3	4	5	6	7
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.355	0.360
b	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.065	0.075
c	0.200				0.200	0.205	0.200
c'		0.095	0.095	0.095			
d	0.075				0.075	0.070	0.075
e	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085
f	0.050	0.050	0.050	0.045	0.050	0.050	0.050
g	0.080	0.075	0.080	0.080	0.080	0.075	0.075
h	0.210	0.210	0.215	0.215	0.210	0.215	0.215
i	0.210				0.210	不	0.210
i'		0.105	0.105	0.100			
j	0.200		0.200				

は一

	1	2	3	4	5	6	7
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.075	0.070	0.075	0.070	0.075	0.075	0.075
c	0.200				0.200	0.200	0.200
c'		0.095	0.090	0.095			
d	0.070				0.070	0.070	0.075
e	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085
f	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.045	0.045
g	0.075	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080
h	0.210	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.210
i	0.210				0.210	0.210	0.210
i'		0.100	0.105	0.105			
j	0.200		0.200				

ほ二

	1	2	3	4	5	6	7
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.355
b	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075
c	0.200				0.200	0.200	0.200
c'		0.095	0.095	0.095			
d	0.070				0.070	0.070	0.070
e	0.085	0.080	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085
f	0.050	0.050	0.045	0.050	0.050	0.050	0.045
g	0.080	0.075	0.080	0.080	0.075	0.080	0.080
h	0.215	0.210	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215
i	0.205				0.210	0.210	0.210
i'		0.095	0.105	0.095			
j	0.200		0.200				

身舎柱上（隅）

いー

	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.075	0.075	0.065	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.070	0.070	0.070	0.070
c	0.205	0.200	0.205	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200
d	0.070	0.070	0.065	0.070	0.075	0.070	0.070	0.070	0.070	0.075	0.075	0.070
e	0.085	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085	0.080	0.085	0.080	0.085
f	0.045	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.050
g	0.085	0.080	0.080	0.080	0.075	0.080	0.080	0.085	0.080	0.080	0.080	0.080
h	0.210	0.210	0.215	0.215	0.220	0.210	0.215	0.210	0.210	0.215	0.215	0.215
i	0.205	0.205	0.200	0.210	0.210	0.200	0.205	0.200	0.205	0.205	0.205	0.210
j	0.205		0.200	0.200						0.200		

い三

	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.070	0.070	0.070	0.075	0.070	0.070	0.070	0.070	0.065	0.070	—	0.070
c	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.195	0.200	0.200	0.200
d	0.070	0.070	0.070	0.075	0.070	0.070	0.070	0.070	0.075	0.065	0.070	0.070
e	0.085	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085
f	0.045	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050
g	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080	0.080
h	0.205	0.215	0.215	0.210	0.215	0.215	0.215	0.215	0.210	0.215	0.210	0.215
i	0.205	0.210	0.205	0.200	0.210	0.205	0.210	0.210	0.210	0.210	不	0.210
j	0.200		0.200	0.200						0.200		

ほ一

	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
a	0.355	0.360	0.370	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.080	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075	0.070	0.075	0.070	0.070
c	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.205
d	0.080	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075	0.070	0.075	不	0.075
e	0.085	0.085	0.085	0.085	0.080	0.080	0.080	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085
f	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050	0.045	0.050
g	0.085	0.080	0.080	0.080	0.080	0.075	0.080	0.080	0.080	0.075	0.085	0.080
h	0.210	0.215	0.215	0.215	0.210	0.210	0.210	0.215	0.210	0.210	0.215	0.215
i	0.210	0.210	0.205	0.200	0.205	0.205	不	0.210	0.200	0.210	不	0.210
j	0.200		0.200	0.200						0.200		

ほ三

	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
a	0.360	0.360	0.360	0.355	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075
c	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200
d	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075
e	0.080	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085	0.080	0.085	0.085	0.085	0.080	0.085
f	0.050	0.050	0.045	0.045	0.050	0.045	0.050	0.050	0.050	0.050	0.050	0.045
g	0.080	0.080	0.080	0.080	0.075	0.080	0.080	0.080	0.080	0.070	0.080	0.080
h	0.210	0.215	0.210	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.210	0.210
i	0.210	0.210	0.210	0.205	0.210	0.205	0.210	0.210	0.210	0.210	不	0.205
j	0.200		0.200	0.200						0.200		

向拝柱上

ほ四

	1	2	3	4	5	6
a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.070	0.075	0.070	0.075	0.075	0.075
c	0.200	0.200	0.195	0.195	0.200	0.200
d	0.075	0.070	0.075	0.070	0.075	0.075
e	0.085	0.085	0.085	0.095	0.085	0.090
f	0.040	0.040	0.040	0.040	0.045	0.040
g	0.090	0.085	0.090	0.090	0.085	0.090
h	0.210	0.210	0.215	0.210	0.215	0.215
i	0.205	0.215	0.200	0.205	0.215	0.205
j					0.200	

い四

	1	2	3	4	5	6
a	0.365	0.360	0.360	0.355	0.360	0.360
b	0.075	0.070	0.070	0.070	0.070	0.075
c	0.210	0.210	0.200	0.200	0.200	0.200
d	0.070	0.075	0.070	0.070	0.075	0.075
e	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085
f	0.040	0.040	0.045	0.045	0.050	0.045
g	0.090	0.090	0.085	0.085	0.075	0.080
h	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210
i	0.200	0.200	0.200	0.200	0.210	0.210
j					0.200	

向拝中央

は四

	1	2	3	4	5
a	0.320	0.325	0.320	0.325	0.325
b	0.055	0.060	0.060	0.060	0.060
c	0.200	0.200	0.200	0.200	0.195
d	0.055	0.060	0.055	0.060	0.055
e	0.075	0.080	0.075	0.075	0.075
f	0.030	0.030	0.030	0.035	0.035
g	0.070	0.075	0.070	0.065	0.065
h	0.210	0.210	0.210	0.215	0.215
i	0.200	0.200	0.200	0.205	0.205
j				0.200	

鬼斗 身舎柱上（隅）

2	い一	い三	ほ一	ほ三
a	0.090	0.100	0.095	0.100
b	0.200	0.200	0.200	0.200
c	0.100	0.090	0.100	0.100
d	0.090	0.095	0.095	0.090
e	0.200	0.200	0.200	0.200
f	0.090	0.090	0.095	0.095
g	0.085	0.085	0.090	0.085
h	0.075	0.075	0.080	0.075
i	0.055	0.055	0.050	0.055
j	0.080	0.080	0.080	0.080
k	0.205	0.200	0.210	0.205
l	0.060	0.055	0.060	0.055

大斗

	い一	い二	い三	ろ三	は一	に三	ほ一	ほ二	ほ三	い四	は四	ほ四
a	0.195	0.195	0.195	0.195	0.200	0.200	0.195	0.190	0.195	0.195	0.175	0.195
b	0.200	0.200	0.200	0.200	0.195	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200
c	0.190	0.200	0.190	0.195	0.195	0.195	0.195	0.190	0.195	0.200	0.175	0.175
d	0.170	0.150	0.170	0.150	0.150	0.150	0.170	0.150	0.170	0.170	0.160	0.160
e	0.200		0.200				0.200		0.200	0.200	0.200	0.200
e'		0.100		0.100	0.100	0.100		0.100				
f	0.170		0.170				0.165		0.170	0.165	0.160	0.165
g	0.140	0.145	0.135	0.140	0.140	0.140	0.135	0.145	0.140	0.130	0.120	0.130
h	0.080	0.065	0.070	0.070	0.075	0.070	0.075	0.080	0.070	0.070	0.055	0.070
i	0.135	0.150	0.140	0.140	0.135	0.150	0.140	0.140	0.140	0.150	0.125	0.145
j	0.365	0.360	0.365	0.365	0.365	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.345	0.360
k	0.360		0.355				0.360		0.360	0.360	0.330	0.360
k'		0.175		0.175	0.175	0.175		0.175				

表 4 腰組斗寸法実測値

いー (東面)		1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
	a	欠	欠	欠	0.360	0.365	0.360	0.360	0.360	0.360	欠
	b	欠	欠	欠	0.070	0.075	0.065	0.075	0.070	0.070	欠
	c	欠	欠	欠	0.200	0.200	0.205	0.195	0.200	0.200	欠
	d	欠	欠	欠	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	欠
	e	欠	欠	欠	0.130	0.115	0.130	0.125	0.130	0.130	欠
	f	欠	欠	欠	0.085	0.080	0.085	0.090	0.090	0.090	欠
	g	欠	欠	欠	0.130	0.125	0.130	0.135	0.135	0.135	欠
	h	欠	欠	欠	0.210	0.205	0.205	不	0.210	0.210	欠
	i	欠	欠	欠	0.205	0.200	0.200	不	0.200	0.195	欠
	j										欠

いー (背面)		1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
	a	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360	0.365	0.365	0.360	0.365	0.360
	b	0.075	0.080	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070
	c	0.200	0.195	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200	0.200
	d	0.070	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.080
	e	0.130	0.130	0.130	0.130	0.105	0.135	0.135	0.130	0.135	0.130
	f	0.095	0.090	0.090	0.090	0.085	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090
	g	0.140	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135
	h	0.205	0.210	0.210	0.210	0.215	0.210	0.210	0.210	0.210	0.205
	i	0.200	0.200	0.205	0.205	0.210	0.205	0.205	0.210	0.205	0.200
	j										不

い二		1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
	a	欠	欠	0.360	0.360	0.360	0.360	0.365	0.365	0.360	欠
	b	欠	欠	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.080	0.075	欠
	c	欠	欠	0.200	0.195	0.195	0.200	0.200	0.195	0.200	欠
	d	欠	欠	0.070	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	欠
	e	欠	欠	0.130	0.115	0.135	0.130	0.130	0.105	0.125	欠
	f	欠	欠	0.080	0.085	0.090	0.085	0.090	0.090	0.090	欠
	g	欠	欠	0.125	0.135	0.135	0.130	0.135	0.135	0.135	欠
	h	欠	欠	0.210	0.215	0.210	0.215	0.210	0.210	0.210	欠
	i	欠	欠	0.200	0.205	0.205	0.205	0.200	0.205	0.200	欠
	j										欠

い三		1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
	a	欠	欠	欠	0.360	0.365	0.365	欠	0.365	欠	欠
	b	欠	欠	欠	0.070	0.075	0.075	欠	0.070	欠	欠
	c	欠	欠	欠	0.200	0.205	0.200	欠	0.205	欠	欠
	d	欠	欠	欠	0.075	0.070	0.070	欠	0.070	欠	欠
	e	欠	欠	欠	0.130	0.125	0.125	欠	0.130	欠	欠
	f	欠	欠	欠	0.090	0.080	0.070	欠	0.090	欠	欠
	g	欠	欠	欠	0.135	0.120	0.115	欠	0.135	欠	欠
	h	欠	欠	欠	0.210	0.205	0.200	欠	0.210	欠	欠
	i	欠	欠	欠	0.200	0.200	0.200	欠	0.205	欠	欠
	j										欠

は一

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
a	0.360	0.365	0.360	0.365	0.365	0.365	0.370	0.365	0.360	0.360
b	0.070	0.075	0.080	0.075	0.075	0.075	0.075	0.080	0.080	0.070
c	0.205	0.200	0.195	0.205	0.200	0.200	0.200	0.195	0.200	0.200
d	0.070	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.080
e	0.130	0.120	0.120	0.130	0.115	0.130	0.120	0.110	0.130	0.130
f	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.095	0.090
g	0.135	0.140	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135
h	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.215	0.215	0.210	0.215	0.210
i	0.200	0.205	0.200	0.200	0.205	0.200	0.205	0.205	0.205	0.205
j										0.195

は一
(西面)

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
a	欠	欠	欠	0.365	0.365	欠	0.360	0.355	0.360	0.360
b	欠	欠	欠	0.075	0.075	欠	0.075	0.075	0.080	0.075
c	欠	欠	欠	0.205	不	欠	0.195	0.200	0.195	0.200
d	欠	欠	欠	0.075	不	欠	0.075	0.070	0.080	0.075
e	欠	欠	欠	0.130	0.130	欠	0.130	0.125	0.130	0.130
f	欠	欠	欠	0.085	0.090	欠	0.085	0.090	0.085	0.090
g	欠	欠	欠	0.130	0.135	欠	0.130	0.140	0.130	0.135
h	欠	欠	欠	0.210	0.210	欠	0.210	不	0.210	0.210
i	欠	欠	欠	0.205	0.200	欠	0.200	不	0.200	0.200
j										不

は一
(背面)

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
a	0.360	0.360	0.360	0.365	0.365	0.365	0.365	0.360	欠	0.365
b	0.075	0.075	0.080	0.080	0.075	0.075	0.080	0.075	欠	0.070
c	0.205	0.200	0.200	0.195	0.200	0.200	0.200	0.200	欠	0.200
d	0.070	0.075	0.075	0.075	0.080	0.075	0.075	0.075	欠	0.075
e	0.135	0.130	0.130	0.120	0.135	0.125	0.135	0.120	欠	0.135
f	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.085	0.070	欠	0.085
g	0.135	0.135	0.130	0.140	0.135	0.135	0.135	0.115	欠	0.130
h	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.215	0.205	欠	0.210
i	0.200	0.200	0.200	0.205	0.210	0.200	0.210	0.205	欠	0.200
j										不

は二

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
a	0.365	欠	0.365	0.365	0.365	0.360	0.360	0.360	0.360	0.360
b	0.070	欠	0.075	0.075	0.075	0.080	0.075	0.075	0.075	不
c	0.200	欠	0.195	0.200	0.200	0.200	0.195	0.200	0.200	不
d	0.070	欠	0.075	0.075	0.070	0.075	0.080	0.070	0.075	0.070
e	0.130	欠	0.130	0.130	0.140	0.135	0.130	0.140	0.125	0.125
f	0.080	欠	0.080	0.090	0.090	0.090	0.090	0.080	0.090	0.090
g	0.125	欠	0.125	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135
h	0.210	欠	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.210	0.215	0.210
i	0.200	欠	0.205	0.200	0.205	0.200	0.200	0.205	0.200	0.205
j										0.195

ほ三

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3	4-4
a	0.370	0.360	0.360	0.360	0.360	0.355	欠	0.360	0.355	欠
b	0.080	0.075	0.075	0.080	0.080	0.075	欠	0.075	0.070	欠
c	0.190	0.200	0.200	0.200	0.195	0.200	欠	0.200	0.200	欠
d	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	欠	0.075	0.075	欠
e	0.130	0.135	0.135	0.130	0.140	0.135	欠	0.135	0.140	欠
f	0.085	0.090	0.090	0.085	0.080	0.090	欠	0.080	0.075	欠
g	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	欠	0.130	0.125	欠
h	0.210	0.210	0.210	0.215	0.215	0.210	欠	0.205	0.205	欠
i	0.200	0.205	0.205	0.205	0.205	0.200	欠	0.200	0.210	欠
j										欠

いー
(偶行)

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3
a	0.515	0.510	0.510	0.510	0.505	0.510	0.515	0.510	0.510
b	0.070	0.075	0.075	0.075	0.075	0.070	0.075	0.075	0.075
c	0.220	0.215	0.215	0.215	0.210	0.220	0.215	0.215	0.215
d	0.070	0.075	0.075	0.070	0.075	0.070	0.070	0.070	0.075
e	0.135	0.125	0.135	0.130	0.130	0.125	0.130	0.130	0.115
f	0.090	0.090	0.080	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090	0.090
g	0.135	0.135	0.130	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135	0.135
h	0.300	0.305	0.295	0.300	0.300	0.305	0.305	0.305	0.300
i	0.215	0.215	0.210	0.215	0.215	0.210	0.220	0.215	0.215

鬼斗	4-4
欠	

い三
(偶行)

	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3
a	0.510	0.510	0.510	0.510	0.510	0.510	0.510	0.510	0.510
b	0.075	0.075	0.070	0.075	0.075	0.070	0.075	0.075	0.075
c	0.210	0.215	0.215	0.215	0.215	0.215	0.210	0.215	0.210
d	0.075	0.075	0.070	0.070	0.080	0.075	0.075	0.075	0.075
e	0.120	0.130	0.130	0.135	0.125	0.130	0.135	0.130	0.125
f	0.085	0.085	0.085	0.085	0.085	0.090	0.090	0.090	0.090
g	0.135	0.130	0.135	0.130	0.135	0.135	0.135	0.130	0.135
h	0.300	0.305	0.300	0.305	0.305	0.300	0.300	0.300	0.300
i	0.210	0.220	0.210	0.220	0.215	0.220	0.220	0.220	0.220

鬼斗	4-4
欠	

ほ一
(偶行)

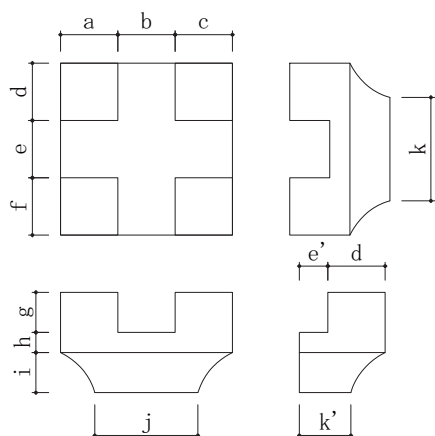
	1	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	4-3
a	0.510	0.510	0.510	0.510	0.515	0.510	0.510	0.510	0.515
b	0.075	0.075	0.075	0.075	0.075	0.080	0.075	0.080	0.075
c	0.220	0.220	0.215	0.215	0.215	0.215	0.210	0.215	0.215
d	0.070	0.075	0.075	0.080	0.075	0.075	0.080	0.075	0.080
e	0.130	0.125	0.130	0.135	0.135	0.135	0.140	0.130	0.135
f	0.090	0.085	0.085	0.090	0.090	0.085	0.080	0.085	0.085
g	0.135	0.130	0.135	0.135	0.135	0.135	0.130	0.130	0.135
h	0.300	0.305	0.305	0.300	0.305	0.300	0.305	0.300	0.300
i	0.215	0.215	0.215	0.215	0.220	0.220	0.220	0.220	0.215

鬼斗	4-4
a	0.105
b	0.200
c	0.110
d	0.105
e	0.200
f	0.105
g	0.085
h	0.045
i	0.085
j	0.130
k	0.230
l	0.060

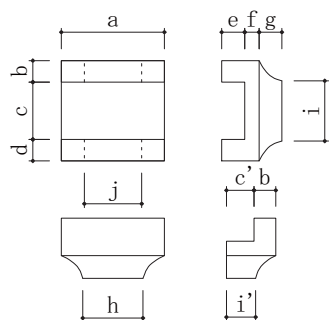
ほ三 全て欠失
(偶行)

組物・腰組 斗寸法実測値表 凡例

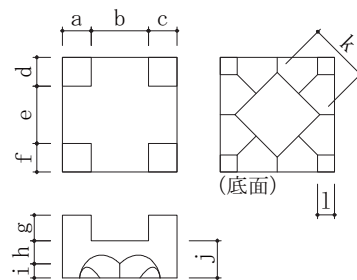
／ : 該当寸法なし
不 : 計測不可
欠 : 欠失部材



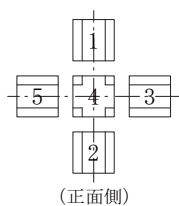
大斗



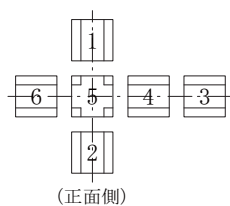
巻斗
(点線表示は方斗の場合)



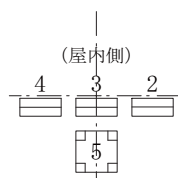
鬼斗



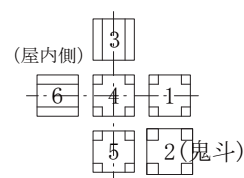
向栞中央



向栞柱上

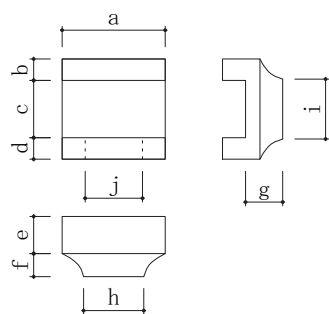


身舎柱上 (平)

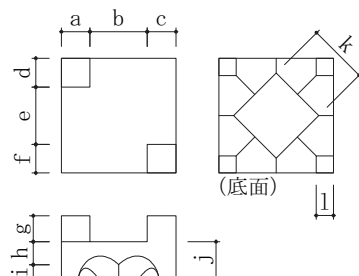


身舎柱上 (隅)

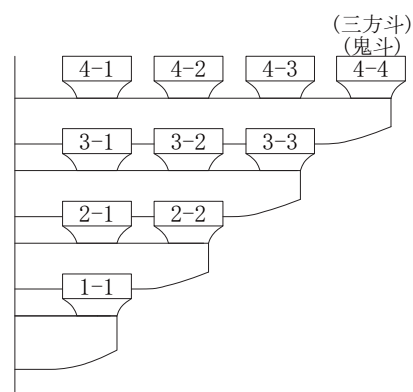
身舎・向栞 斗



巻斗
(点線表示は三方斗の場合)



鬼斗



腰組 斗

第四章 復原と現状変更

本殿は建立後約三百年を経ており、その間、機能面、保守管理面での対応から幾度かの改造をしている。また、構成部材の一部は既に欠失したものもある。それらの主なものは次の通りである。

- (一) 床組材および床板は後年に新材に取替えた。
 - (二) 木階および正面縁板は、後年に造り変えた。
 - (三) 正面両脇縁上は板戸から板壁に変えた。
 - (四) 脇障子は部材の一部が欠失していた。
 - (五) 廻り縁は外側の垂下を支えるため、簡易の束で支えられていた。
 - (六) 背面の軒廻り材はほとんどが落下し、屋根葺き材は全て欠失していた。
 - (七) 現幣殿は後設のもので、本殿と接続されていた。
- 以上について、可能な限り建立当初の姿に復原した。

(一) 床組および床板を当初材あるいは当初材に倣い復原した。

修理前の床組および床板は、後年に新材に取替えられていた。大引・根太・根太掛はベイツガ、床板はスギであり、いずれも洋釘で打ち止められていた。当初材の大引は床下に、根太と床板は他所に保管されていた。根太掛は欠失していた。当初大引はシイで、土の上に直に置いてあったためか、腐朽が進んでいた。当初根太はスギ、当初床板はマツであった。今回の修理の際には、後年に取り替えられた部材は再用せず、当初材を出来る限り再用した。当初大引は破損が著しいため新材で取替え、根太掛は新材で補足、根太と床板は破損の著しいものは取替えたが、他は補修して再用した。

(二) 木階および正面縁板を当初形状に復した。

修理前の木階は五級で踏面寸法三寸八分五厘、蹴上寸法四寸五分であった。

正面縁板はベイマツで幅七寸六分、厚さ一寸一分五厘の板が取付けられていた。今回の部材調査で、向拝柱に残る痕跡より、当初は蹴上寸法が三寸八分であったことがわかった。この痕跡より蹴上寸法、踏面寸法ともに三寸八分とし五級の木階を復原した。正面縁板は四周の縁板と寸法を合わせて復原した。

(三) 正面両脇縁上板壁を板戸に復した。

正面両脇縁上の正面から側面へと繋がる箇所は、修理前は板壁であったが、方立に肘壺が取り付けいていた痕跡があったことから片開き板戸に復した。当初の板戸の形式を知る資料は無いため、板戸の形式は建物の外観を損なわないものとし、今後の保守管理を考慮し、横猿の戸締り装置を付けた。

(四) 脇障子扉を復した。

修理前の脇障子は、部材が外れ一部が欠失していたため、当初の形式が不明であった。脇障子柱に肘壺が取り付けいていた痕跡があることから、片開き板戸が取付く形式に復した。また、今後の保守管理を考慮し、回転式の戸締り装置を付けた。

(五) 腰組・廻り縁を支えていた束を撤去した。

建物の廻り縁は、正面を除いて腰組によって支えられている。しかし、縁を構成する部材自体の荷重で外側が垂下したため、それを支えるために四隅に簡易的に束を建て、補強していた。今回の工事では、当初の形式に倣い束を取り外した。ただ、垂下を防ぐため、隅掎首の柄を床下内部まで伸ばして上から根太で押える構造にした。

(六) 棚葺き屋根を棚葺き型銅板葺きに改めた。

本建物は、軒廻りおよび屋根の破損が最も甚大であった。軒廻りは四周にわたり破損し、特に背面は垂木が欠落していた。屋根は全体にわたり葺材の欠損、摩耗が著しかった。屋根は、棚葺きに復原すべきところを、今後の保守管理を考慮し、棚葺き型銅板葺きとした。

(七) 幣殿と本殿の接続部の不具合を改善した。

修理前、幣殿は本殿に接続され拝殿と繋いでいた。この接続部が姑息的なもので雨漏りの原因ともなっていた。本殿への雨漏りの影響を考えれば、本殿を独立した社殿とし、幣殿との縁を切るべきだが、今後の保守管理および祭礼等の際の使い勝手を考慮し、修理前と同じく本殿と幣殿を接続した形式とした。ただし、屋根部分は直接接続しないようにし、雨仕舞を改善した。

第五章 工事の内容と実施仕様

一 修理方針

今回の工事は全解体修理工事とした。解体にあたっては詳細な調査を行い、建物の建立当初の姿を明らかにすると共に、その後の改造の経過を知ることとした。また、当初の形式、技法を明らかにした。組立てにあたっては、調査結果を検討し、今後の保護に資する施工を行った。当初材は、極力再用に努め、埋木・矧木等、あるいは合成樹脂等により補修した。補修不可能と判断したもののについては取替えた。施工は出来る限り、当初の形式・技法に倣った。

二 施工の内容

今回の工事では、破損状況を改善するため、土台石を除いて建物を全て解体し、破損部材の補修、補足を行った後組み立てた。その具体的内容は次の通りである。

- ① 部材保存小屋その他の仮設工作物の建設
- ② 本殿と幣殿の接続部の縁切り
- ③ 本殿の解体
- ④ 当初技法、破損原因の調査とそれに基づく実施仕様の作成
- ⑤ 実施仕様に基づく必要資材の購入
- ⑥ 土台石および礎石不陸調整、盛土
- ⑦ 軸部材、組物材、軒廻り材、小屋組材の補修と補足材の加工、組立て
- ⑧ 枡葺き型銅板葺き屋根の下地および銅板葺き施工

- ⑨ 造作材の補修と補足材の加工、取付け
 - ⑩ 鋳金物の補修および補足
 - ⑪ 仮設工作物の撤去および幣殿の復旧
- 工事実施にあたっては、事前に現状の実測調査と写真撮影を行った。工事中は、記録および写真撮影を行い、必要な資料を収集、整理した。
- 各工事の実施仕様は次の通りである。

(一) 仮設工事

(イ) 使用材料

本工事の仮設工作物は借入損料扱いとし、工事完了後は速やかに解体撤去搬出した。これに使用する材料は中古材の使用を可とした。

(ロ) 水盛遣方

水盛遣方は後記の材料を用い、所要の位置に設置した。

- ① 水杭 スギまたはベイツガ四・五cm以上、間隔一・八m以下、根入れ〇・四五m以上、杭頭をイスカに切り揃えた。

- ② 水貫 スギ一〇・五cm×二・〇cm以上、長さ三・〇m以上、上端を通直に削り水杭に釘打ちした。

(ハ) 軒足場

軒足場は作業の内容と安全に注意して計画した。使用材料は後記を標準とした。

- ① 杵組足場 鳥居型建杵 幅六一〇mm×高一七〇〇mm
 - ② 単管 STK五〇〇 外径四八・六mm×肉厚二・四mm
 - ③ 足場材 幅二四〇mm×長さ四〇〇〇または二〇〇〇mm
- 鋼製、合板足場板

- ④ 木材 スギまたはベイツガ一等材

- ⑤ 鉄線・釘 #一〇なまし鉄線、洋釘JIS規格品

(ニ) 保存小屋

解体材を格納する小屋は、良好な状態で保管できるように、湿気・火災・盗難等に対して十分な設備を有するものとした。

(ホ) 危害防止・養生

工事施工に際して、前記以外にも安全と衛生管理に

は関連法規による適切な対策を講じた。

(二) 解体工事

(イ) 準備 解体前、全部材に番付札を付し、適宜指導員の指導を受け必要な調査、実測、写真撮影等の作業を完了させた。

(ロ) 解体 準備完了後、建物を順序よく、丁寧に解体した。解体中も必要に応じて痕跡調査、写真撮影等の諸記録を作成した。

(ハ) 部材整理 解体した各部材は再用、繕い、取替等に区別し整理格納した。また、搬送に際し、各部材は充分養生した。

(三) 基礎工事

今回の工事では、建物解体後に発掘調査を行ったため、基礎の一部を掘り起こした。掘り起こした箇所は、土を埋め戻し突き固める作業を数回に分けて行った。土台石および礎石は不陸を生じていたため、モルタルを用いて据え付け直した。その後、盛土を行い、基礎全体を均した。

(四) 石工事

土台石および礎石は清掃した上で全て再用した。不陸を生じていた箇所はモルタルを用いて据え付け直した。

(五) 木工事

(イ) 再用材 再用材は取扱いに充分注意し、各部材の清掃後、適宜指導員の指導を受け組立てた。その内容、使用材料、工法は次の通りである。

① 虫害や腐朽菌による被害箇所の補強には、P S - N Y 6 (イソシアネート系プレポリマー) を注入または刷毛にて塗布した。

② 現状変更等による不要仕口類の埋木整形には、P S - N Y 6 による含浸強化、または、アラルダイト A W 1 0 6、硬化剤同 H Y 9 5 3 U を接着剤として同樹種材による埋木をした。

③ 再用材の防腐および防蟻には、キシラモントラッドを刷毛にて塗布した。

以上の作業において、当初材に残された計画寸法は、補修によってこれを損失させることのないよう充分注意した。

(ロ) 補足取替材

補足取替材の材種、寸法は出来る限り当初材のそれに倣った。補足取替材の乾燥程度は、極力含水率二〇%以下のものを使用することに努めた。加工形状寸法、継手仕口、表面仕上げの各工法は原則として当初のそれを踏襲し、施工は入念に行った。取替材には、見え隠れ位置に修理年号を焼印により烙印した。

(ハ) 諸金物

使用金物は原則として旧来のものを踏襲した。

(ニ) 加工および組立て

加工および組立てに際しては、建物の当初計画寸法を損失させることのないよう注意し、組立て後の構造的な補強は、適宜指導員の指導を受け適切に処理した。

(六) 屋根工事

(イ) 下地 防水層はアスファルトルーフィングを使用し、重ね幅は一〇〇mm以上とした。

(ロ) 銅板葺き

平葺きは、定尺寸法一・二m×〇・三六mの銅板を六ツ切にしたものを小鉤一五mm折り返し、釣子を野地板に止め、葺き上げた。鬼板は亀裂の生じないよう焼鈍し、木槌にて打ち込み曲線に倣い造り出して取付けた。

(七) 鍔金物工事

本建物には鍔金物として、釘隠し金物、正面両折戸八双金物が使用されていた。

釘隠し金物は、切目長押と内法長押に付けられていたが、ほとんどが欠失していた。よって今回の工事では、残っていた金物の形状・仕上げを踏襲し、銅製の金箔押し仕上げで、不足分を新規に製作した。再用金物は、清掃を行い、形状を整え金箔押し仕上げとした。

正面両折戸八双金物は全て再用し、清掃を行い、塗装し直した。

(ハ) 雑工事

(イ) 建具工事

正面両折戸は、建付けを調整した後、吊込んだ。

正面縁上両脇は修理前は板壁であったが、解体後の部材調査により、当初は板戸であったことが分かった。そこで、板戸に復し、肘壺を新規に製作し吊込んだ。

脇障子は一部の部材が欠失していたが、部材に残る痕跡から脇障子扉が吊込まれていたことが分かった。そこで、脇障子扉を復し、肘壺を新規に製作し吊込んだ。

(ロ) 防蟻剤散布

地表部分の防蟻土壌処理を行い、特に土台石廻りを入念に散布した。薬剤は、水溶性乳剤のものを使用し、じょうろを用いて土壌表面に均一に行き渡るように散布した。

(ハ) 修理銘板

銅板に工事概要を陰刻し、建物内部に銅鉋止めとした。

(ニ) 既存幣殿整備

本殿修理に伴い、本殿との取合い部を切断した幣殿は、破損部分を修理し、復旧した。



28b



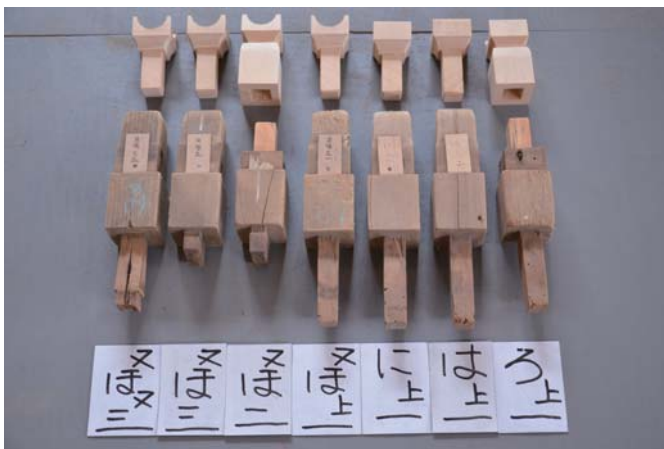
28a



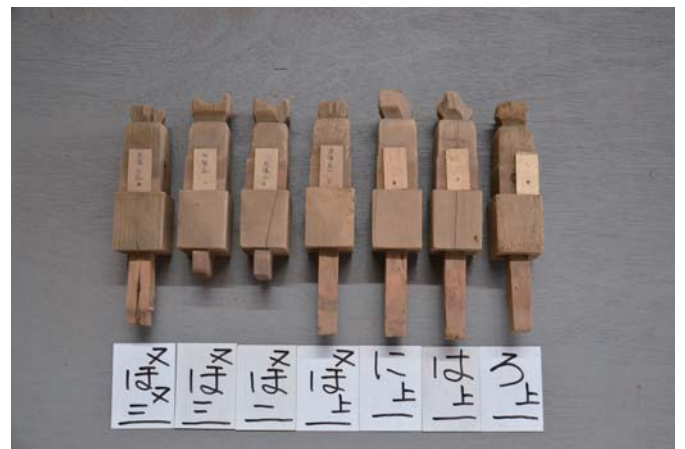
28d



28c



28f



28e

図 28 腐朽部材・破損部材の補修

- a 身舎柱根柢 補修前
- b 同上 補修後
- c 身舎柱 補修前
- d 同上 補修後
- e 高欄桷束 補修前
- f 同上 補修後
- g 破風板 補修後



28g



29b



29a



29d



29c



29f



29e



29g

図 29 基礎・軸部・組物 組立て

- a 土台石・礎石 不陸調整
- b 基礎 盛土
- c 土台据え付け 正面上より見た
- d 同上 正面西側より見た
- e 軸部 組立て
- f 組物 正面上より見た
- g 身舎および向拝組物、海老虹梁

図 30 軒廻り・小屋組 組立て

- a 正面東側より見た
- b 正面 地垂木取付け
- c 背面 同上
- d 正面 小屋組
- e 背面 同上
- f 正面 野垂木取付け
- g 背面 同上



30a



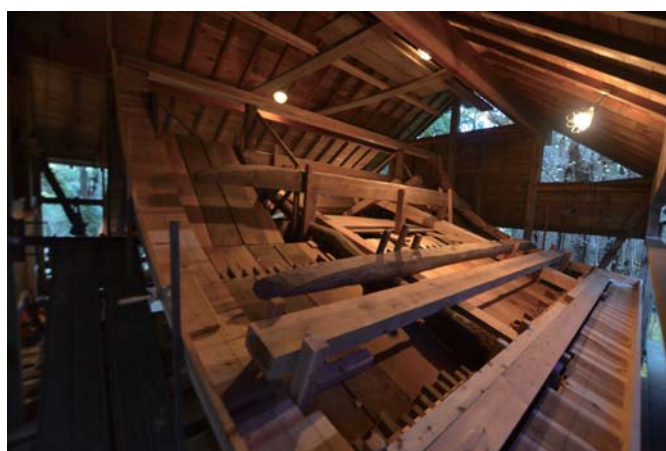
30c



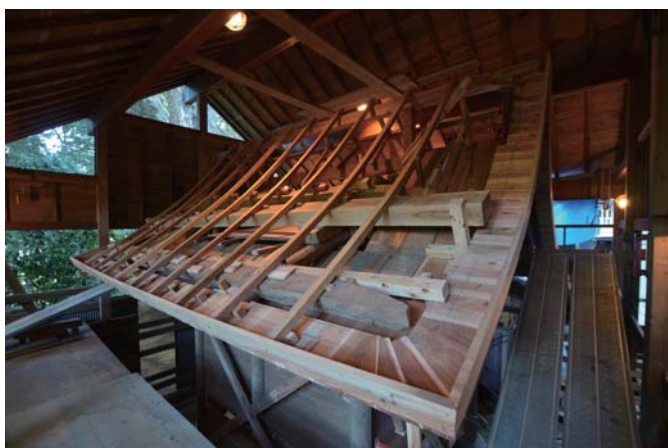
30b



30e



30d



30g



30f



31b



31a



31d



31c



31e

図 31 屋根下地・銅板葺き・縁廻り 組立て

- a 正面 屋根下地
- b 背面 同上
- c 正面 銅板葺き
- d 背面 同上
- e 箱棟 同上
- f 西面 廻り縁
- g 背面 同上



31g



31f



32b



32a



32d



32c



32f



32e

図 32 組立て詳細

- a 身舎柱と頭貫の取合い 大入れ落とし蟻、輪薙込み
- b 同上
- c 向拝柱 雇い柄
- d 向拝柱と水引虹梁の取合い 大入れ蟻掛け
- e 向拝組物と海老虹梁の取合い
- f 組物 通肘木
- g 海老虹梁と向拝丸桁の取合い
雇い柄に落とし込み、相欠き組



32g



図 33-1 水引虹梁

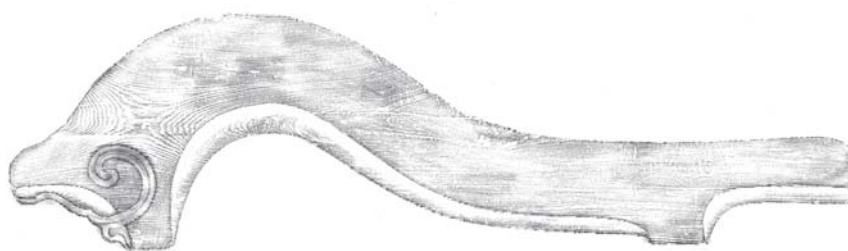


図 33-2 海老虹梁



図 33-3 二重虹梁

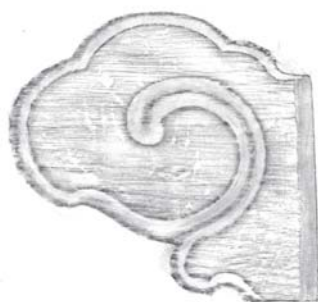


図 33-5 身舎柱頭拳鼻

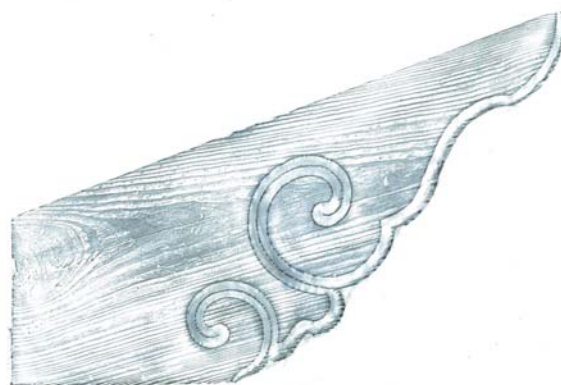


図 33-4 手挟み



図 33-6 身舎組物拳鼻

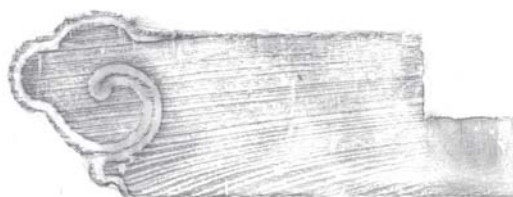


図 33-7 化粧母屋

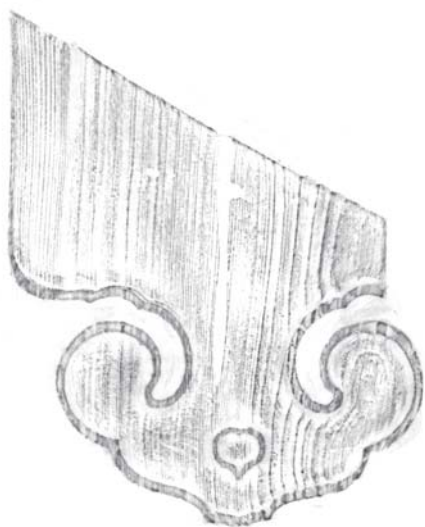


图 33-9 身舎桁隠し

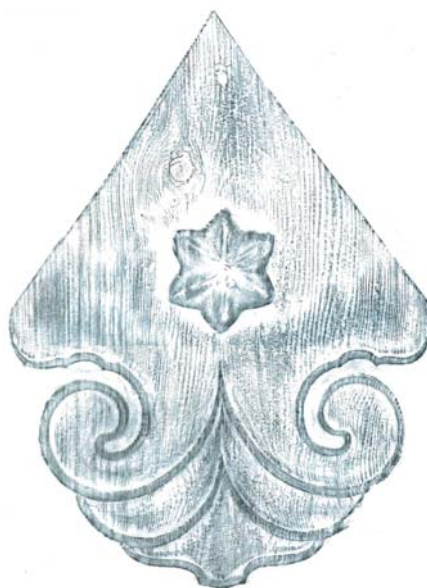


图 33-8 懸魚



图 33-10 向拝桁隠し



图 33-12 身舎隅柱上組物実肘木



图 33-13 身舎側面中央組物実肘木



图 33-14 向拝組物実肘木



图 33-15 妻大虹梁上組物実肘木



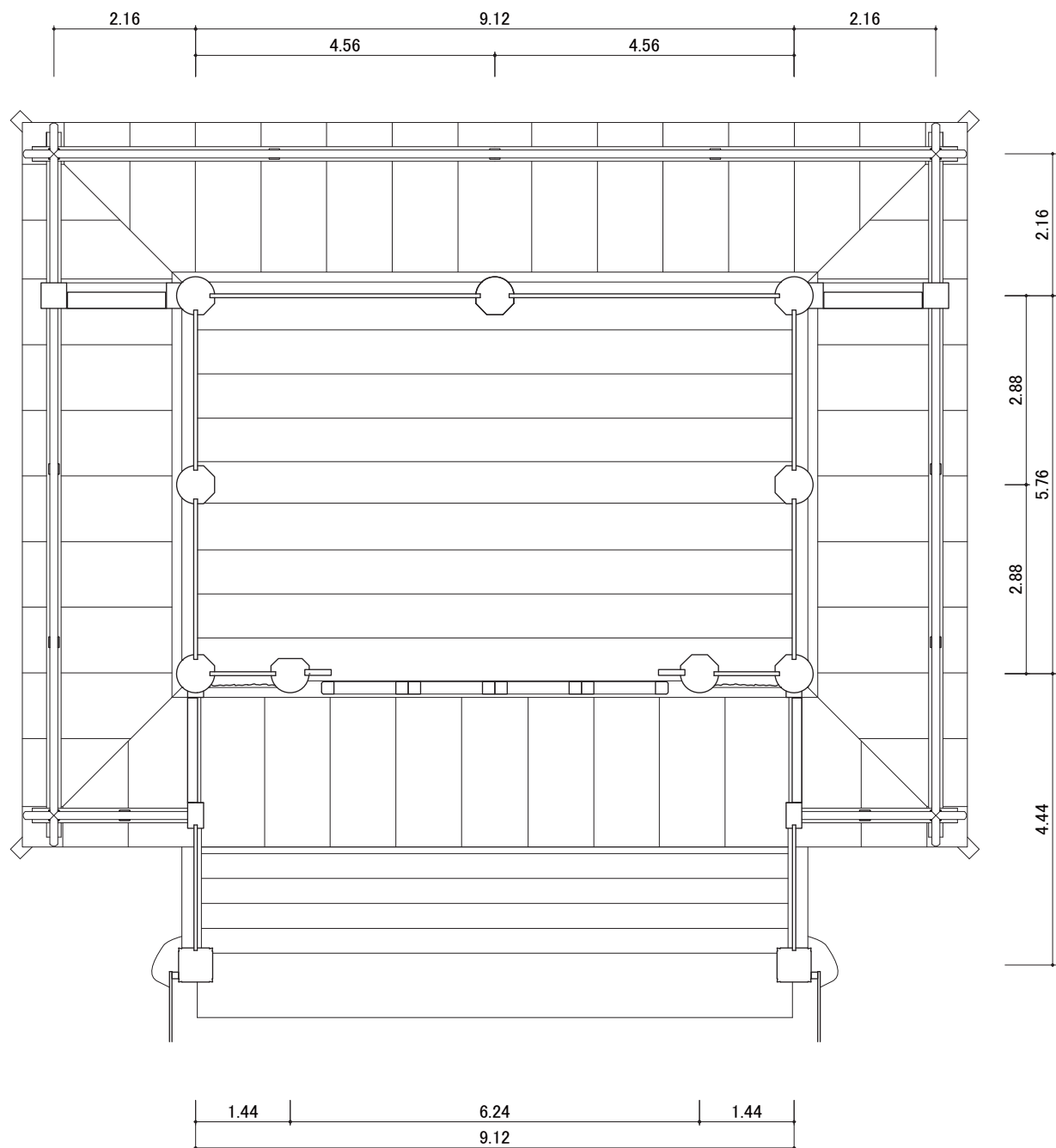
图 33-16 太瓶束組物実肘木



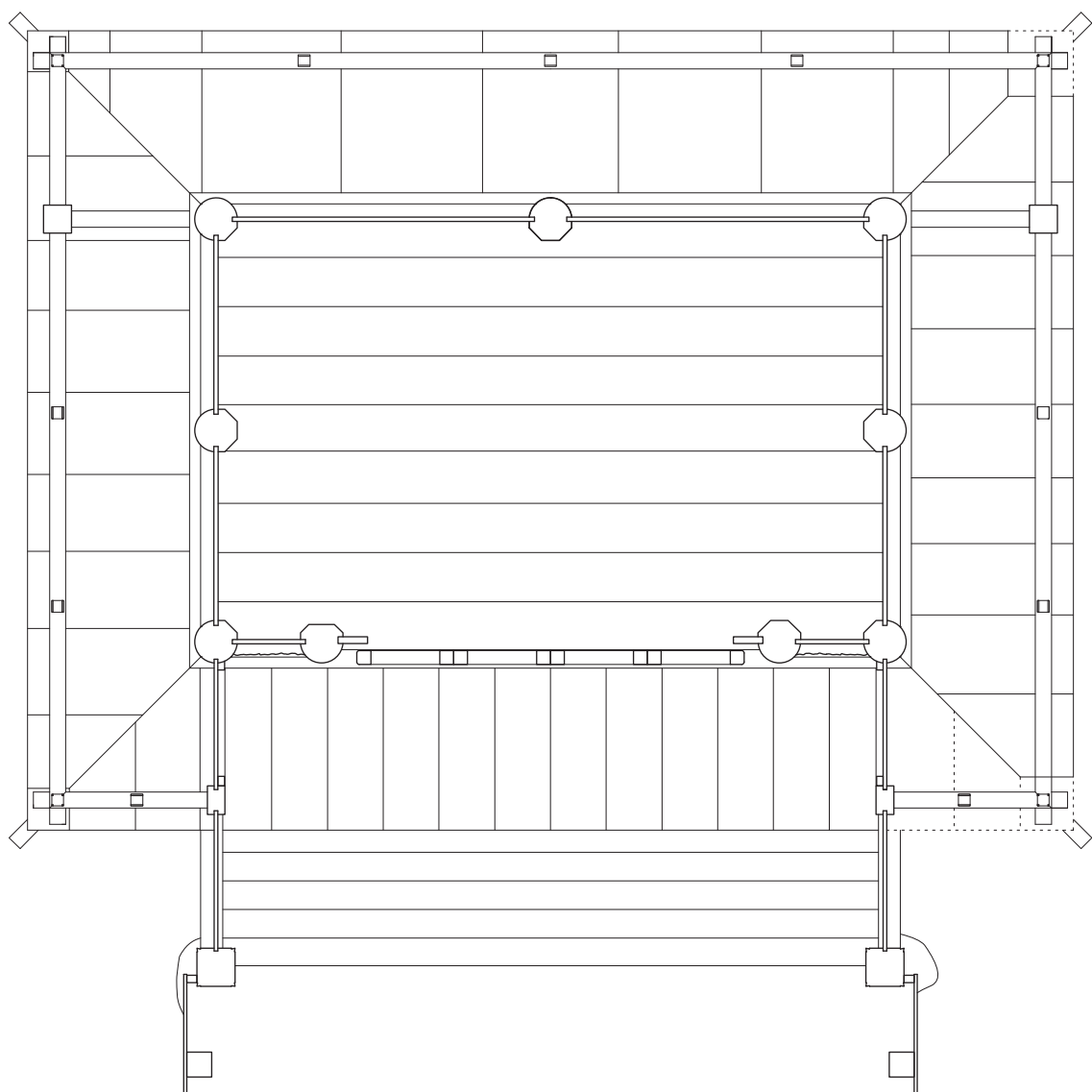
图 33-11 太瓶束笈形

竣工・修理前面

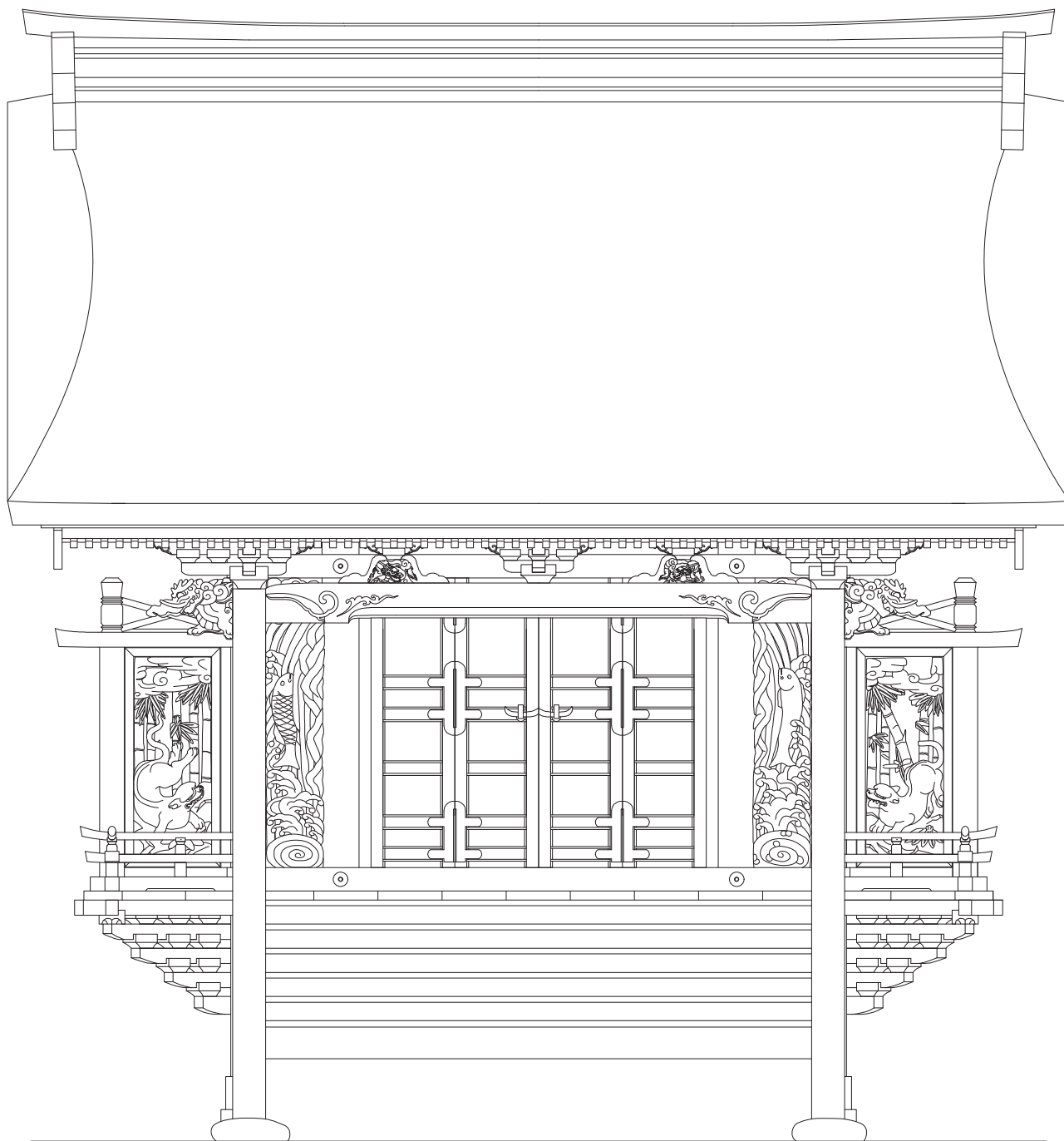
寸法単位は尺
縮尺 1—
30



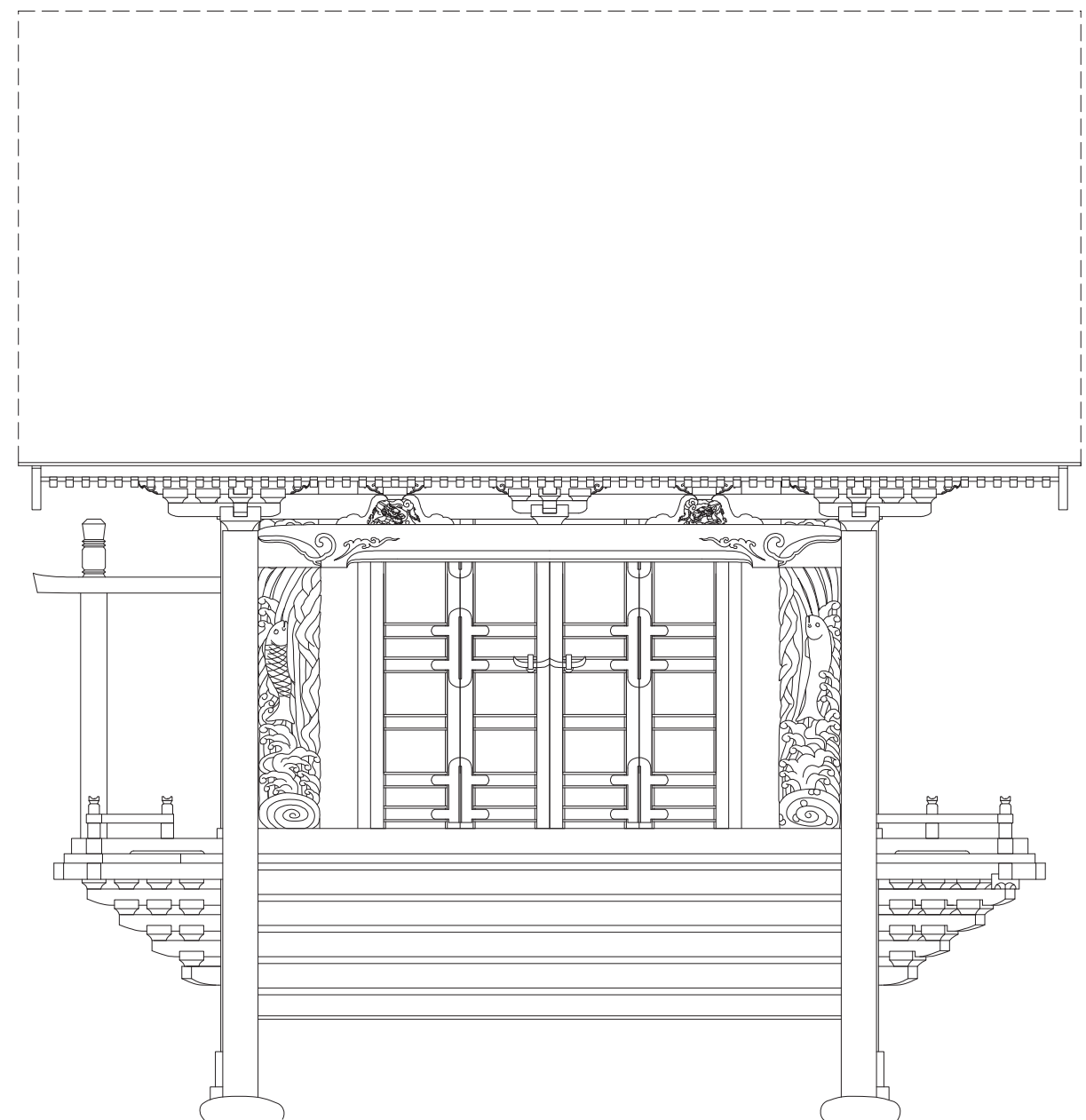
図面 1 竣工平面図



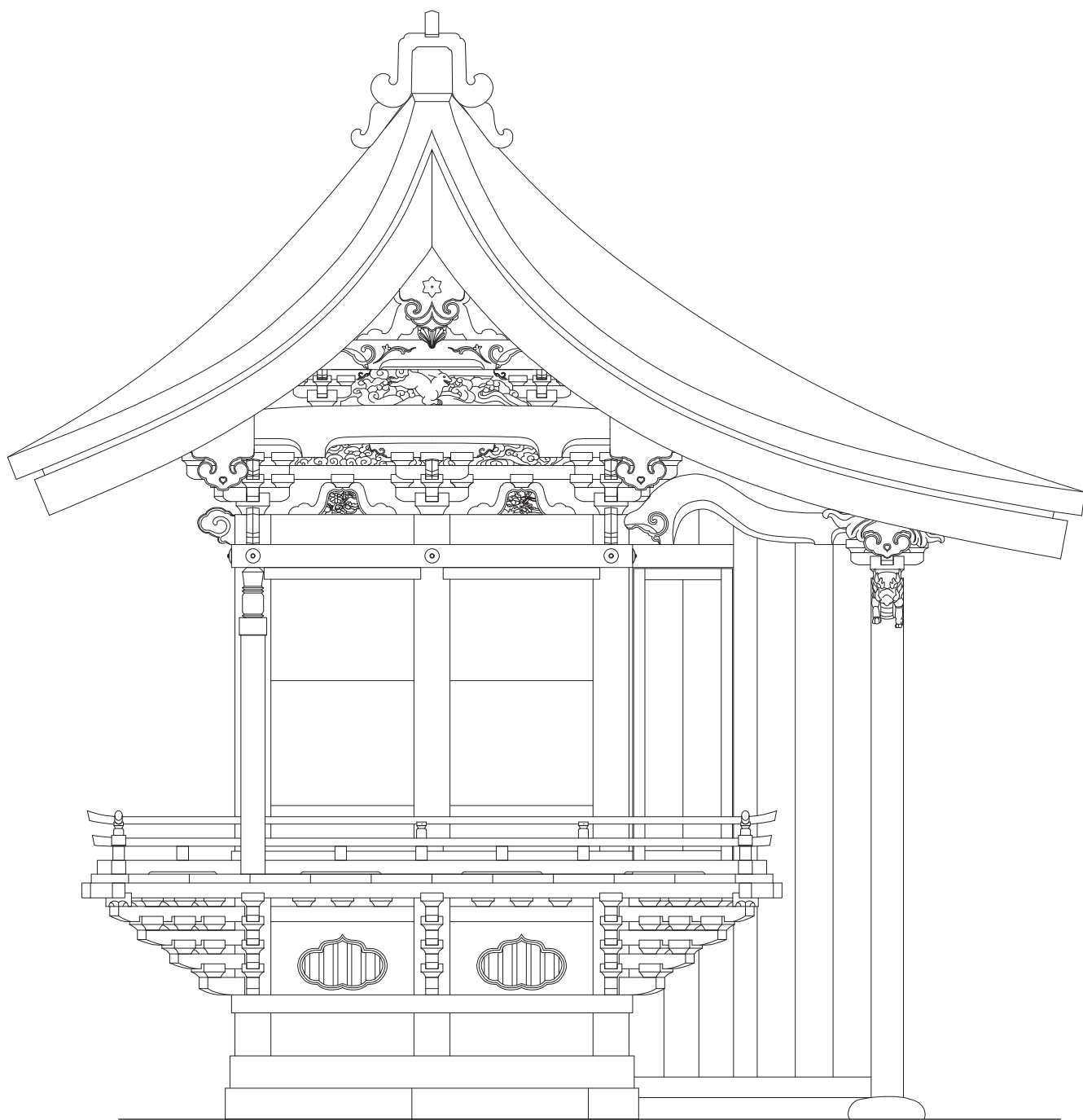
図面 2 修理前平面図



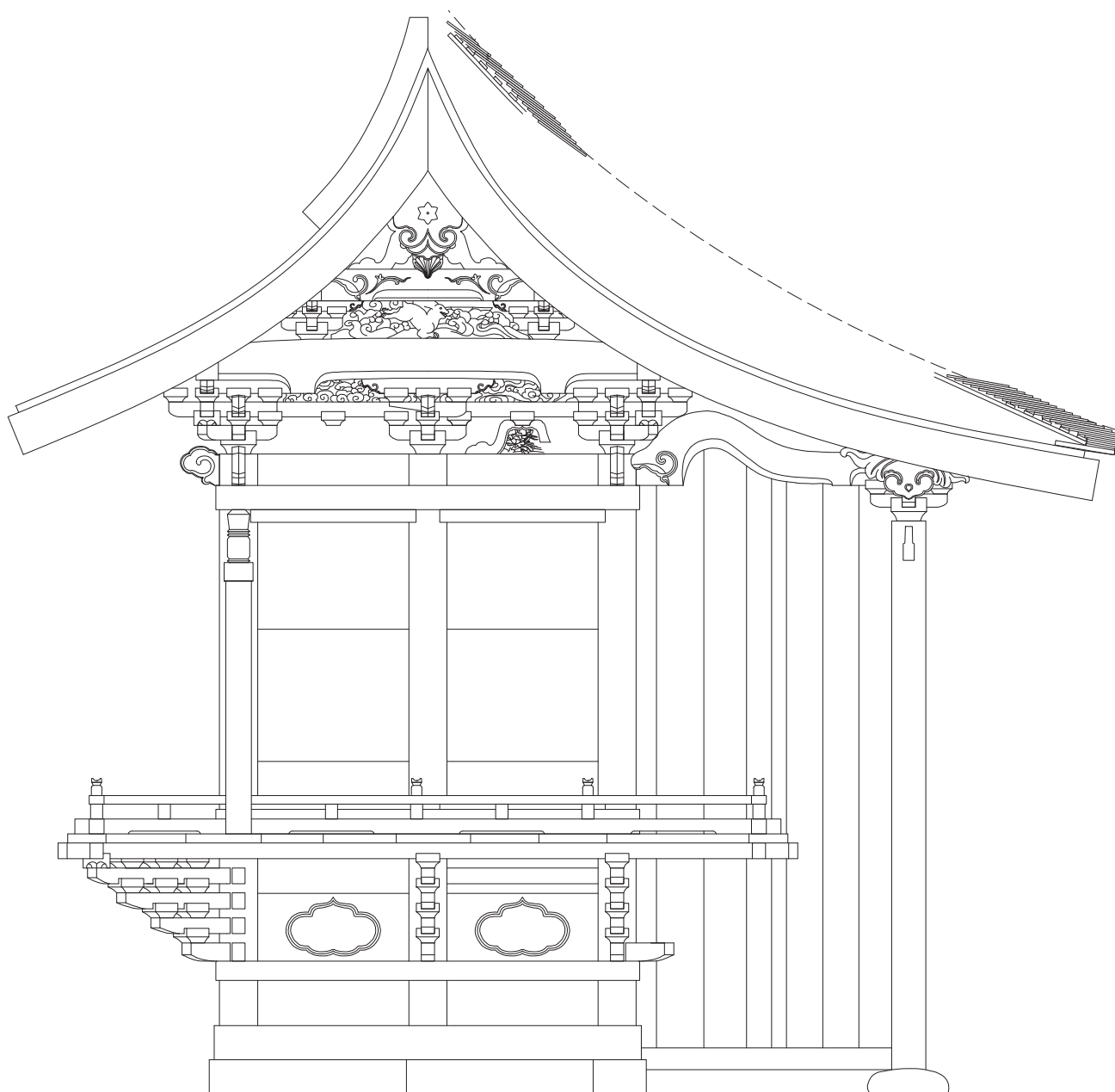
图面 3 竣工正面图



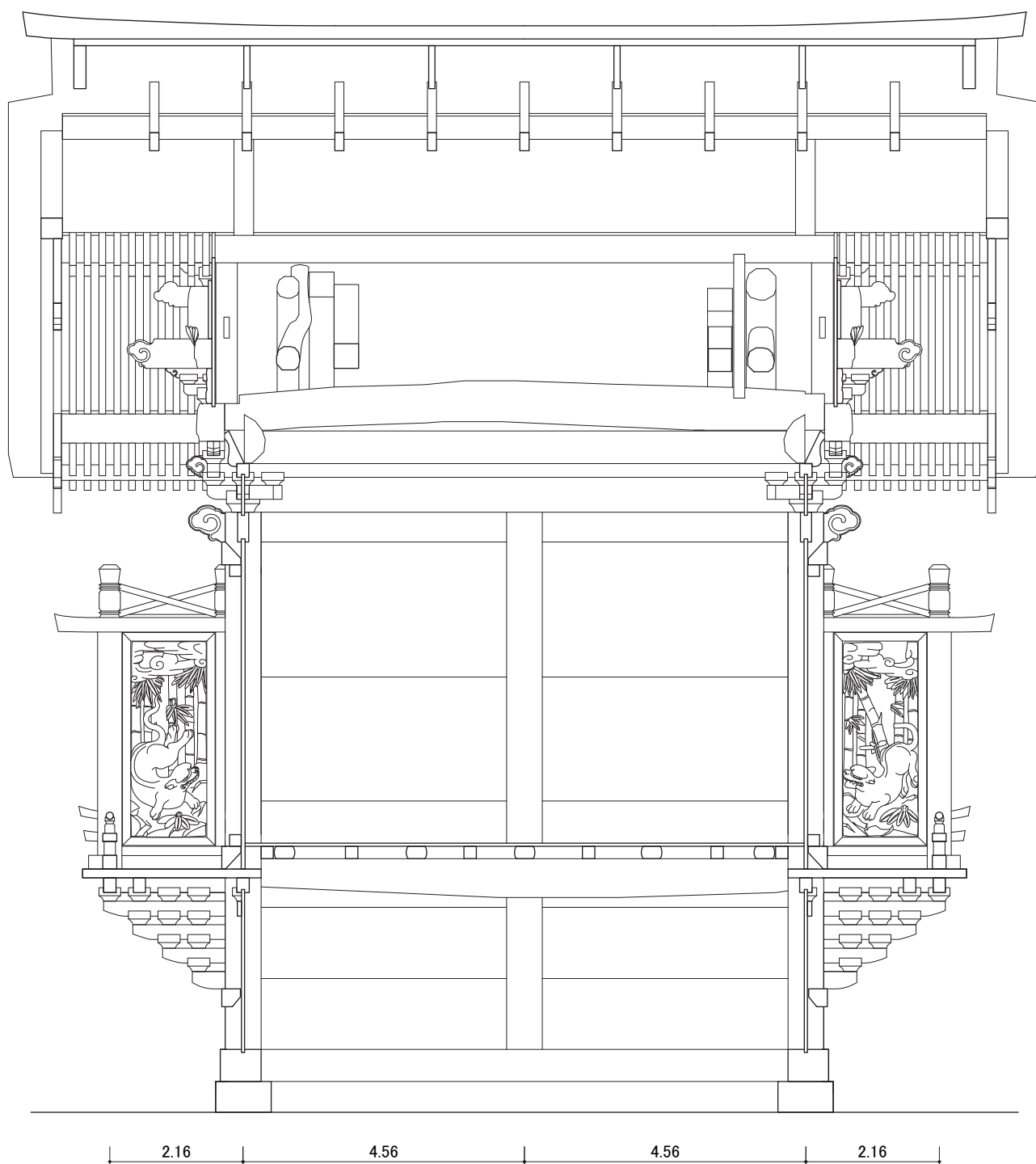
图面 4 修理前正面图



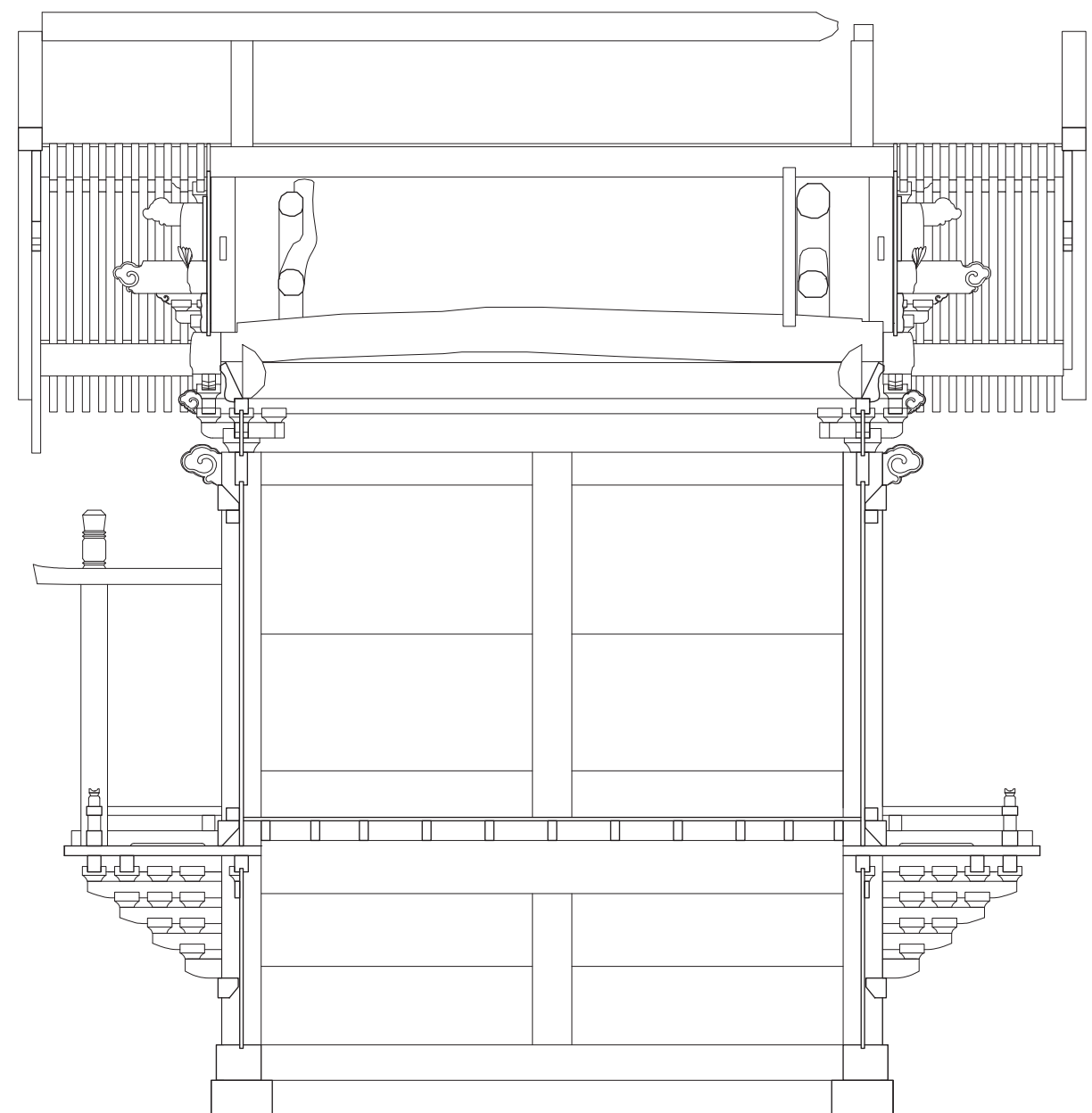
图面 5 竣工侧面图



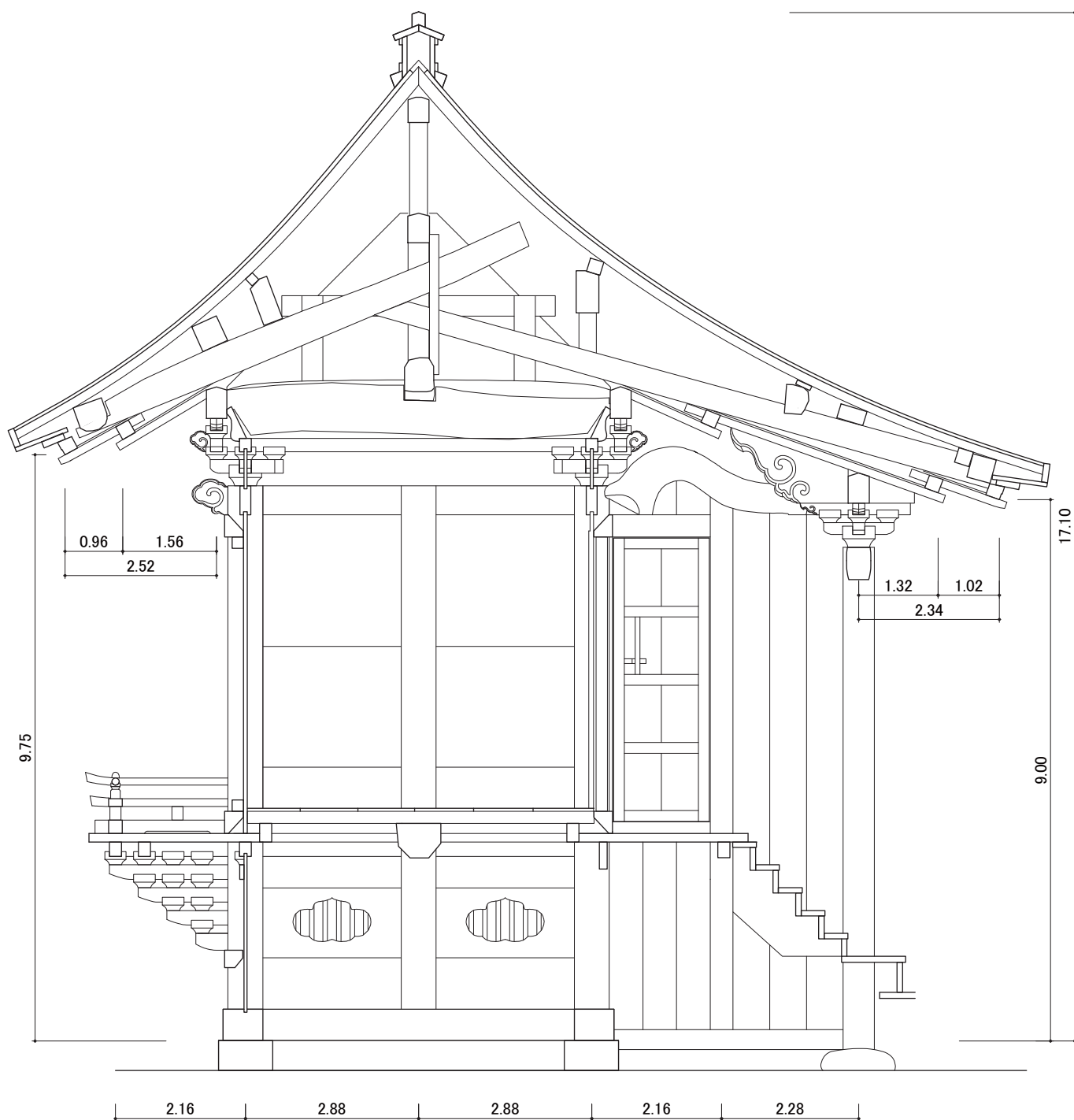
図面 6 修理前側面図



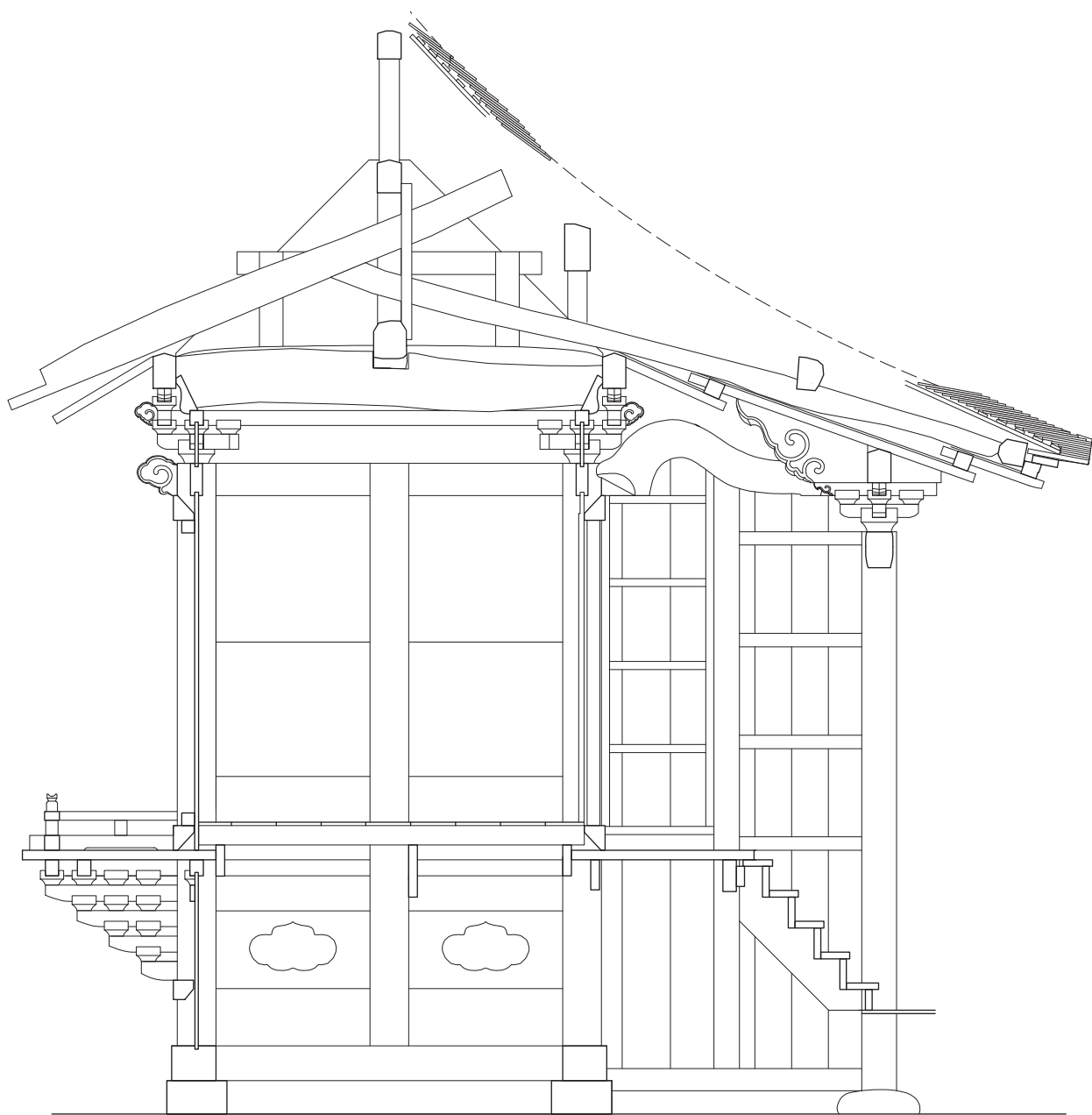
图面 7 竣工桁行断面图



图面 8 修理前桁行断面图



図面 9 竣工梁間断面図



図面 10 修理前梁間断面図

